

「アマダイの世界漫泳紀」

アマダイ通信NO.72

(Tile fish network letter)

09年 目に青葉映え

青島ビールを友に、孔子と泰山の山東へ！

「放浪の病」勃発、暇を盗み4月半ば山東ツアーに参加する。還暦を過ぎ、そろそろ冥府の勉強に？と、孔子の生まれ故郷曲阜へ。70万坪の孔林には孔子一族10万基の墳墓があり、子貢手植えの楷や、顔回の墓守所等があり、高弟の名前が懐かしい。好学の少年も余命幾許かの老翁となり、ただ諸国を走り回るのみ、なるを思う。

時の権力に受け入れられず、孔子は諸国流浪の末、故郷で数多の弟子と学究に励む。彼の死後一族は歴代皇帝の尊崇を集め、広大な領地を所有、王宮にも比肩する孔府に住み、広大な孔子廟に孔子を祭る。「賢なるかな回や！陋巷にあり」と、時流におもねらずみずばらしい家に住み、粗食に甘んじ、学問に励む顔回を讃えた孔子の望むところであろうか？文化大革命の「批林批孔運動」で命脈尽きるかに見えた儒教の聖地に、珍しく雨が降る。古来この地では「春の雨は油より貴い」と。

雨の中を中国有数の名山、泰山へ。「峨々として泰山の如し」、「斯界の泰斗（泰山と北斗星）」と賛辞に常用され、歴代の皇帝も足を運ぶ。千5百メートルと高くはないが、蛇紋岩の険しい岩山が連なり、深山幽谷を形作る。バスで登る山道の両脇には白や赤、ピンクの桃が綺麗に咲く。雪柳の白、山吹？の黄、若葉の緑も、土の少ない岩場で踏ん張る。中腹でロープウエーに乗換える。雨脚が強くなり、窓からは何も見えない。

登頂を諦め、レストランで青島ビールを飲むことにする。青島15元、泰山ビール30元で、青島を頼むが40元請求される。15元は小瓶だとメニューを指される。下界のホテルでも青島大瓶が15元だったのに。一袋20元のピーナッツを友に、チビリチビリ。登頂組は何も見えなかったと疲れた様子。泰山は時には皇帝にも厳しく臨んだのか？飲み食いすればトイレに行きたくなる。一昨年 of 九寨溝の新式トイレには工夫の跡がみられたが、泰山には進歩の跡がなく、臭くて汚い、水も出ない。初めて中国を統一した秦の始皇帝が、天下一の霊山に登ることで天下統一を世に知らしめたのが始まりというが、歴代皇帝はどのようにして用を足したのか？目覚しい経済発展を遂げる中国だが、高度成長がトイレに及ばないとは！中国人にとってトイレは外部不経済なのか？

アマダイ通信NO.71

(Tile fish network letter)

09年梅の花香る

シルクロードを点から線に！

シリアの首都ダマスカスは世界最古の町の一つ、7千年前の遺構もあるという。ヨルダンの首都アンマンも歴史の古さでは負けていない。この正月休みはシリア・ヨルダンに行くことにする。振り返ればこの数年、唐の都西安（長安）から始まり、敦煌、ウルムチ、トルファンと旅し、一昨年の夏はイラン（ペルシア）、去年の夏はウズベキスタンに足を運んだ。気が付けばシルクロードを転々としていたことになる。井上靖の小説に心躍らせた少年の頃の想いが蘇ったか？ならば点を線に繋げよう。取り敢えず戦火の続くアフガニスタンとイラクは無理だ。シルクロードの西の果て、地中海岸を目指すことにする。

アフリカの大地溝帯に産声を上げた人類が、進化を遂げながらエジプトから更に北上、地中海とユウフラテスの大河に挟まれた地、メソポタミアに文明の華を咲かせた。以来、この地には余りにも多くの民族が去来し、数多の文物が取引され、幾多の王朝が栄えては滅びた。栄枯盛衰は世の習いとは言え、都度激しい摩擦が起こり、多くの血が流され、無数の英雄譚と幾倍かの悲劇が産まれた。ヒーローとヒロインの世界へ飛ぶ。

カタールは出稼ぎの国。ドーハは人種のるつぼ！

ビールのないドーハ空港で七時間の乗り換え時間を潰すのは大変。ドーハ空港は人種のるつぼ。レストランの厨房はインド、中国、アフリカンで男だけ。客は日、米、欧も混じり、チャイニーズはアフリカや中東への出稼ぎか？小柄なインドネシアの若い女性。同じイスラムの中東でメイドの出稼ぎか？入国のセキュリティで「こんにちは」と声をかけて来たのは、日本にもいたというパキスタン人。出稼ぎで成り立つ国だとよく分かる。

3時間のフライトでダマスカス着。小さく古ぼけた空港。トイレには便座がなく、3ドルでハイネケンを飲む。昔の日本の田舎の駅を思い出させる、待合室のベンチの合成皮革の表面は破れ放題。至る所にアサド大統領親子の肖像。クーデターで政権を握り30余年間独裁を敷いた父のバース党政権を、父の死後、現在42才の医者だった息子が継いだ。「社会主義」を標榜するが、生産手段の国有と一党独裁を社会主義と考えるエセ社会主義者。

中国人かと思っていた飛行機前席の三人連れの家族。到着ゲートに数人のスーツ姿の出迎え。胸元に赤いバッジ。北朝鮮の要人か？シリアは北朝鮮の数少ない友好国。北朝鮮からの核の持ち込みも疑われる。先頃その「核施設」をイスラエルが空爆した。公然たる秘密の自分の核武装は棚に上げて。

前線の国へ

シリア・ヨルダンに行くというと、決まって大丈夫なの？と質問される。確かにパレスチナの問題は未だ解決されず、その方向性すら見えない。ツアーの間にもイスラエルがパレスチナのガザ地区を空爆、多くの命が奪われた。ヨルダンはかつてパレスチナゲリラの根拠地となり、イスラエルが攻撃、結果、ヨルダンとパレスチナゲリラの激しい戦闘の場となり、現在も難民キャンプには多くのパレスチナ人が暮らす。

シリアもイスラエルとアラブとの中東戦争の当事国として、ゴラン高原がイスラエルに占領されたままだ。今回の旅は前線の旅になる。大丈夫かと心配するのもわかる。だが所詮は商業ベースのバックツアー、危ない所に行く筈がないと、リスク判断は他人に任せ、そのくせ、きな臭い所を見れるのはありがたいと、野次馬根性を丸出しにする。

だが、砂漠の中でたまに目にする掩蔽壕や撮影禁止の軍事地帯を除けば、シリアできな臭さは感じない。ヨルダンに入ると機銃を構えた四駆が街をパトロール、ホテルの入口で手荷物をX線検査するが、緊張感はさほど感じない。チノ？と呼び掛けられるのは、シルクロードで中国と昔から繋がるからか？日本の存在感の薄さのせいかな？

エフェソスかパルミラか？

ツアー4日目の29日は目玉のパルミラ遺跡観光だ。ダマスカスのスーク（市場）の地下の素敵なレストランで、野菜主体の前菜と、少しのチキンとラムの「ぶっかけ飯」を肴に3ドルのノンアルコールビールで喉を潤し、砂漠の中を中国シェンロン製のバスで230キロ走り切った時は、たっぷり日が暮れる。

陽が西に沈んだからと期待した月は東から上らず、駱駝と王女の影も見えない。一灯だにない砂漠の、満天に小さな星々が煌めく。星が輝きをひそめるにつれ、パルミラの遺跡群が光の塊となって姿を現す。異邦人には昼と同じに見える遅い夕食を、3ドルのアムスビールのショート缶とグラス5ドルのレバノン白ワインで楽しむ。明日陽の光で見ると、ライトアップされた方が綺麗よね！食後、遺跡を歩いて巡る。皆、撮影に余念がない。

その遺跡を翌日バスと徒歩で巡る。とにかく広い！日本を含む国際調査隊の手で発掘が進むが、まだ数分の一も発掘されていないという。が、女王ゼノビアが拠った一際高い山頂のアラブ城から見渡すと、広大な砂漠に数々の宮殿、神殿、祭殿や列柱、巨大な多層式墳墓が散らばり、圧巻だ。トルコで見たエフェソスの遺跡をも圧倒する迫力だ。

年間雨量60ミリの地で雨に遭う

夕陽を拝もうとアラブ城に上るが生憎雲が空一面を覆い、早目に退散。土産物屋を覗く。夕食まで時間があるので軽食堂の店先でビールを頼む。生が1杯5ドルだという。ホテルのレストランでもハイネケンが3ドルだと粘り、4ドルにさせる。同行者2人も加わり、持参の百円ショップのつまみで酒盛り？が始まる。シャッターを押してもらったお礼にポラロイドを撮ってやると、底に粉？が残る独特のコーヒーをご馳走してくれる。

万事が早く運び、夜も昼と同じレストランでビールと5ドルの白ワインを一杯飲み、酔った勢いで8時半には寝てしまう。12時頃目を覚まし、シャワーでも浴び、日本から持参のワンカップでも寝酒に飲むか、と起きようとするとう電気が消える。よく停電するとは聞いていたが、初体験だ。夜中だからか自家発電の気配もない。もう一度寝付けずにいる内に電気がつく。カーテンで囲っただけの狭いブースでシャワーを浴び、日本酒を飲み直し、再び寝床に入る。

朝食の席での会話によると、前夜は10時頃にも停電したらしく、この時は直ぐ自家発電機が動いたが、騒音がひどかったという。外に出ると路面が濡れ、水溜まりも。年間降雨量60ミリの町で珍しく雨に遭う。

朝暗い 5時にアザーン、イスラムは働き者！？

朝5時というのに、お祈りを呼び掛けるアザーンの音が闇夜を裂いて響き渡り、目を覚ます。ここはパルミラ。シリア砂漠の真中に花開いたオアシス都市。地中海とシリア内陸部、更にアラビア半島やメソポタミアを結ぶシルクロードの要衝として繁栄した。特にBC1世紀末からAD3世紀にかけ、中国とヨーロッパを結ぶシルクロードの隊商都市として栄華を極め、30万の人口を誇ったという。今は人口7万の観光と農業の小都市だ。

荒城に月は上らず、残された神殿や宮殿、列柱が闇夜にライトアップされ、美しく浮かび上がる。古来、早起きは三文の得。夜は早く寝、朝早く起きて日の出と共に働けば稼ぎも増え、豊かになれる！と。しかし、272年クレオパトラも足元に及ばぬ才媛を謳われた女王ゼノビアが、三度の戦いの末にアウレリアヌスのローマに屈した後は、六世紀以降、ウマイヤ朝、アッバース朝のイスラムの支配の下でも、再びの繁栄はなかった。

十代で隊商として頭角を現し、25才で認められて15才年上の未亡人のスポンサーと結婚、利に聡い開祖モハメッドの教えを忠実に守りながら、彼らはなぜ往時の豊かさを取り戻せないのか？朝まだき、モスクはアッラーに祈りを捧げる人々で一杯だ。町の名前の由来というナツメヤシ（ギリシャ語でパルマ）は昔と変わらずたわわに実る。王女の胸に似て。

肖像画家の多い国

シリアからヨルダンへ、陸路国境を越える。シリア側はフリーパス、ヨルダン側に乗用車が数珠つなぎになり、トランクを開け野菜や果物まで日用品を広げる。シルクロードの民、隊商の末裔の面目躍如？関税と物価水準の彼我の差が産む運び屋稼業？時代遅れの重商主義ビジネスが国境一つ挟み成り立つ。そこに経済的問題が見て取れる？

我々もバスのトランクからスーツケースを引っ張り出しX線検査。免税店で缶ビールを買う。1本1ドル、ロング缶1・8ドルと安い。シリア砂漠のパルミラからダマスカスへ戻り、地中海沿いに南下、国境を越えアンマンに。年間降雨量60ミリの砂漠から600ミリは降る地中海性気候の世界へ。緑が増え、オリーブやアーモンド、時に葡萄の木まである石ころだらけの畑に、所々キャベツ等の野菜畑。世界が変われば生活も住む人も、宗教も変わる。

荒地に天幕を張り放牧するイスラムのベトウィンと、多様な人種、宗教、生活様式が入り組む豊かな沿海部。未だナショナリティを持ち得ぬリージョンをナショナルたらしめようとするのか？寒村出の軍人から身を起こし、血なまぐさい政変を繰り返し権力を確立した、アサド家二代の大統領と、片やマホメットの血を引くという、由緒正しいハシミテ王家の王の肖像画が、両国には溢れる。

ペトラ、再び砂漠へ

旧約聖書、いやそれ以前からの遺跡の残る世界を彷徨えば、見るべき歴史には事欠かない。その頃日本は何時代だったと落ち込む輩もいるが、考えれば当たり前。4百万年前アフリカで頭角を現した人類の祖先アウストラピテクス・アフリカヌスは、150万年前に火を発見、百獣の頂点に立つ。まず大地溝帯を北上、エジプト文明を華咲かせ、次にメソポタミア文明を築く。人類の二足歩行の距離と時間を考えれば、彼我の文化に数千年の差があるのは当たり前。腹一杯食べて飲み、次に飲み食べできるまで二足で歩ける距離を考えれば、パルミラにしる、ペトラにしる、今あるような砂漠の真中に突然出現する筈がない。

少なくとも人間の時間軸で考えたとしても、人類の祖先がさほど頭を悩まさなくとも水と食糧が手に入り、簡単に身を隠し、夜の寒さを凌ぐことができる程の水と緑に恵まれていた筈。でなければ彼らは次の希望の地へ移るよりも、豊かなその地で凄惨な生存競争を繰り返すだけで、地球の表面に周く存在することもなかった。それとも学説には反するが、人類は多少の時間差はあるにしる、地球上に同時多発的に発生したのか？

飛行機とバスを乗り継ぎ、砂漠の中の広大な岩山を削り貫き神祭殿や宮殿、ローマ劇場の廃墟が散らばるペトラの大遺跡群を足で巡り考える。希望を求め、破壊と殺戮を繰り返し、懲りずに今も同じ地でそれを繰り返しているのか人類よ！と。

死海を泳ぎイスラエルへ！

出エジプト後40年間の彷徨の末モーゼが辿り着き、臨終の地となったネボ山頂から遙か見下ろした死海へ、夕闇を降りる。「イスラエル建国」以来60年、3次中東戦争から40年。イスラエル建国が米欧の帝国主義的策謀によるものであれ、それぞれを完全に殲滅するまで戦うのはもはや非現実的ではないか？世代も代わり、共存を模索する潮流もある。パレスチナとイスラエルの平和共存はできぬか？故郷を追われたパレスチナ人にはイスラエル・英・仏・米が経済的損失を償い、三教徒が対等の条件で平和に暮らせぬか？パレスチナ人のガイドに問うが、ノンだという。

リゾートホテルで夕食後、ベリーダンスを久しぶりに楽しむ。カイロ、イスタンブールに続き三度目。無料のショーだが雰囲気につられカクテルを頼む。死海に因み？その名もブルー。メニューの7の数字を見て14ドル出すが28ドル要求される。メニューの数字はヨルダンディナールだという。それにしても1ディナール2ドルとは切り上げもいいところだ。

翌朝、いよいよ死海へ。汚れ切った乾季のラオスのメコン川で、ピリピリ痛んだ大腸癌の手術跡が又痛まぬか気になるが、幸い何事もなく、塩分30%の死海に浮く。何時の日か、浮いたまま対岸のエルサレムに辿り着くことが、できるようになるだろうか？

アマダイ通信NO.70

(Tile fish network letter)

連休で心騒ぎ、矢も盾もたまず「東北」へ！

お盆休みにウズベキスタンへ行ったばかりというのに、9月末が飛び石連休で4、5日休みが取れるとなると、心が疼き出し止まらない。台湾や中国の近場の安いツアーを探し、「東北」へ。大連は二度目だが、旧満州ツアーは大連から入るのが一般的。新疆からの帰途、大連に一泊したのは何時だろうか？中国も去年の五月の九寨溝以来。七月の大連はえらい蒸し暑かったが、今回は暑からず、寒からず丁度いい。二度目も空港から旅順に直行。道中の景色は余り変わらないように見えるが、日露戦争講和会議の場、水師営の、当時を復元した小さな農家の周りにはマンションが立ち並び、建築中の三棟の高層マンションが見下ろす。土産物屋も綺麗になり、売り子もしつこくない。日露戦争の激戦地203高地も再訪、露軍が樹木を切り払い、塹壕を廻らせ、206メートルの山頂が3メートル吹っ飛んだ激戦の地にも、再び夏草が生え、背丈が伸びた木々に早くもドングリが実る。アルバムや絵葉書、果物や清涼飲料を売る店は変わらないが、ここも売り子の声は少ない。

郊外の旅順から大連市街へ。古い集合住宅を取壊し新しい高層住宅が連なる。農家の陸屋根には黄金色のトウモロコシが干されている。途中市電に乗換え、新市街へ。丘陵地にゆったりとビルが散らばり、NEUE SOFT等の社名。ソフト会社やコールセンターか？再びバスに乗り星海海水浴場へ。かつて日本人のため開発された海水浴場の週末。9月下旬なのに泳ぐ者、貝殻探す者、渚で恋を語る？者などで賑わう。隣接の「東洋一」の広さを誇る星海広場の周りにはぐるりと超高層マンション。かつての日本もそうだったように、今時の韓国人や中国人も「東洋一」が大好きなようだ。走る車も新しいモデルの外国ブランドが多い。角張った古い車はタクシーだ。旧市街の中心、中山広場を満州国時代の大和ホテルや横浜正金銀行等のクラシック低層ビルが囲み、それを睥睨する派手な超高層ビル。急速に「近代化」が進む。最初の夜の「故郷料理」。味はまずまずだが量が少ない。以前は皿の上に皿を重ね、大量に食べ残していたのが、ツマミにも足りない。青島ビール大ビン25元、紹興酒150元。ビールを2本飲み、超高層ビルの最上階、58階のクラブ？で雑技を見物する。小中学生くらいの子供達がアクロバティックに演じる。ビール乾き物付きで1時間楽しみ、3千9百円。一瞬美空ひばりの歌思い出すが、「越後獅子」とは別世界？

二日目は5時半のモーニングコールに起こされ、朝から5元の缶ビールを買い、瀋陽まで4百キロ、4時間の汽車の旅。沿線の駅前には新しい高層マンションが軒を連ねる。荒廃した官営工場もいずれマンションに変わるのだろうか？所々に赤い横縞の煙突と蒸気発生機がセットになった石炭火力発電所。大連から遠ざかるにつれ収穫期のトウモロコシ畑、瀋陽に近づくとも水田に黄金の稲穂が頭を垂れる。北瀋陽駅に降りる。大連に比べ人が多い。北京や上海のように人が湧き出て来るが如しだ。心なし大連の方が車も家も見栄えがするが、瀋陽も活力では引けを取らず、街のスケールは大きい。一番の見所は清朝初代皇帝、女真族のヌルハチが作った清朝最初の古宮。国力を反映し、規模、豪華さでは北京の故宮＝紫禁城に比ぶべくもないが、清帝国はここに始まる。帝国滅亡後2百年経ち、新たな「中華

帝国」は復活するのか？土産物屋の呼込みに入ると人を割けぬ程に労働コストと生産性が上昇、ツアーの食事も適量に絞る程の物価上昇局面を切り抜け、格差を克服、更なる高度成長と一大経済帝国への発展はあり得るのか？中国「東北」の「繁栄」に、真の「帝国」への野望果たせず朽ちた満州国と満州鉄道の亡骸を眺め、日本経済と日本のこれからを想う。同じ運命辿ったやも知れぬ、満鉄調査部に集い散った東大新人会の諸先輩に我が身を重ねる。

「東北」＝「満州」の玄関口が大連。社会主義活動で弾圧受け、挫折した東大新人会先輩諸兄の多くが、地下資源豊富で豊かな平原に、「五族共和」の新天地を作ろうと最初の一步を印すが、待っていたのは二度目の挫折。財閥の侵略の片棒担ぎ、当然手痛いしっぺ返しを受ける。理想と挫折は表裏。理想追わぬ者は挫折を知らず。挫折知らぬ人生は詰まらず。大連の戻り、満鉄の宴の跡、旧日本人街を訪ねる。偶々廃屋の門が開き、好奇心旺盛な「熟年探偵団」、異国で「不法行為」は如何なものかと一瞬ためらいながらも、誰とはなしに中に入る。壁も天井も崩れ落ちた一階に、蛍光球一つの昼行灯。台所と思しき隅に水道たれ流し、人の気配。軋む階段を上がると煎餅布団を敷くベッドが二つ。足下に踵潰れた汚いズック靴が転がる。別の部屋のベッドに白い蚊帳。出稼ぎ農民工が「不法占拠」中か？もう一つの中国を知る。

二度目のクアラルンプール・ボルネオ植樹へ

3年前に植えた熱帯樹の苗木が大きな熱帯樹林に育っているジャスコの全面新聞広告を見て感動、自分の目で確かめ、もう一度植樹しようと、10月下旬のジャスコの植樹ツアーに参加する。パーム椰子のプランテーションから這い出して、🌳の植えた木の上で好物の熱帯フルーツを食べながら、オランウータンの娘や息子も歓迎してくれるだろう。今回はクアラルンプールからもう一人の娘、元マラヤ大学からの交換留学生アップルちゃんも同行してくれる。

アザーンの音が聞こえる！自家撞着と尻拭いと！

朝五時半、暗闇の中、アザーンの音が響く。人口の六割のマレー人がイスラムだが、女性のスカーフ姿と時折見かけるモスクを除けば回教国とはわからず。酒も飲み中華料理には豚も出る。回教国とは言え、民族も宗教も多様。前日飛行場から直行したディナーショーも、言葉は分からぬながらボルネオの原住民、マレー、チャイニーズ、インディアンその他、多様な民族の多彩な音楽と踊りと衣装が披露され、フィナーレは多様性、悪く言えばごった煮の大団円、舞台狭しと踊りまくる迫力のスペクタクルだった。英国から独立後、60年代の中国系のシンガポールの分離独立と内戦を経てようやく一つの国としてまとめ、ここまで来た苦労と努力が偲ばれる。

錫鉱山跡のパヤインダ国立公園に2004年9月に植えたパパイヤやマンゴー、ドリアン等の苗木が太さはそれほどでもないが、背の丈どころか二倍、三倍の高さに育つ。粘土質の荒地に赤土を土盛した上に穴を掘り植えた苗木が、粘土にまで根を張り水はけをよくしてい

る。今回はその隣に、地元の小中学生とジャスコの現地社員を含め3百人ほどで、野生動物の餌になる実をつける木を植える。なんでこんな緑濃い所に木を植える？という疑問は空路海岸線からマレー半島に侵入すると直ぐ判明。平地といい、山といい、濃いパーム椰子の緑で覆われている。薄い緑は植えたばかりの苗木や幼木だ。日本と同じく国土の70パーセントは森林だが、その半分はパーム椰子畑だ。これが森林と言えるのか？

環境に優しいと「植物物語」を売りまくるジャスコが、パーム椰子畑のために餌場を失った野生動物を救え！と、世界野生動物基金(WWF)とマレーシア環境保護局の熱帯雨林植樹の呼び掛けに応え、🐘はその尻馬に乗りジャングルの泥の川を泳ぐ。川辺にぽっかり荒地がある。伐り出した木材の集積場で、土が固くて木が生えないという。70年代から80年代、日本の商社が東南アジアの至る所で熱帯雨林を乱伐、日本に持って来た。その跡地はパーム椰子林にあら方変わったが、その最後の尻拭いと、野生動物の食べる実のなる木を植えるという形で、多少の罪滅ぼしをしようという訳だ

トイレは角？丸？…三鷹クラブのネットワークを世界に！

昨年亡くなった高名な建築家黒川紀章設計の、クアラルンプール空港のトイレの便座は四角だ。上半身をお尻の四点で支える。妻の女優若尾文子も角便座で用を足すのか？お尻も丸いから、便座は全体で体を支える丸がいいが、角便座で用を足しボルネオに飛ぶ。高層ビルやマンションも林立、空港も建替中で、近代的大都市に変貌中のサバ州都コタキナバル経由でリトル香港サンダカンへ。更に四百キロ走りジャングルの町スコウへ。四年前は半分未舗装だったが、殆ど舗装済みだ。両側にパーム椰子のプランテーション。林の向こうに所々搾油工場の煙突がヌット突き出る。90年代に入り環境意識と健康志向の高まりとでパーム椰子畑が増えた。合成洗剤による環境汚染と肥満を防ぐための植物油の消費拡大、更にバイオエタノールが野生動物の餌場を奪う。

名門マラヤ大卒、26歳の才媛、元東大交換留学生アップルちゃんに一年振りに会う。去年庄野真代の国境なき楽団に同行、ペナンの障害児施設を訪問した時は、彼女をクアラルンプールの庄野さんのディナーショーに同行したが、ペナンの障害児施設まで同行すれば彼女の視野も広がり、現地で国境なき楽団を応援する日本人駐在員のネットワークに繋がれたのに！と反省した。今回はクアラルンプールのパヤインダ国立公園の植樹だけでなく、ボルネオにも同行。アブドラ会長、尾山社長他現地法人幹部を、日本から同行したイオン元副社長の常磐顧問から、日系事務機会社の営業担当の彼女に紹介して頂く。併せてイオンの植樹をその会社が手伝うことにならないか！12月にマレーシアで東大受験・留学希望者説明会があり、彼女が留学生OBとして話をするという。大学も受験生・留学生をリクルートするというだけでなく、できればこういう機会に留学生の同窓会も併催、海外同窓会を組織したら基金集めにも有効ではないか？彼女も積極的に参加したいという。そういう場ができれば🐘も参加、三鷹寮のネットワークのグローバル展開に繋がりたい！

マレーシアは三回目、今更マレーシア本でもない、今回は読みかけの単行本の他に新

書一冊と日経新聞、それに成田で買ったニュースウィークを持ち飛行機に乗る。が、帰る前日には殆ど読んでしまい、単行本を少し残すだけとなる。6時間の帰りの機内で読む物がなくなり、異国では日本語の本も買えない、と不安になる。同行のジャスコのオバちゃん達は読む物なんかなくてもちっとも困りません！と涼しい顔をしているが、活字を読むのが習慣化している●には、読む本がないというのは恐怖だ。幸い、土産物を買うペトロナスタワーのショッピングセンターに紀伊国屋があると、我がマレーシア娘。土産物には目もくれず、彼女に紀伊国屋に案内して貰い、読みでがある文藝春秋を日本の倍以上の値段で買う。が、翌日は飛び立って直ぐ出た機内食でビール二本と白ワイン二杯飲んでゲーゲー、機内の当日の朝日新聞と日経新聞に目を通すのがやっとで、成田着。

アマダイ通信NO.69

(Tile fish network letter)

08年金木犀咲く

風濤と西域物語の中央アジアへ！…●の夏休みウズベキスタン日記

8月8日出発のウズベクツアーまで1月を切り、ニワカ勉強の準備をする。ウズベキスタン、中央アジア、シルクロードをキーワードに丸善の新書コーナーを探すが、収穫ゼロ。関係ない新書11冊をついで買いする。新宿の設計事務所への営業の帰途、紀伊国屋で検索。ウズベクでは出て来ず、中央アジアで何冊か。取り敢えず講談社学術文庫「文明の十字路口-中央アジアの歴史」と文庫クセジュ「現代中央アジア」の2冊買う。シルクロードブームも下火か？脳弱体強の●には歴史認識、世界認識を深めるいい機会だ。

今度こそ！と思ったメキシコ・キューバツアーは不成立。エッ？と思ったミャンマーと懸案の南アも催行中止。南アはジンバブエの難民や石油、食糧高で治安が悪化しているようだ。チベットも外国人受入再開の新聞記事を見て旅行社に連絡したが、まだ駄目。結局JTB旅物語で、8月8日からウズベク8日間の旅をする。新疆、昨夏のイランに続くシルクロード第3弾。今回は娘に振られ、一人旅。繰返す栄枯盛衰、そこに暮らし続ける人々、資源高、食糧難の冷戦後グローバリズムの中で、シルクロードの民の行末は？資源高から資源枯渇が意識され、ドラスチックに構造変換が進む世界へ！気持ちは逸る。

8月7日夕方、お台場のサントリーに寮一年先輩の筑紫常務を訪ね、「大鋸屑パレット」の営業。翌朝8時過ぎ成田空港集合で旅立つというのに、新橋の美々卯でうどんスキで一杯、凍結酒を飲み過ぎる。翌朝4時に起こされ、慌てて荷作り。高田馬場へ出たら池袋で人身事故、山手線ストップ。急遽西武線に乗り直し、新宿から大江戸線で御徒町へ。日暮里からスカイライナーに乗るが、8時15分の集合に30分ほど遅れる。関空経由でタシケントまで11時間、何かハプニングの予感がする。中学時代貪り読んだ、井上靖の戦争とロマン、革命と恋の世界へ！気分は高揚する。

意外に緑濃い？オアシス都市タシケント

成田から関空経由でウズベキスタン（ウズベク人の国の意）の首都タシケントに、夕方5時過ぎ着。時差4時間。ウズベクツアーから帰国、成田経由で関空に帰る途中の、チェニジア・モロッコツアー仲間の岐阜の三橋さんと成田でバツタリ。関空で一度飛行機から降り、空港内を一周、再度、同じ機内へ。韓国、中国上空、広大なタクラマカン砂漠を飛び、天山山脈かパミール高原か、雪山を越える。不毛の荒地から荒磯に生えるイワノリの様に大地に緑が増え、それが短冊状の畑になり、緑が濃くなると、そこがウズベキスタンの首都、タシケント。オアシス都市。国内人口の10%程、230万人が住む中央アジアの中心都市だ。年に10回ほどしか雨が降らないと言うが、思いの外木々の緑は濃く、気温39度。草木の葉は埃を浴び、いささか疲れ気味だ。湿度が低いとは言え暑い。

ウズベク最初の食事はホテル。メインディッシュは鶏ステーキエビチリソース風。本当はこれも名物料理の蒸餃子だったらいいが、間違えて先着のツアーに出したらいい。中々の味でビール中ビン一本では足りない。白ワインを頼むが、赤はあるが白はない。ウオッカを頼む。SARBAST500mlが6500スム（10スム約1円）、1ショット3500スム。さすが旧ソ連圏だ、ウオッカが幅を利かせる。ホテルの部屋は広くバスタブもある。粘度色のお湯だが一風呂浴び爆睡。翌朝6時ホテル発、古都サマルカンドまで、ウズベクの新幹線、特急列車レギスタン号で300キロ、4時間。朝食は弁当で中身は期待できない。前夜のお湯の色は気になるが、持参のポットで湯を沸かし、カップ麺に注ぐ。

レギスタン号車内、一等車の6人掛けコンパートメントで、朝自分で炒れたコーヒーで弁当のサンドイッチを頬張る。ヨチヨチ歩きの子供が近づく。可愛い！早速秘密兵器、富士フィルム製ポラロイドで撮る。次々に子供が、ファミリーが、女車掌が、撮れたての写真に歓声を挙げ、楽しい交流が始まる。車窓はジャガイモやトウモロコシの緑が広がり、南米原産の二つの作物の人類への貢献の大きさと南米のインディオの悲惨な歴史を想う。小麦畑は黄色く刈り取られ、集落の間隔が間遠に、緑が薄くなると山がみえ、パミール高原の端っこだという。単調な景色に眠り込む。ただと思ったお茶6人分が千スム（百円）。

モスクは美しく、アザーンは聞こえず

ウズベキスタン第二の都市サマルカンド、古来シルクロードの要衝。多くの王朝が栄えては滅び、建設されては破壊された街。ジンギスカンに破壊し尽くされた町をチムールが新しく作り直した。街中至る所に、丸いドーム屋根を持つ回教寺院のモスクと美しい尖塔のミナレット、宗教学校のマドラセがあり、壁や天井を彩るタイルの青と幾何学模様が美しい。が、回教国というのに、ミナレットからは中東のように、目を覚ますほど大きな、礼拝の呼び掛け、アザーンは響かず、モスクにも礼拝の姿はない。音量を大きくしないよう規制しているという。マドラセは多くが土産物屋に姿を変え、シルクロードらしく壁掛やジュウタン等の絹製品、特産の綿を使ったTシャツやバッグ、民族衣装、彫金の壁飾り等、種々雑多な物が売られ、商売熱心な売り子と楽しい？駆け引きが続く。

ガイドのドン君は真面目で優秀、真直ぐな眉に大きな目、鼻筋の通った好青年だ。友人

から借りたDVDで日本に興味を持ち、独学で短期間に日本語を習得、大学を終えJICAで翻訳の仕事をし、ウズベクで十人余りしかいない日本語ガイドをしているという。観光会社を起し、政治家になり国をよくしたいという25才。そんな彼でさえお祈りも断食もせず、豚肉を食べ、酒も飲む。政教分離のイスラム国家、世俗国家だ。タシケントの駅では皮を剥いだ丸裸の豚を担ぐ男がいた。どこのレストランでも酒が出る。ただビールとワイン、ウォッカくらいで、ビール中ビンが4ドル、ワインがボトルで8ドル程と、この国の所得レベルからすると割高だが、異教徒にも気楽な国だ。

青の都、イスラム世界の宝石の異名を持つサマルカンド。美しいが埃っぽい町。北緯40度と故郷秋田と同緯度の街で、見掛ける花や木は故郷のそれと違わないが、元気がない。最高50度近くまで上がる暑さと、年に十回程しか雨が降らない乾燥した気候にバテバテだ。冬はマイナス40度まで気温が下がり、40センチの積雪があるという。この冬の雪が地下水となり恵みをもたらし、過酷な環境に住む人々を明るく、人懐っこくするのか？ ホテルで結婚式がおこなわれている。3時で仕事が終わる土曜日、明け方まで夜通しパーティーが続く。夕食後、覗いてみる。大音量の音楽に合わせ若者が前列で踊り、思い思いに食べてはお喋り、楽しそう。一緒に飲めと誘われるが、翌朝も旅立ち早い！

立派な灌漑水路と消滅する？アラル海

青の都サマルカンドから、ティムールの生れ故郷シャフリサブスへバスは走る。灌漑水路が縦横に走り綿の花が白い。ジャガ芋と思ったが綿だという。水の来ない所は雨水に頼り小麦を作る。ソ連時代に国土を挟むアムダリア、シルダリアの二大河川から水を引き、ウズベキスタンは大綿作地帯になったが、国際規格には合わず、ロシアに売るしかない。加工産業は育っていないという。いびつなモノカルチャ経済の結果、両大河の水はアラル海に届かず、干上がりつつあり、水不足は深刻である。そのためにも二大河の流域の中央アジア五ヶ国がまとまって河川を管理、モノカルチャ経済化され、一国だけではうまく切り盛りするのが難しい五カ国で経済共同体を作れば、バランスの取れた発展ができるのだが、ロシアを向く国、EUを向く国とあり、難しそうだ。

シャフリサブスへの途次並木に桑の木。さすがシルクロード。だが輸出する程はないという。チムールの生まれた町の彼の宮殿アクサライの、彼の銅像前で、純白のウェディングドレスとタキシードの何組もの新婚が練り歩く。ウズベクホルーンに景気づけられ、シャンパン片手の友人達が陽気に続く。昨晚の結婚式でも酒を飲んでいたとガイド。気楽なイスラム国家だ！都市部のサラリーマンの平均的月給が4万円程で、高率の関税で守られている国産車大宇（紆余曲折を経て、今はウズベク資本）の最安車が百万円。人口の6割が農業に従事、貧しいながらも食べるには困らないようだが、年率10%程のインフレが更に高進、格差が拡大した時、イスラム原理主義が台頭し、社会が混乱しないか？

1990年のソ連圏の崩壊と91年の中央アジア諸国独立に伴い、ウズベキスタンもソ連から分離・独立。独立時のウズベキスタン共和国カリモフ大統領が、新生ウズベキスタン共和

国の大統領に横滑りし、選挙の洗礼を経て、任期9年の大統領職を継続、独裁に近い。遅れた国だから、開発独裁は仕方ないとガイド。社会システムもソ連時代のものを多く引き継ぎ、市場経済化途上だ。ソ連時代の教育を受けた高年層と、新体制で教育を受けた若年層の意識のギャップも深いという。ほぼ全員が義務教育を受け、6割が高校へ、3割が大学へ行くというが、大学を出てもいい就職口が少なく、進学率が下がっているという。

砂漠の真ん中にチャイハナ、水不足のオアシスでも泳ぐ！

かってイスラム世界の学術の中心だった、ということは、世界の文化の中心だった古都ブハラで早起きし、通信68号の原稿を叩く。トイレを使い、レバーを押すが流れない！洗面はどうか？水が出ない！夜間給水制限しているのか？水不足が深刻だ。前夜泊まったサマルカンドのプールの水は冷たかったが、キレイだった。地下水を汲み上げ、そのまま使っているのか？震えながら泳いだ。ブハラのプールは小さい上にもう何日も替えていないのだろう、濃い緑だ。泳ぐ気にならない。サマルカンドもそうだが、水道の水も茶色だ。量も質も問題だ。ブハラに二泊、モスクやマドラセ等、世界遺産を巡る

オアシスの町を回る度に砂漠を越え、防砂の葦の植栽を越えて地を這う砂嵐や、野生のロバ、ラクダを初体験する。リスのような小動物や、名も知らぬ小鳥の飛び姿も。不毛に見える砂漠にも、目には見えないが、これらが餌とする花や実をつける植物や昆虫、更にこれらを餌にする猛禽類もいる筈だ。二頭のメスを従え、サンダルを「はいた」ロバに哮えられ驚く。誰かが捨てたサンダルに足を突っ込んでしまったのだろう。途中でトイレ等はなく、男女に分かれ、何度も地球大のトイレで用を足す。

ブハラからヒブアへ。道中何も無い砂漠に忽然と現れた茶店、チャイハナで昼食。こんな所で洗った野菜や果物はお腹を壊す。サラダとデザート、西瓜とメロンは出ず、発酵させないパンの一種ナンと、そばの玉子焼きのせでビールを楽しむ。砂漠の真ん中だから高いたらうと思いきや、中ビン1本4千スムと意外。ヒブアで一番のリゾート風ホテルの、小振りでエメラルドがかったプールで同世代？の仏・伊の紅毛の男女の巨漢に混じり、泳ぐ。男の髪の毛、女の肌の張りは日本人の勝ちだ！と変な優越感を覚える。夜のヒブアの街、二重の城壁に囲まれ丸ごと世界遺産の、城壁博物館都市を散策する。光に淡く浮かぶモスクの青いドームとミナレット、青いタイルと土壁のコンストラストが幻想的だ。

朝顔に釣瓶取られてもらい水？手動でもウオシュレット？は気持ちいい！

翌朝、ヒブアの街を散策。車は進入禁止。昨夜月明りと淡い照明の下で見た青いドーム屋根と高く聳えるミナレットを持つモスク、半ば土産物屋やホテルと化した教場のマドラセは陽の光の下でも美しい。手作りのラクダの毛のスカーフ、コーラン台、麵棒等も売る。平日と言うのに近在から集まった地元民が日用品を買うバザールは人でごった返し、モウモウと立ち込めるケバブを焼く煙と匂いに包まれ、「外食」を楽しむ。炎天下結婚式を挙げ、広場で音楽を流し踊り誘うが、乗りが悪い。花婿と友人が年だからと、ガイド。両手にバ

ケツ下げ水運ぶ乙女。釣瓶や手押しポンプで井戸から水を汲む。古い句を思い出す。砂嵐が襲い埃だらけでも、湯船に浸かることはなく、週に一度水浴びするくらいという。

広い道をトロリーバスが走り、中層ビルが整然と立ち並ぶ近代的な街、ソ連時代に作られたウルゲンジヘバスは走り、そこから最後の宿泊地タシケントに飛ぶ。最終日、朝ゆっくり起きモスクやマドラセを廻る。地下に大きなお清めの場とキレイなトイレ。手動式ウォシュレット、シャワー水栓付。チップ不要。気持ちいい。トイレは並べてキレイとは言えないが2百から3百スムのチップが要る。最後、市場とソ連時代からの百貨店グムを覗く。三階建てのデパートというよりスーパー。物は豊富だが少し高そう。市場は前日のヒブアと同じくらいの賑わい。道中食べて美味しいと思った干葡萄を土産に買う。

夏は39度、40度の灼熱の世界、雪山と砂漠、オアシスの国、ウズベキスタン。乾いた地に用水路を隈無く張り巡らせ過ぎ、アラル海が干上がりかけるが、農作物に飲ませる水を優先したからか、まだ釣瓶井戸が活躍、ホテルの水も茶色に濁り、お腹を壊す。やっぱり日本がいい。和食と演歌と大和撫子だ！モスクもマドラセも、ウズベクで綺麗な物はみな先人の残した物。現代人が造った「新幹線」が時速70キロ、水道が黄土色、お腹壊す観光客続出では先が思いやられる。25才のガイドが12月に埼玉の人に招待されて来日するので、皆で一席設けることにしてメーリングリストを作る。

帰国後の仕事帰り、酔っ払って小平に着くと急に土砂降り。折畳傘では防げず、びしょ濡れ。麻昆のスーツで、翌朝見るとクシャクシャ。その朝のNHKで中国の水不足と水質問題を放送。揚子江以西は量はあるが水質悪化が深刻で、進出した日本企業も苦勞。工業用水を再生し循環使用するホンダの工場。翌日は民営化されたマニラの水道事業に進出し、日本の技術を導入、現場に権限委譲しインフラを拡大、2百億円売上げる三菱商事が取り上げられる。☀も電源開発の井水利用の専用水道システムの営業を手伝っているが、電発もチマチマと国内で専用水道システムを売るだけでなく、貪欲な外資ファンドの餌食になる前に、水とエネルギー問題解決のために、そのノウハウと資産を有効活用し、世界に貢献できないか？併せて三鷹クラブのネットワークのグローバル展開もできないか？と、土砂降りの雨でデッカチの頭を冷やされ☀は考える！？

アマダイ通信NO.68

(Tile fish network letter)

08年百日紅咲く

シルクロード(ウズベキスタン)で茶色の水飲み、お腹壊す(詳細次号..再見!)

気をつけた積もりが、荷物出しでせかさされ、十分煮沸しない湯で作った味噌汁で・・・。

アマダイ通信NO.67

(Tile fish network letter)

08年 紫陽花の盛季に

知人・友人各位

チベット騒乱に続く四川大地震は中国の抱える問題を浮彫りにしたが、去年の同じ頃、震源の辺りをウロウロしていた。沿海と内陸、都市と農村の格差、産業開発と住民生活向上のための投資のどちらを優先するか？限られた資源の重点投資、傾斜配分は仕方ないが、我々が体験した日本の高度経済成長に比べると余りにも落差が大きく、極端だ。

去年の5月の連休、九寨溝観光の帰途走った川沿いの一本道と、都江の沿川が今回の被災地だ。あの美しい風景がズタズタに切り裂かれ、険しい山中にこんな大都会がと驚いた町々が、瓦礫と化している。幻の「統一国家」を根拠にした統一の強制がいつまで可能なのか？その鍵は格差解消、民生向上にあるが、そちらへ舵を切れるのだろうか？

キューバツアーに続き、動乱のチベットツアーも中止、ユーゴへ！

3月の年度末には、カストロ存命中にキューバを見ておきたいと、キューバツアーを申し込むが、集客が少なく催行されず。5月の連休は天空列車に乗ってチベットに行ってみようとチベットツアーを申し込む。ツアーは成立したが、今回の動乱で中止の連絡。そこで急遽、チトウ大統領の下、独自の社会主義路線を歩み、チトウ死後、内乱を経て連邦解体の道を進む、旧ユーゴスラビア連邦諸国へ飛ぶ。

ユーゴの轍踏む？中国

久振りのユーゴの勉強の手始めに、ユーゴ現代史(岩波新書)やバルカン半島至急報(徳間文庫)を読む。スターリンに反旗を翻し自主管理と非同盟主義を掲げるチトウのユーゴを、毛沢東の中国は修正主義と非難した。フルシチョフのスターリン批判後、ソ連を中国はユーゴと同じ修正主義と批判しつつ、超大国批判ではユーゴと手を握り、非同盟主義の共同歩調を取る。更に「改革解放」以降中国は、「社会主義市場経済」の名でユーゴと同じ「自主管理路線」を取る。

豊かな北のスロベニアと貧しい南のマケドニアまで、経済格差に起因する地域対立、複雑に入組むセルビア、クロアチア、ムスリム、アルバニア等の民族対立が絡み、統合の要のチトウの死後、ユーゴは内戦を経て四分五裂した。チベットで、新疆で、経済格差が拡大し、民族対立がくすぶる中国はユーゴの後を追うことはないか？

入組んだ多民族国家、複雑な歴史、耐え難い経済格差、それをまとめ連邦を治めたのがパルチザンの英雄、建国の父チトウだが、民族、歴史、格差と中国も同じ矛盾を抱える。それを労働者農民の同盟による社会主義建設を掲げる共産党が統一して、ここまで引っ張ってきた。だが改革解放と先富論に基づく経済発展で格差が拡大し、社会主義の旗も色あせた。代わりにナショナリズムを煽ると、チベット、ウイグル、回族等少数民族の民族意識も高揚、経済格差も絡め、東北、内蒙古も含め分離・独立の機運が高まる。チトウ無き

ユーゴの問題は、優れて中国の問題でもある。そして旧ソ連圏の問題も、同じ意味で中国の一つの未来形であり、それを占う上で重要である。

ヘルプアライアンスとEHMと殺戮と

成田から、ミュンヘン経由でクロアチアの首都ザグレブへ。ルフトハンザの機内で「エコノミック・ヒットマン」(東洋経済新報社)を読む。EHMはコンサルやエンジニアリング会社の社員として、世界各国の指導者をアメリカの商業利益を促進する巨大なネットワークに取り込み、最終的に負債という罠に絡め取り、忠誠を約束せざるを得なくし、政治的、経済的、軍事的必要がある時に彼等を利用する。引換えに彼等は工業団地や発電所、空港を国民に提供、元首としての基盤を固められ、アメリカのエンジニアリング会社や建設会社に莫大な利益を得させる。EHMの手に負えなければCIAが暗躍、更に米軍が出動する。何やらロッキード事件の田中角栄、インドネシアのスハルト等の興亡を彷彿とさせる物語だ。91年からのバルカン戦争も同じ構図か？

機内で、世界の恵まれぬ子を救おうという、LHのヘルプアライアンスにカンパする。しかし唯一の帝国アメリカが、発電所、港湾、道路、鉄道等が途上国の開発に必要だと世銀等の国際融資を受けさせ、大規模建設工事のプロジェクトを通じ、ベクテルやハリバートン等の米企業に資金を還流させ、一部は途上国の支配者の懐に入る。エコノミックヒットマンの画策で雪達磨式に債務を増やす結果、途上国経済を破綻させ、軍事基地設置や国連での投票、天然資源獲得等でアメリカにとり有利な条件で取引せざるを得ないように追込む。言うことを聞かなければ更にCIAがクーデターや暗殺を画策、それも奏効しなければ米軍を派遣、帝国の支配を貫徹する。結果富める者は益々富み、貧しい者は更に貧しく、帝国の力には抗い難いとすれば、恵まれぬ子達のためにすることは何か意味があるのか？

更に唯一の帝国の意に逆らえぬ日本の政府開発援助は如何なる意味を持つのか？クーデターで地位を追われたインドネシアのスカルノ、ピープルパワーで亡命を余儀なくされたフィリピンのマルコス、凶弾に倒れた韓国の朴正熙の末路は何を意味するのか？日本の借款や援助は唯一の帝国に手を貸し、補完するだけだったのか？91年からのユーゴ解体時に、民族浄化阻止と民族自決を旗印にユーゴ内戦に介入し、激しい空爆を行ったNATOの役割は何だったのか？ドイツのフィッシャー外相等、60年代のシュウデントパワー世代の政治家の役割は？NATOの爆撃への彼等の同意は許されるのか？興味は尽きない。

東の九寨溝、西のプリトビツェ

クロアチアの首都ザグレブ。聖母被昇天大聖堂や聖マルコ教会、共和国広場、石の門等を見学する。ヨーロッパならではの、歴史を感じさせる美しさだが、大聖堂近くの公衆トイレはモダンで清潔だ。便座の後から青いプラスチックタンクが前に出、楕円便座がクネクネ回転して消毒するには驚いた。市場は露天の屋台にも物が溢れ、野菜や肉、魚を天秤で秤り売り。見たこともない野菜や名も知らぬ魚が、遠い異国にいること意識させ

る。鰯と飯蛸、ジャガイモのフライを摘み立話する男女四人にご馳走になる。お返しにインスタント写真を撮ってやり、盛上がる。戦争中もかくも屈託なく談笑できたか？広場に色採りどりのトラムが走る。石造りの歴史的町並と最先端交通システムが共存する。

ザグレブから2百キロ走り国境を越え、旧ユーゴで最も豊かなスロベニアのブレッド湖へ。美しい新緑の間に赤い瓦とクリーム色の壁の綺麗な集落が点在する。雲間に雪を頂く山頂が見え隠れするとオーストリア、イタリアとは山一つ隔てたりリゾート。チロルと似た佇まいだ。冬は20センチの氷が張りスケートとスキーが楽しめ、夏でも26度の避暑地。一周6キロのサイクリングを楽しみ、ミズスマシの様に細長いボート滑らせる漕ぎ手達。桜咲く湖岸にチトウ大統領の別荘があり、今は500平米のスイートもある高級ホテルに姿を変えている。手漕ぎボートでブレッド島へ。湖を見下ろす古城で七面鳥の昼食を摂る。ビールの小瓶もコーヒーも2.5ユーロ。

再度入出国手続きをして新緑の映える「西の九寨溝」、クロアチアのプリトビッツェ湖群へ。大小16の湖が時に紺青、時にエメラルドの水を湛え、無数の滝が湖群を繋ぐ。滝の高さと数の多さ、遊覧船まで走る湖のスケールではプリトビッツェか？湖の色の深みと流れの雄大さ、湖水に映える、白雪頂く山の高さと美しさは九寨溝か？新緑の美しさと湖の数、青池の蒼の神秘さ、海岸線の美しさでは我が白神山地の十二湖も負けてはいない。九寨溝は便座に消毒薬入りのビニール袋を取りつけて快適トイレを実現していたが、こちらは完璧な水洗トイレだ。九寨溝では●の巨大な？一物がビニールの袋に時につっかえて不快だったから、トイレはこちらの勝ちだが、汚水はどう処理しているのだろうか？今や垂れ流しでは世界遺産の指定は無理なのだ。我が日本トイレ協会も快適トイレの実現に腐心する、富士山の世界遺産指定はいつされるのだろうか？

まだ続く民族浄化、今も残る弾痕、美しいブナの新緑の中にトウチカ？

大きな湖を15分程船で横切る。ブナの新緑の間に碧の小さな湖が点在し、せせらぎが流れ落ちる。美しく静かに時の流れる人里離れた地が、ナチスとチトウ率いるパルチザンの激戦の地となり、最近も、クロアチア独立戦争の主戦場になって破壊され、世界危機遺産リストに載ったという。見れば林の中に古いコンクリートの小さな構造物。第二次大戦のトウチカだという。斜面を利用した二階建て。独立戦争でも「廃物利用」された。大地は血に汚されても尚美しくそこに在るが、難民となったセルビア人は報復を恐れて戻らず、スロベニア人のガイドもそれを悪びれる風もない。未だ民族浄化は続く（「終らぬ『民族浄化』セルビア・モンテネグロ」《集英社新書》）。彼らが再び笑顔で交わる日は来るのか？

クロアチアからスロベニア、更にクロアチアへ。その都度の入出国手続きが煩わしい。数百年、いや千年以上もの長い間に、今やそれぞれの申告で帰属する民族を決めるしかないほどに、住む場所も、血すら複雑に入り混じってしまった。それを21世紀の今も、民族自決というもっともらしいスローガンの下にむりやり分離、細分化し、殺し合う愚を繰り返す。何故独立を欲したと聞けば、豊かなスロベニアの富が、何故貧しい地方のために

使われなければいけないのかと答が返る。

旧市街を残す都市は歴史を感じさせ、街並みが美しい。農村の新緑も美しいが、麦畑を除き耕す景色は見掛けず、家畜の姿も少ない。雪深く、冬季オリンピックが開かれる内陸の豪雪地帯ゆえ、耕作はこれからなのか？スロベニアの農家は大きく、綺麗に手入れされているが、クロアチアのそれは小振りでも手入れも悪い。しかし富む者、強者が、何故弱い貧者を助けられないのか？間に横たわる異民族と歴史の深い溝。農家の壁には弾痕が今も残り、ミサイルが突き刺さった戦車が雨ざらしになっている。

分別でなく、今少しの「狂気」を！アドリア海で泳ぐ！

アドリア海の真珠ドロブニク。瀟々なりゾートホテルの目の前の紺碧の海を、白亜の御殿の如き豪華客船が滑る。一昨年今頃ギリシャを旅した時は、水温が低く泳げなかった。ユーゴはもっと北だから泳げないと思いながらも海パンは持って来た。アドリア海でも泳いでみたい！海辺に降り手で水を掬うと何となく泳げそう。明早朝のフライトだから今しかない。急いで朝食を済ませ海に飛込む。眼鏡越しに綺麗な水底。朝の水は長く浸るには冷たい。早々に上がる。馬鹿なことをと思いながら又、やっちゃった。歴史が進む時は分別よりも「狂気」が働く。若き●然り。ユーゴ、お前もか！

50クウナ（1クウナ約23円）払い、世界遺産ドロブニクの城壁上の遊歩道を巡る。今回の独立戦争で、狭い旧市街に2千発の砲弾が打込まれ、3ヶ月間水も電気も止まり、300人が死亡、350人が負傷したという。戦争の傷跡は綺麗に修復され、観光客でごったがえし、大型客船が数隻優雅な姿を横たえる。人々の心に打ち込まれたミサイルの傷は癒えたのか？それとも古代から繰り返されて来た略奪と殺戮の記憶が積み重なり、いずれ又報復の炎が吹き出すのか？殺られる前に殺れ！屹立する城壁の遥か下に深い憂いを湛えた紺青の海。茜色の花咲く屋根の向こうの煙突の上に、一羽の白い鷗。

世界遺産古代ローマの要塞都市コトルへ、更にアドリア海を南下。申訳程度の出入国審査で「外国」へ。こんなものなら国を分ける必要があるのか？国境越えのガソリンスタンドでビールのスモール缶が0.7ユーロ、ロング缶が1ユーロ。0.8ユーロのショート缶も。安い物が少ない。クロアチアに比べ古い車が多く、家並も貧相だ。深く複雑に入組んだ入江に沿って走る。フェリーで対岸へ。5分の舟賃がバスごと14ユーロ。トンネルを抜けると氷河に削り取られたフィヨルドの奥、高い石灰岩の山の麓に難攻不落の城塞都市がある。オスマントルコも攻略できなかった城壁が、取り残された様に黒ずみ山に延びる。ドロブニクに比べるべくもないが、賑わうカフェ。人々の心の要塞はいつなくなる？

アマダイ通信NO.65

(Tile fish network letter)

08年春一番吹く

王室専制解体、ネパールは何処へ？

専制王制を廃止し、共和制へ移行、新憲法を制定することになったネパール。だが、王制の即時廃止を主張する毛沢東派が制憲議会を一時離脱する等、政情不安が再発、ツアー不成立の心配もあったが、国民投票が行われることで妥協が成立、予定通り成田を発つ。

強行スケジュールの始まり

師走の29日、定刻より少し遅れ、5時半頃成田を離陸、7時間ほどで、バンコク着。入国審査に時間がかかり、12時過ぎにホテルで用意のラーメンを食べ、シャワーを浴び終わると、彼氏とラブ電話の娘はスヤスヤ寝息を立てている。6時にモーニングコールで起き、慌てて食事して7時半に空港へ向かう。強行スケジュールの始まりだ。

この間まで季節はずれの洪水が荒れ狂い、多くの犠牲者を出したバングラディッシュ上空を飛び、ネパールへ。ヒマラヤの雪山を遠く眺め、段々畑を舐めるように旋回し、排ガスと土ホコリで？霞むカトマンズ盆地へ。ボーディングブリッジもなく、徒歩で入った国際空港のターミナルビルは、レンガ作りの二階建て、ラオスのビエンチャン空港に似る。前面を仕切った運転室に助手も乗せ、インドタタ社製のオンボロバスはカトマンズを横目に、世界遺産の、9世紀からの旧王宮や寺院の立ち並ぶバクタプルへ。埃っぽい曲がりくねった細い道の両側に土産物屋や露店が並ぶ。インドのニューデリーの様に、車が止まる度に物乞や物売りが窓を叩く訳でもなく、大金持ちの白亜の豪邸脇にブルーシートのスラムが連なる訳でもない。並べて貧しい感じだ。少ない富が国王一人に集中するからか？

憲法を改正し、専制王制もようやく廃止され、共和制になる。武装蜂起して国土の8割を支配したと豪語する毛派も新体制に加わる。中印二大国に挟まれ、政治、経済的に大きな影響を受けてきたヒマラヤの小国に希望を！と願わずにはいられない。隣国ブータンでは国王主導の上からの民主化が進み、開明的な国王と評価が高いが、隣国に教訓を得た、国民の側からの民主化、王制廃止に対する、王制と王室利権存続の先手なのか？

闇夜の携帯は懐中電灯に変身！朝日に輝くヒマラヤ

2泊目はヒマラヤ眺望の絶景地ナガラコット。黒煙を吐き出す煉瓦工場が散在するカトマンズ盆地を抜け、野菜や小麦の段々畑を縫い、標高2千mの峰を目指す。舗装も剥げかかった細い山道で上りと下りのバスが睨めっこ、思わぬ「渋滞」に巻き込まれる。全員がバスを降り、ヒマラヤの絶景を鑑賞、感動の声と共にデジカメのシャッターを一斉に押す。

ようやく動き出すと、先に故障車があってバスは通行不能だと、小型バンに乗り換えホテルに。その日のハイライト、ヒマラヤの夕陽には間に合わず。建築途中のホテルのレストランで、大瓶4百ルピー(1ルピー2円)の地ビール「エベレスト」を飲む。湯船はなしで、シャワーだけ浴びベッドへ。夜中目を覚ますが電気は止まり、ロウソクも燃え尽き、真っ暗闇。充電中の携帯を手探りし、液晶の光を頼りに夜中のトイレに入る。就寝も早かったので、寝る気にならない。携帯に土産話を打込むにも、真暗闇でキーがわからない。寝る

しかない。目覚めては二度、三度と目を瞑る。電気の偉大さをあらためて知る。

モーニングコールで5時起きすると電気も回復。日の出前とは言え既に薄明るく、屋上は三脚を構える人で一杯。中、韓、米と国際色豊か。防寒着が必須と言われた割には寒くもない。目の前にはマナスルだ、ダウラギリだ・・・と言われても、どれがどれか直ぐ忘れる。2千キロに渡る標高7、8千メートルの世界の屋根の絶景が目の前に広がり、朝陽に光り輝く。忙しくシャッターを押す。昨日あんな峠で沢山写真撮るんじゃなかった！の声。

雪男 (Yeti) に乗り、ポカラへ！ ドンツクの太鼓に迎えられる

登った山道をカトマンズに下り、プロペラ機でポカラへ。右側C席が特等席と添乗員。一つ残った最前列C席から窓越しにシャッターを押し続ける。ヒマラヤの雪融水が運ぶ土砂が、地球の窪みを長年月かけ埋めたポカラの平地を、雪融水が又、長年月かけえぐり、百メートルもの深さの溪谷が何本も走る。中国黄土高原の侵食谷の様だ。冷たい水が石灰岩を削り白く化身する。谷底を白蛇が走り、大湖を三つ作る。朝に夕に、紅く燃える白銀の世界の屋根が湖水に映え、はやる気持を乗せ標高千mのポカラにYeti航空機は無事着陸。

途中舗装もない狭い道をガタゴト走り、バザールの曲がりくねった道を器用に擦れ違い、オンボロバスは町外れのリゾートホテルへ。深い侵食谷の段崖の先端にある素敵なりゾート。プールはあるが、今は冬、さすが●も泳ぐ気にならず、持参の海パンは役目を果たさない。ヒマラヤの見えるバルコニーでネパール本を読む、気分は最高だ。

翌朝も早起き、初日の出を拝もうと近くの山へ。かつて反戦闘争の現場でよく聞いたドンツクの太鼓の音に迎えられる。「日本山妙法寺」と書いた山門を潜り、境内で初日の出を拝む。ヒマラヤの山々もナガラコットより近くに見えるが、雲に見え隠れ、盛り上がりには欠ける。下山後朝食、バザールを散策、お寺も拝観。庶民は中国製の安物をバザールで買い、スーパーでは日本製等を売るといいうが、スーパーといっても単なる個店の寄せ集めだ。

神々の山と地上の喧騒と貧困と・・・共和制へ、国民に幸あれ！

翌朝も別の山へ。ヒマラヤが大きく迫り眺望抜群。狭い山頂に鈴成りでシャッターを押す。段々畑に朝靄たなびき、石積みの家から朝餉の煙が上がる。絞った乳を運ぶ少年、軒下で髪を櫛削る少女、重い背負籠を頭の帯で支え、仕事に出る老女。擦れ違った子供がキャンディ、マネーと手を差し出すのは興覚めだが。再び雪男に担がれカトマンズへ。騒音とクラクション、土埃と排気ガス、喧騒の街、カトマンズ。観光で2、3日滞在するにはいいが、とても住める街ではない。国土の半分を険しい山々が、国富の半分を国王が占め、庶民の生活は貧しい。カトマンズの中心部でさえ穴ぼこだらけの道だ。

230余年に及ぶ王制を廃止、共和国になるネパール。世界の最貧国の、世界で最も豊かな王の財産をどうする？「国营」航空、電力、電器etc。国民の手に取戻し、経済開発と国民生活の向上に役立てられるか？二大武装勢力の王の軍隊と毛派の人民解放軍の融合、共和国軍への再編は可能か？クーデターや内乱の恐れは？上から下まで、権力を私物化し賄賂

が横行するという、腐敗した政治・官僚制の建て直しはできるか？

重い荷を背負う苦力、荷台一杯の荷物を運ぶ自転車やリヤカー。首都の中心の穴ぼこだらけの道を埃と排ガス、騒音を撒き散らし走るインド製バイク、日本製中古車。インド製のスズキだけでなく、60年代の名車カローラも走る。その脇で籠を敷き野菜を売る老女。

指差す先はエベレスト、名簿集め同窓会することに！

6日目、ツアーの目玉の一つヒマラヤ遊覧飛行。5時モーニングコール、5時半食事、6時ハイアットホテルのロビーに集合。が、満天の星空に突然深い霧が立ち込め、飛行は中止。冷たい水のプールサイドで本を読み、午後から市内観光。これで4日連続未明の起床。体調崩す者が続出、途中でタクシーを拾いホテルに帰る組も。☀も体がだるく、せっかくの民族舞踊のディナーショーも全く食欲が湧かず、地酒もまずい。風邪薬を飲む。

最終日の翌4日、又、5時起き。6時に空港に向かう。またもや霧が立ち込めるが、8時過ぎにはそれも消え、順番にフライト。窓が凍結し大丈夫かと思うが、直射日光を受け、直ぐに溶ける。ヒマラヤ2千kmの山脈を一望、あれが！とスチュワーデスが指差す先には白く輝くエベレスト、世界最高峰！

今回のツアーは旅費の高い時期なのに年長カップルが多い(17人中5組)。聞けば弁理士、医者、証券会社のフィナンシャルプランナー、会社経営等、現役の年寄(私より)が多く、駒場の中国語クラスで2年上の公認会計士も一緒。年寄と女性も働く、労働生産性を高めることで経済を発展させ、世界に貢献、一人当たり国民所得を向上させるという、これからの日本の先取のようなツアー。再会を約し、成田で解散する。

アマダイ通信NO.64

(Tile fish network letter)

08年 元旦

ツアー近く、ネパールの俄か勉強開始！

この正月はヒマラヤで初日の出を拝むことにする。かつて1970年のいつだったか？学生運動で起訴され中野刑務所に拘留中に、所々黒く墨で塗り潰された読売新聞で、ネパール国王、象に乗って結婚式！という記事を見た。殆ど新聞記事になることも少ない小国が、ヒマラヤの麓にひっそりと存在して、まだ絶対王政を敷き、車でも、馬車でもなく、象に乗って行進するんだ！と、驚いた記憶がある。

その国王が身内の王族によって王宮で惨殺されるという悲劇が数年前にあり、政情不安定になって、跡を継いだギャネンドラ国王が強権・独裁政治を行い、逆に民主化運動が活発になる。その中で王制の即時廃止と共和制を求める急進派として、毛沢東派が台頭、武装闘争を行い、二重権力状態になる。その後、武装解除した毛派も含め民主政権が組織され、王制は廃止、新憲法が作られることになり、現在に至る。

極度の貧しさと、美しくも険しいエベレストやマナスルを頂く、ヒマラヤ山脈の記憶しかないネパールに、マオイストがいる。かって毛沢東語録を手に、文化大革命万歳！を叫んだ●の好奇心は限りなく刺激される。ネパールへ！俄か勉強開始！

K君への手紙・・・ヒマラヤに学校を建てよう！

この正月休み、ネパールへ行こうと丸の内の丸善でネパール本を探すが、1冊しかみつからない。アジア、アフリカや南アメリカなど発展途上国には一般の関心は余り向かず、それらの国を扱った本を探すのは苦労します。綺麗で清潔、豊かな北米やヨーロッパの旅も素敵ですが、貧しくて不衛生、不便な所での生活を余儀なくされている、多数の人々も又、同じ人間です。個人ができることは高が知れていますが、封鎖した安田講堂の壁に黒々と墨書されていた「類的存在としての人間」のスローガンが、頭を離れません。そして先ず知ること。好奇心に突き動かされ、世界へ飛び立ちます。

小平の図書館で検索、4冊借りたら、その中に「ヒマラヤに学校を建てよう！・建築家のボランティア奮闘記」(著者AAF、(株)彰国社発行)があり、読み始める。建築家達がネパールのヒマラヤ山岳地帯で、小・中・高校の校舎建築に挑みます。村始まって以来のプロジェクトに沸く、村人たちの期待と様々な要求。教師の確保にまでも奔走するメンバー。初めての地、初めてのボランティア活動に戸惑いながら、遂に夢を実現する素人ボランティア奮闘記です。著者のAAF(Asian Architecture Friendship)は98年竹中工務店大阪本店設計部有志中心に結成、アジアの開発途上国での学校等の建設支援が目的のボランティア団体。03年ネパールの山村にブッダ・プライマリー&セカンダリー・スクールを竣工。遠方からの子供達のための寄宿舎を作る二期計画と平行、現在、JNFEA(日本ネパール女性教育協会)との提携で、女性教員養成のための女子寮建設計画にも参画しています。(〒541-0053大阪市中央区本町4-1-13 竹中工務店大阪本店設計部内 06-6252-1201 Fax06-6263-9712 HP:<http://aaf.cool.ne.jp>)

談合だ、下請け叩きだ、裏金作り、脱税だと、このところ評判の悪いゼネコンだが、竹中の本社が連絡先になっているから、会社も応援しているんだ！なかなか素敵なことしてんじゃない？偶々大阪ターミナルビルの池田社長に、大阪駅ビル増築の件で、竹中工務店の難波常務をご紹介していただく。挨拶の冒頭その話を切り出すと、盛り上がり、スタッフも同席する。追って、リーダーをしている神戸の竹中大工道具館の赤尾館長から、生徒達がよく勉強し、ネパールの共通一次試験では平均合格率30%のところ、70%あり、進学校化していると連絡を受ける。

ところで、kさん、独身の弟さんがヒマラヤで遭難死、数千万円の保険金等が残ったが、自分達には必要ないので、弟さんの遺志を生かし、ネパールの子供の教育に使いたいと相談を受けましたね。政府任せではネパールの役人が猫ババする、学校を作るボランティアも沢山あるけど、作っただけで機能していないと相談受けたのですが、役立てませんでした。それであらためて電話したのですが、作ってみなうまくいってないでしょという返事

でした。まだあの時の考えが残っているなら、AAFの件を前向きに考えてみませんか？

革命も恋愛も、起業も、冷静に考えることは必要ですが、どうしたら結果が出せるか考えず、粗を探すだけでは前進しません。大略良ければ、細かい所にはエイ！と目を瞑って前に進まなければならぬ時、熱病にうなされるように突き進む時もあります。そうしなければ事は成就しません。今回の秋田の故郷パレットプロジェクトでも、あれがない、これが駄目と言われますが、どうにかここまで来ました。無事スタートできるか？予断を許しません。あとは全力を振り絞り、粘り強く問題を一つ一つ解決して行くだけです。Kさん！一緒に、「ヒマラヤに学校を建てよう！」に突き進み、楽しみませんか？

アマダイ通信NO.63

(Tile fish network letter)

07年ハタハタ漁解禁？

国境なき楽団とマレーシアへ！アップルちゃんと再会！

ホテルに着き世界の恵まれない子供達に楽器を贈り、交流活動が続ける音楽ボランティア、歌手庄野真代さん主宰のNPO法人、「国境なき楽団」(<http://www.gakudan.or.jp>)とこの十月マレーシアへ。ついでに元留学生のアップルちゃんこと、張さんに再会する。

クアラルンプール空港で級友とすれ違い？

ホテルに着き、風呂から上がると電話が鳴る。クアラルンプールで日系企業に勤める元留学生アップルちゃんかと思ったのだが、同室のKさんからだ。懐かしい声。昨年9月、国境なき楽団のマニラツアーで一緒に以来だ。別便で先に着き、外で果物も買って別室に集まりおしゃべりしているという。ついバスローブとスリッパで上階へ。懐かしいマヨラー（庄野さんのファン）の面々が酒とつまみ、果物を持ち寄り早々と宴会をしている。

総勢32名。定員オーバーの5名は添乗員なしの別便で降り、クアラルンプール空港で入国手続き。荷物の受取りも一人で、初めての経験。出口に迎えがいるか多少不安だったが、隣席だった若い女性二人も同じツアーと知り、俄然元気が出る？

荷物受取所で駒場の中国語クラスで1年下の、日本郵船の子会社、日本貨物航空の大槻専務と擦れ違う。旅慣れているのだろう、バグゲーツの身軽な格好で通り過ぎる。女性と一緒に一瞬、挨拶すべきか迷う。暫くしてから、遠くで女性が手を振っている。カミさんだったんだ！ホットする。歩いている間に話したのだろう。「ほらあいつだよ！時々通信なんて変なの送って来る、落第ばかりしていたEクラスの1年上の干場だよ！」

クアラルンプールで焼きソバUFO

クアラルンプールのホテルに着いたら電話すると言いながら、掛け方がわからず電話しなかったので不安だったが、約束の7時半を20分程回り、ホテルのロビーにアップルちゃん

が現れる。自分の車で来たが、休日で交通規制が平日と違い、ホテルに入るのに手間取ったという。二人で朝食、会話が弾む。東大で1年勉強、マラヤ大学に戻り更に1年勉強、日系企業で働き始めて2年。月給が3千ML（マレーシアリングット、1MLは約34円）、年末に1回ボーナスを貰い、親と同居、150万円の国産車をローンで買ったという。

日本のボルトメーカーの営業担当で、ベトナムにも時々行くという。三鷹寮にベトナムの留学生も一緒にいて、●事務所でコンパにも一緒に来たことがあるが、その娘と時々会い、ベトナムでの結婚式に招待されているという。卒業後も国境を越え、OB同士の交流が続くのは嬉しい。いつか点が線に、線が面にならないだろうか？

彼女もツアーバスに同乗、一緒に市内観光。初めて！を連発。我々がハトバスで東京見物するようなものか。昼は中国レストラン、ロイヤルチャイナで飲茶。生ビール一杯17MLと高い。ビールもシンハー、バドワイザー等、輸入物だ。回教国で飲酒人口が少ないからか？飲茶は美味しいが締め焼ソバが日本のカップ焼ソバの味。これはいただけない。

日本がすっかり好きになったアップルちゃん。来年の旧正月は日本に来て、友人宅で過ごしたいという。三鷹寮にいる時に5、6回奥利根の宝台樹スキー場に連れて行ってやったのだが、ハマッテしまったようだ。スキーもしたいという。一緒に滑るのが楽しみだ！

ライブハウスでアップルちゃんもステージへ

市内観光とライブショーの合間にアップルちゃんの手でドライブ。マラヤ大学へ。1学年千人程、小振りだが緑が多く建物もゆったり配置、東大本郷キャンパスの様な高層ビルはない。公園で観覧車を初体験。3回12分というが、4回、5回と回るも終らず。次の客を乗せるためか？頂上で暫く停まる。高所恐怖症患者の●は生きた心地がしない。

ライブハウスは百人程の日本人で満杯。KL在住邦人6千の1パーセント以上集まった計算になる。昨年のマニラのホテルでの、庄野真代さんとゴスペラーのハルさんのダイナーショーも良かったが、狭いライブハウスを二階まで鈴なりにしてのライブも素敵だ。団塊世代？の邦人の親父バンドが前座を務め、ハルさんのゴスペル、真代さんの「翔んでイスタンブール」と続く。

日本から参加した国境なき楽団のメンバーも壇上に上がり、タンバリンを叩き、リコーダーを吹きながら全員で合唱。悲しいかな音痴の●はこんな時に前に出ていくことができない！まして有名プロ歌手と一緒にでは！代わりにアップルちゃんが日本語で熱唱してくれる。客席もステージも渾然一体となり、音痴の●も楽しい。

ホテルのプールでリラックス

三日目の朝、ベナン島へ移動。高層マンションが林立、工場も多い。デルのパソコン工場等もあり、空港にはフェデックスの輸送機が数機。一大工業地帯でもあるのだ。昼はリゾートホテルの向かいの「屋台村」で、海鮮麺をつまみにタイガービールを飲む。大瓶が15ML。日本人学校の生徒と交流する組が半分、残りも島一番の繁華街、ジョージタウ

ン等に出掛ける。プールに飛び込んだのは一匹だけ。

世界中一緒に旅した海水パンツをペナンの海で濡らす。荒い波が砂を巻き、白神山地の麓の浜辺の磯の、澄んだ水の青さに較べると、雲泥の差だ。泳ぐ者もいない。プールで泳いでは、パラソルの下、iポッドで好きな島倉千代子を聴きながら本を読み、を繰り返してリラックス。夕方近く、交流組、買物組も戻り、一緒にプールに飛び込む若者も。

陽が暮れてロビーに集合、昼と同じ屋台村で庄野さんを囲む。思い思いに5ML程の中・韓・タイ・マレーシア等の屋台料理を数皿ずつ頼み、皆でつまみながら盛り上がる。ここで又、駒場の同級生大槻夫妻と会う。隣のホテルに滞在しているという。あらためて正式に挨拶。大槻夫妻は庄野さんとツーショット。更にホテルの部屋で遅くまで延長戦。

楽器携え、知的障害者の施設へ

本番の四日目の午前はダウン症の幼児等のデイサービス施設を訪問。保護者と一緒に通って来ると言う。30人も大人の10人程の子供達を囲み、笛を吹き、歌を歌うと、怖がり泣き出す子も。乗りが良くリズムを取ったり、愛敬を振り撒く子も。

昼は近々のカレー店へ。1階は現地人で一杯で2階へ。バナナの皮を皿代わりに、ご飯やカレー、鳥肉や野菜のカレー煮込みを盛り、現地流で右手でこねて食べる。左手はトイレで使うので不浄とされ、食事は右手だ。タイで食べたモチ米と違い、パサパサして巧く口に運べず、結局スプーンを使う。それに激辛だ。タイガービール子瓶が9ML。激辛カレーでカッカする唇を冷やす。

午後は18才以上の知的障害者の施設へ。学齢の子は公的施設でケアされるが、学齢前、学齢後の子供の教育と自立が課題だという。成人の知的障害者の地域生活をサポートし、働く場の提供(織物、ケーキ・キャンドル・石鹸作り等)と生活の場(Independence Living Home)作りを支援している。笛吹き歌を唱い、庄野さんもヒット曲「翔んでイスタンブール」等数曲唱い、子供達も歌と踊りで歓迎。涙が止まらない。年のせいだろうか？

Asia Community Centre (ACS)

朝訪ねたFirst Step Centre(早期療育センター)と、午後のStepping Stone Support Centre(地域生活支援センター)は1997年からペナン島で地域福祉を実践するNGOのACSが運営している。ACSは訪問した二つの施設の他に障害者の乗馬クラブ、家族や近隣NGOスタッフの研修、国際交流活動、地域リソースセンターなどの役割も担っている。

ACSを主宰しているのが川井さんという日本女性だ。一緒に施設を案内してくれた。年恰好はと同じくらいだろうか？マレーシアに進出している日本企業と日本人の寄付で運営している。昨年、庄野さんと訪問したマニラでも、ケニアでも、女性を主に、日本人のボランティアがその地域の孤児や障害者等、恵まれぬ子供達のために活躍していた。

かつて支援される立場だった日本人が、今、世界中で活躍している。1ドル360円の時代に、海外へ出ることが夢だった日本人の一人として、日本人ボランティアと連携して

今、ここに居る。かつて「世界の農村が世界の都市を包囲する！」、「全世界を獲得しよう！」と叫んだ自分が、世界の農村、発展途上国のその現場に立っている！目的は同じでも、もう一つの方法を実践する人達と一緒に！そんな幾つもの想いが交錯した涙だったのだろうか？（ACS：<http://www5f.biglobe.ne.jp/ace-jps/index.htm>）

商談？成立！真代さん資生堂サロンへ！

資生堂の仕事をしている駒場以来の悪友、編集企画会社前田和男社長から庄野さんの資生堂サロンへの出演依頼がある。ギャラは安い、多分広報誌「花椿」に記事が載り、「国境なき楽団」の宣伝にもなる。社会貢献活動（CSR）として資生堂は色々なボランティア活動を応援しているので、資金的援助も期待可能だ、上にもつなぐと前田君。二人の間を取り持ち、ペナンで庄野さんからOKを貰う。

9月に帰任した三鷹寮の1年先輩の宮村智前ケニア大使と庄野さんを繋ぎ、ナイロビの施設に楽器を送る、「翔んでケニア」プロジェクトが進んでいる。楽器集めも進み、ケニアの良港モンバサまでは同じく三鷹寮で1年先輩の宮原耕治さんが社長の日本郵船に、CSRの一環として無料で運んでもらう。ナイロビまでの楽器の陸送が次の問題だが、資生堂に手伝って貰えると嬉しい。ここは前田君と庄野さんに頑張ってもらおう。

ケニア政府から文化使節としての招待があれば、ナイロビでのコンサートと「国境なき楽団」のケニアツアーもできると、庄野さん。宮村先輩の助けも借り、ケニアツアーを是非実現したい！ヘミングウェイの名作「キリマンジャロの雪」の舞台になったマサイマラのサファリロッジの、文豪が毎晩グラスを傾け、酔い潰れたたというバーで、庄野さんのライブでも聴けたら最高だ！夢は翔んでケニア！

アマダイ通信NO.62

(Tile fish network letter)

07年黄花コスモス咲く

イランって危なくない？

お盆休みにイランに行くと言うと、皆から同じ答えが返ってくる。確かに両隣のイラクとアフガニスタンでは、血生臭い戦争が繰り返され、政情不安を抱え、強権支配の続く近隣のパキスタンや中央アジア諸国でも、時に爆弾テロや、誘拐等が繰り返される。その上、自国の核戦力は増強こそすれ一向に削減せず、イスラエルの核開発には目をつぶるアメリカが、イランの原子力開発を止めさせようと圧力をかけ、北朝鮮と並べ「ならず者国家」等と呼ぶものだから、イランは「危ない国」という印象が染み付いているようだ。

だが、イラクがそうだったように、石油が喉から手が出るほど欲しいアメリカが、無茶な戦争でも始めない限り、イランの秩序は安定している。自由と民主主義の伝道師？！ブッシュが手を組むサウジアラビアやエジプトの政権より、イランのイスラム政権の統治の

方のはるかに自由で民主的だ。自分の言うことを聞けば、黒も白と言うのがアメリカ流だ。イラクで失敗し、アフガニスタンでの失敗も明らか、北朝鮮にも足元を見られているアメリカに、イランでの武力行使などではしない。貧困と抑圧に根ざす問題を武力で片付けようとするのがアメリカで、ベトナムでの失敗を少しも学んでいない。同じ位の代償を払うまで、気づかないのだろうか？教えてやるのが「同盟国」日本の役目ではないか？

危ない！と言われると益々行きたくなる。それに、日本人の先祖が熊の皮をまとい、洞穴に住み、生肉を食べ、狼や熊等と喰うか食われるかの、凄惨な生存競争を行っていた紀元前7千年の昔から、アケメネス朝だ、ササン朝だと、煌びやかな文明の華を咲かせていたペルシャ。そのペルシャが、なぜ経済的に遅れた状態にあるのか？イスラム共和国の実際は？これから先は？興味は尽きない。北京乗継ぎのイラン航空でテヘランに飛ぶ。

イラニアンピア頼みコカコーラ出る

3時頃の予定が、北京からの折返し機の到着遅れで、7時半頃経由地北京に向け成田を離陸。回教の厳しい戒律を旅行者にも強いるシーア派のイランでは、アルコールは御法度だ。生ものも食べられない！遅れをいいことに鮭屋に駆け込む。鮭の他にあら煮やハタハタの一夜干し、お新香まで頼み、暫くまともに飲めないと、鯨飲。昼からいい気分。

機内では直ぐ寝込み、食事で起こされる。イラニアンビール！とノンアルコールビールを頼むが、ニヤツと笑ってスチュワードが差し出したのはコカコーラ。東京銀行のバーレン支店でイランも担当していた、三鷹寮で一年上の辰紘先輩によれば、イランのノンアルコールビールはアルコールゼロだが結構いけるとのことだったが、初体験はお預けだ。フィッシュ！と頼んだ食事も魚の汁賭けご飯だが、カレーとは違いピリツとしない。

半袖シャツに無帽のスチュワードに比べ、スカーフを被り、長いコートを羽織るスチュワードスは暑そう。北京で中国人客が降り、イラン人が沢山乗って満席でテヘランへ。飛行機は古く設備も悪い。今や国際線では常識の、座席の背のテレビもない。ケニアへ行く時乗った、ドバイのエミレーツ航空の至れり尽せりが懐かしい。イランの経済状態の反映だ。日本人女性客もスカーフ、長袖シャツ、ロングスカートで肌を隠し、首都テヘラン着。

時差5時間？真夜中3時テヘラン空港着！

日中は40度を越えるというが25、6度か、夜のテヘランは意外としのぎやすい。入国審査に長蛇の列。トイレは穴の上にお尻をおき、前向きに跨ぐフラット式。命中させるのに手間取るが、手動式ウォシュレットがお尻に気持ちいい。エジプトもそうだが、レストランもホテルの洋式トイレにも蛇腹で伸びた水栓がある。男性トイレにもあるからビデじゃない。分身も流すが、ロータンクが頭上についているので、それ専用ではない。が、ロータンクは壊れているのが多い。ペーパーは品切れ、早速「武富士」が活躍。ホテルを除きトイレには紙がない。ティッシュペーパーは必携だ。役目を終えたティッシュは流すとトイレが詰まるのでゴミ箱へ！と言われるが、日本の習慣でつい流してしまう。

ホテル着 4 時半、まずまずのホテル。バスタブに浸り床に就くが寝就けず、到着早々戒律を犯し寝酒を飲む。トランクに紙パック入りの日本酒を忍ばせて来た。ゴリゴリの無神論者がイスラムの戒律に従えるか！戒律の強制にあらかたのイラン人も困っているのは、国内上映禁止のイラン映画、「オフサイドガールズ」でよくわかる。心の中の神の存在は認めるが、人間が神を創ったのであって、神が人間を造った訳じゃない！神は人の心を幸せにしても、人の楽しみを奪うべきじゃない！百元ショップの茎若芽とスルメの薫製を肴にチビリ、チビリ。

予定を 1 時間遅らせ 10 時に、先ずは 1979 年の革命で打倒されたパーレビ国王の宮殿へ。英露の勢力争いから植民地化を避けんとドイツのナチスにも接近、最後はアメリカと結び、強権体制で近代化を図ったが果たせず。豊かな石油資源も国民の生活の向上に役立てられず、国外追放された。広い敷地の中に小振りだが贅を尽した宮殿が並ぶ。近くの、小川が流れ緑濃い森の中の、野外レストランのテーブル席で昼食を摂る。イラン人は栈敷風に仕切られた席に胡坐を組み、車座で楽しそうに語らい、手で食べ物を口に運ぶ。お昼がメインの食事だという。ベルシャ湾で獲れたという鱒のグリルを肴にノンアルコールビールを初体験。ビール色で泡立つが、アルコール分ゼロで、甘くて不味い。

上善は水の如く、糞転がし思い出す

食後絨毯博物館へ。見事な年代物の絨毯の数々。中国とベルシャの絨毯のどちらが古いか？中華文明とベルシャ文明の対抗意識が強烈だ。王宮の大きく緻密な敷物の上を闊歩する王族とそれを織る貧しい織り子と。次の訪問地ヤズドへ。空港の売店でバーバリアというオランダ製の、アルコール 0% ビールをみつけて飲むが甘い。林檎サイダーの様だ。

岩山と砂漠の広大な荒地を飛び、ゾロアスター教の聖地ヤズドへ。砂漠のオアシスで人口 35 万、建物は日干し煉瓦で造られ、3,4 階までだ。敦煌の飛行場への着陸に似る。古いハンマーム（公衆浴場）を改装した、タイルの美しい、素敵なレストランで夕食。ここはノンアルコールビールもなく、水を食事の友とする。上善水の如しか？下手なビールより水がいい？冷製スープと米、梅干し等 14 種の具が入り、ケニアで見た糞転がしの作品のように見事に丸まった羊の煮込みハンバーグは、ヨーグルトの酸味がきつい。その日はキャラバンサライ（隊商宿）風ホテル。灯りが燈る中庭に水が流れ、幻想的。いい気分日本酒を寝酒。常温でも、暖めても冷しても、水も氷もなしで飲める便利な酒だ。

イラン二度目の朝食は水音のする中庭のテラスで、朝の清々しい空気を吸いながらナンにジャムを塗る。コーヒーはインスタント。持参のポットで沸かしたお湯を、これも持参のコーヒーパックに注ぎ、部屋でコーヒーを飲み直す。世界遺産ジャメのモスクの青のタイルの美しさに目を眩り、ゾロアスター寺院の千五百年続く火の暑さをガラス越しに感じ、鳥葬の丘の沈黙の塔に息切らせ登る。言葉も出ない。この荒涼とした岩山と沙漠の世界で、人は生き、文明を築いてきた。砂漠を次の目的地シラズに走る。小さなオアシスのレストランでの昼食は、サラダに野菜と牛肉のシチュウ。酸っぱ過ぎず食べ易い。DELSTER

LIGHT というノンアルコールビールを飲む。三度目でようやくビールの味がする。

地下水路で潤う緑

食後 20 分ほど走り、80 才のお爺さんを置き去りにしたことに気づき、引返す。点々と緑のオアシスが続き、時に繋がり、ザクロやオレンジ、野菜の緑が目優しい。シラズに近づくと金色の小麦の刈取り跡や、トーマロコシの濃い緑が目立つ。カントリーエレベーターも。小麦とトーマロコシの二毛作の穀倉地帯だ。紀元前 4 世紀、アケメネス朝キュロス王の栄華の跡をパスルガドに訪ねる。キュロス王の墓の他は原型を留めず、荒野に数多の柱が虚しく天を突く。シラズのレストランでの夕食は、民族音楽を聞きながら牛のステーキに持参の醤油をかけ、甘さ押さえめのバーバリアビールを楽しむ。

翌日は来た道を少し引き返し、ペルセポリスの丘に登る。マケドニアのアレクサンダー大王に滅ぼされたアケメネス朝の宮殿、ペルセポリス。木製の屋根は焼落ち、石の柱のみ天を指す。アケメネス朝の繁栄の礎となった沃野は、良質な建材と燃料としての木材も大量に供給した。それ故に、何代かの王朝が栄枯盛衰を繰返す間に、緑も失われたに違いない。ペルシャに次ぎ興ったギリシャの野も又、石野原だった。ローマも然り、乾燥した世界。文明は緑と共に興り、緑と共に滅ぶ？屋根のない宮殿に容赦無く陽は注ぎ、柱は永遠の孤独。朝作ったポットの味噌汁を飲み干す。夜は牛のケバブ。肉は平たく柔らかく香ばしい。khosh govar というノンアルコールビールが喉に沁みる。

シラズは岩山に囲まれた古い都、人口 55 万。町は緑濃く、道の幅広い分離帯には緑の芝と草花、街路樹。サルスベリ、キョウチクトウ、槿と時期的にも日本と同じ花が咲く。昼の暑さ凌ぎに、夜の納涼に、カップルが、ファミリーが芝の上で、飲食しながら寛ぐ。街の緑には水が必要だが、雨の少ない気候で 4, 5 千メートルの高山の雪解けの伏流水を、縦横に巡らした地下水路で流す。中国新疆のカレーズに似る。高名な詩人を祭る廟の地下深く清流が流れ、魚が泳ぐ。鱒ではないという、ハヤか？灌漑で農業も成立っている。砂漠の地下にも水路が走り、点々と赤い目印が立つ。

神の御名において！「男の日」にイスファハンで泳ぐ

安い費用で沢山見学できると考えれば強行スケジュールも苦にならないが、持参の海パンの活躍する機会がない。イスファハンで連泊、ホテル地下の温水プールに浸る。イスラムなので男女一緒には泳げない。普通は時間で区切るが、泊まったホテルは一日交代。男の日でラッキー。シーア派イスラムの、戒律の厳しいイランではトイレは勿論、空港の出入りも左右に分かれ、バスも前後に乗り分ける。もっとも、空港の入り口は別々でも、荷物チェックが終わると直ぐに又一緒になるのは、いかにも形式的でお笑いだが。

ホテルの小さな温水プールで、お祖父ちゃんと兄弟で来ているという中学生くらいの男の子が、Chinese? How are you? と話しかけてくる。ジャポンもコリアンも同じに見えるらしい。Japanese, fine, thank you! came from Tokyo! と返し、片言の英語

で会話が弾む。イラン国民は概して日本に友好的だ。かってイランが石油を国有化し、イギリスの呼掛けで欧米諸国がイランの石油をボイコットした時、窮地に陥ったイランに手を差し伸べたのは、日の丸の旗を掲げペルシャ湾と日本を往復する出光石油の日章丸だ。イラクからも早々と撤退し、アメリカのイラク侵略にも日本は余力を貸していない。

外国人女性にもスカーフと体の線が見えない長衣を強制、男性観光客にも飲酒、短パン、ノースリーブを禁ずる自信と、反面の自信の無さは何処からくる？ 権力を握った時の宗教の強さ、怖さと他方、国民生活を丸抱えすることで不満も宗教に向けられ、背を向けられる。心が離反するだけ、外形基準で信仰を強制する弱さ。強制するほど離反する民心。経済音痴の聖職者による政治が、経済を混乱させ、国民を困窮させる。無謬の神が過ちを犯し、現世の失敗を来世の幸福で購えるのか？ 現世の貧困に耐えれば来世で裕福になれると誰が信ずるか？ まして権力を握る聖職者がしこたま懐に貯め込んだとしたら。産油国でガソリンは月百ℓの配給制。日本の車なら百ℓで千キロ走るし、都会暮らしなら年間4、5千キロも走るのが精々だが、イランでは他に交通手段がないし、老朽車が多いから百リットルのガソリンで幾らも走らない。おまけに1010円が17円になるというので、国民の不満は高まっている。強権的なイスラム体制の下で矛先は何処へ向くのか？

夕食は軽め、誇り高いイラニアンはコミュニケーション上手？

イスファハンのバザールで買物をする。夕食はバザール3階のテラス。イラン風に絨毯座敷に車座。陽が沈み、そよ風が心地いい。ヨーグルトとスープ、ナンが運ばれ、野菜や豆をペースト状にした物をナンにくるみ、口に運ぶ。新顔のノンアルコールビール3horseで喉を潤す。メインディッシュに備え2本目のノンアルコールビールを頼むと、チャイとお菓子が出る。順番がおかしい、早くメインディッシュが出ないかと待っているとブドウも。それじゃいいですかとガイド。慌ててノンアルコールビールを飲み干す。日本の感覚で幻のメインディッシュを待っていたのだ。イランでは昼の食事がメインなのだ。

隣座敷で男4人、女2人の若者。聞けば学生という。酒も入らないのに笑が絶えず、チャイ(紅茶)を汲み交わし盛上る。こちらはツアーに一人参加の男五人だけで車座になり、ノンアルコールビールにブツブツ言うだけで盛上がらない。酒なしで心の垣根を払い盛上られるイラン人は、コミュニケーションの達人だ！ 街で若者がHow are you? Chinese? 等と話掛ける。イスファハンで出発までの短い時間を利用、ホテルの周囲を散策する。豪邸の前でカメラを構えると、傍らの女性が「どうぞ」と親と同居の三階建住宅に招いてくれる。若主人を交え、お菓子と果物の歓待を受け、片言の英語とポラロイドカメラで交流、女性も黒いベールを脱ぐ。なかなかの美人だ。メールアドレスも交換する。

ペルシャの歴史は七千年前まで遡れる。遺跡での説明の度、ガイドのガンバリさんが誇らしげに「日本では縄文時代の・・・」「・・・弥生の」と言うと、日本は何て遅れてたんだ！ と劣等感に襲われる。民族の支配、被支配の繰り返しの、大陸の人類の歴史の、かなりの部分で先頭を走ってきたペルシャ。しかし、街を走る車の多くはオンボロだ。産油国であ

りながら、ガソリンは不足、ホームレスは余り見かけないが、庶民の生活は楽でない。空港も古臭くボーディングブリッジすらない。歩かされたり、バスで運ばれたり。過去への強い誇りの裏に、現状への深い苛立ちを感じたのは、私だけだろうか？

アマダイ通信NO.61

(Tile fish network letter)

07年 権咲く

黄龍死んで土と化し、飛び上がれず！

五月の連休、南アフリカツアーを申し込むも、娘が休み取れるから一緒に行きたいという。既に定員一杯で娘の分は追加できず、キャンセル料払ってキャンセル、中国九寨溝ツアーと一緒に参加する。

波乱の旅立ち、真夜中に成都着

連休初日の4月28日(土)2時55分出発予定のCA機の到着が遅れる。準備を終え、20分遅れで動きだすと直ぐ、落雷を伴う豪雨が襲う。駐機場に戻り、飛び立ったのは6時。初めての経験だ。波乱の予感がする。北京から成都への乗継ぎが心配になる。北京着は現地時間の出発時刻8時20分を過ぎている。荷物を受取り、入国手続、搭乗手続をせかさされ、一時間以上遅れて機内へ。ユーラシア旅行社、近ツリ、トラピクス、東日本、西日本と、日本の九寨溝ツアー客が乗り終えるのを待ち、ようやく離陸。暗闇の中に無数の機体が浮かぶ成都空港。意外と大きい。四川省の面積は四十万平米、人口は重慶を入れて1億3千万人、四川だけで日本一国のスケールだ。民度はトイレでわかる。空港のトイレへ。綺麗に掃除しているが臭い。扉を開けると生々しい物が。吐気を催す。

成都には空がなくても菜花咲く

一時をとっくに過ぎてホテルへ。歯磨きもそこそこに寝床に。モーニングコールを待たずに目覚めると曇天。成都の犬は陽が照ると一斉に鳴き出す、とガイドの馬さん。霏なのか、排ガスなのか？水蒸気だとすれば、水は豊かということになるが、日照不足が心配だ。が、草木は青々とし、渋滞の市街を遠ざかるにつれ陽射しが強くなり、空も青味を増す。盆地で空気が悪いということなのだろうか？麦は既に蒔り終り、菜種を蒔る農民。脇に苗代がある。麦や菜種と稲の二毛作だ。春先にはさぞかし、菜の花が綺麗だろうと想像力が働く。標高3kmを越す仏教の聖地、峨眉山への道中、菜の花街道？では、手押し耕耘機一台、鋤を引く牛を数頭見るのみ。他は人手。急速にモータリゼーションが進む中国で、どうして農業の機械化、耕地整理による生産性向上、生産拡大が進まぬのだろうか？特に水豊かな江南で？人口圧力が強く、余剰労働力を産まぬようにするため機械化が進まないのか？高速道脇の小手鞠の白い花が美しい。

峨眉山雲厚く、幽谷険し

麓でグリーンバスというマイクロバスに乗換え、仙人が住むという世界遺産峨眉山へ。仏教の一大聖地で山西の五台山等と仏教四大名山の一、山全体が風景区。補助席入れても27人全員は乗れず、添乗員はタクシーで後ろから追いかける。標高上がるにつれ霞深く、樹間に白く赤く大輪の花をつけるのはシャクナゲか？カシミヤのセーターをGジャンの下に羽織り、3千99米の山頂まで百1人乗りケーブルカーで標高6百米を5分。雲海を突き抜けると青空。象に乗る金色の普賢菩薩の大仏が、雲海に浮かぶ。山頂に美しく咲くはやはり石楠花。重い荷を肩に、杖突き歩む破れズック靴の苦力。樂山泊。

樂山から成都に戻り、九寨溝へ

奈良の大仏の3.5倍の大きさの、岷江の断崖に刻まれた彌祿菩薩を水陸から見、来た道を逆に成都へ。成都近くは平原が続く。菜の花畑に小麦畑が混じり、コンバインが動く。麦の穂は菜種より短く色濃く、周りで沢山の人が働く。往路で見掛けなかった機械化された風景！来る時はこの辺は寝ていた！成都の市街地近くは耕地整理も進み、一区画が大きい。中国で初めて見たコンバイン。来る時見た地区とこの地区では農法、農地の大きさの差も大きい、多分農業所得の差も大きいに違いない。🍷の目が覚める？寶石屋に寄っても時間が余り、成都の空港の国内線のターミナルの売店にはビールもないので、暇潰しにレストランへ。ホテルのレストランでも大瓶10元のビールが、ここでは小瓶で30元！

雪山越えて九寨溝へ

夕方六時近くの予定が大幅に遅れ、せっかくの窓際の席だが日没後離陸。たった45分のフライトだが標高五百米の成都から、五、六千米の岷山山脈を越え、三千九百米の九黄空港へ。雲を突き抜けると、薄明かりの中に白く光る雪山が連なる。万年雪を頂く岷山山脈。雪山をかすめるように着陸する。ボーディングブリッジに立つ人影はオーバーコート姿。慌ててTシャツの上から長袖シャツとカシミヤのセーターを重ね着。それでも寒い。山道を二時間下りてホテル着は十一時近く。慌ただしく食事。ビールを求めるが冷えたのがなく、諦める。寝つけず持参のワンカップをあおる。

九寨溝の絶景をありがとう！

苦勞して辿り着いた九寨溝。天候には恵まれ絶景を楽しむ。我が白神山地の十二湖、青池のインクを垂らしたような、深く透き通った藍の美しさとは違った、エメラルドグリーンの多彩なバリエーションが続く。エメラルドの湖水のキャンパスに、雪山の白、広葉樹の黄と黄緑、針葉樹の濃緑と、木々の緑をそれぞれに映し、時に揺れ、時に輝く。見れば鱒が群れ、蛙の子がうごめく。湖はエメラルドの川となり、広がると思えば時に細く深く、白く輝く猫柳や薄紫のつつじの島のあわいを流れ、滝となって白い飛沫を上げ、虹を造る。乾いた湖底に、遠くヤクの群れが見える。中国人民に多謝！絶景をありがとう！九寨溝泊。

黄龍死んで土と化す。地球温暖化の影響？

黄龍は今回のハイライト。二日続きの好天だ、ラッキー！高度六百米を八人乗りのゴンドラで5、6分上がり、横に二キロほど歩き最上流の五彩池へ。木道脇の棚田は枯れて黄色の地肌が露だ。幸い五彩池は水を湛えスカイブルーに輝き、水藻が濃いエメラルドになびく。畦の乳白色との対比が妙だ。東西にそびえる美しい雪山。麓まで四キロの木道を下る。水があれば見事だったろう棚田が、飛沫の飛ばない滝が延々と続く。トルコのパムッカレと比べ如何ばかりかと期待していたのだが、無惨に裏切られた。アフリカのキリマンジャロ同様、水源となる雪山の万年雪が後退しているのではないか？温暖化の影響か？対策は急務だ！中国は先ずは温暖化は先進国の責任だ！というが、中国自身にとっても差し迫った問題、今直ぐ手を打つべき問題である。

飛行機飛び立たず黄龍に泊まる

高地の山歩きにアルコールは禁物だ！と、多数の声。クスコのビールは美味しかったとアマダイが一人主張するも誰も飲まない。12時前に黄龍の登山口のホテルでお昼を食べ終え、山に登る。四時半に下山。集合場所の下山口のホテルのレストランで、10元の地の缶ビールにありつく。コップはないという。ホロ酔いで空港へ。標高四千米の峠越えの道が、山肌を葛折れに切り裂き続く。環境と開発、山肌の傷口の大きさに、思いは複雑だ。途中で羊かヤクか？油身の多い夕食をとる。わらびのお浸しにほっとする。7時半頃には空港へ。搭乗手続きを終えるが、上空の風のため成都からの折返し便が来ない。空港から夜の山道を30キロ走り、代替のホテルに着いたのは12時過ぎ。シャワーの湯も出ず、暖房もない。着の身、着のまま眠る。成都の五つ星のホテルで安眠していた筈なのに！

朝早く成都へ！熊猫に会えず！

寝る間もなく五時起床。持参のカップヌードルにお湯を注ぎ、六時半に空港へ。チェックインするが、飛行機はいない。昼には弁当が配られる。今日中に成都に着けるだろうか？明朝の北京便に乗れるか？不安が募る。飛行機を諦めバスの手配をする他の日本人ツアーも。三時過ぎにバスで帰ることに決定する。多少の不満が出るが、道中の岷江の渓谷美への賛嘆の声がかき消す。或いは三峡に、或いはマチュピチュへの道中に似たり。成都近くのトンネルを、12時前に通過しないと通行禁止になるという。トイレ休憩も大して取らず、山道を跳ねるように走り、片側交互通行の工事中のトンネルを、12時まで30分残し通過。反対車線は延々と車の列。11時間余りかけ、1時半頃ホテル着。予定通り日本に帰れる！風呂に入る。パンダには会えなかったが、九寨溝・黄龍の好天を良しとすべきか？

アマダイ通信NO.60

(Tile fish network letter)

初めてのラオス・・・「AEON 桜学校」贈呈式へ

イオン環境財団の二月のブーケット植樹ツアーに続き、イオン1%クラブの春休みラオス学校贈呈式ツアーに参加。ハノイ乗り継ぎでラオスへ。首都ビエンチャンに夜着くが、夕食はなし。二月のツアーでは、バンコク乗り継ぎで夜遅く着いたブーケットで食事の予定がなく、機内食は菓子パンのようなもので、ビールも出なかった。ホテル脇の食堂で、ラーメン・餃子と地のシンハービールの小瓶を一本頼んでお腹を満たしたが、まずい上に日本より高かった。時間があるし、ここで腹ごなししておこう。ハノイのターミナルビルの、半分空き店舗で閑散とした二階にある、乗り継ぎフロアで一軒だけのレストランへ。「名代うどん」の幟が立ち、天ぷらうどんやカツ丼、うな丼のサンプルが飾られているが、下手な和食よりベトナム名物フォー麺を食べよう。外国ビールより地ビールのタイガーがいい。鶏のフォーは品切れでビーフのフォーを頼む。4ドルずつで8ドル。国際空港とはいえ、バンコクの空港に較べると本当に可愛らしく、日本の地方空港に較べるまでもなく格段に寂しいが、空港値段だ。美味しいし仕方ないか？味で納得？

二時間ほどのフライトだが、国際線だからサンドイッチにビールくらいは出ないか？期待するが、機内では案じたように、クッキー切れ、ナッツ一袋と水だけ。ビールは出ない。一行18名、日本より二時間遅れの8時くらいに、ハノイで腹ごなしした4人を除き、空腹でラオスの首都ビエンチャンに辿り着く。幸いなことにホテルのレストランが開いている。9時がラストオーダーだが、遅くまでやってくれるという。又、太るよな、血压に悪いよなと思しながら、空腹組と一緒にアマダイも飲むことにする。円卓を囲み、地ビールのピアラオから始まり、米でつくったアルコール濃度50%ほどの蒸留酒の地酒、ラオラオの杯を重ねる。とろみは少ないが、中国の白酒やロシアのウォッカのような感じで美味しい。小さい杯で、水代わりにピアラオと交互に飲む。中国料理に似た、ラオスの料理には合う。ツアー初めての夜だというのに、初対面同志、大いに盛り上がる。

ビエンチャンのホテルの前に大きな寺院。朝が明け始めると黄色い衣をまとった僧侶に出る若い僧侶の群れ。通りに正座し、一行を待つ年配の女達。穏やかな仏教国の朝の風景だが、ベトナム戦争でアメリカの空爆を受け、内戦となり、アメリカ側についた拳銃裏切られた山岳民族の多くが、タイに難民として逃れた。1975年に王制から社会主義共和国に代り、今又、ベトナムの後を追うかのように、脱社会主義化を進める。そんなラオスにイオングループが3年で3百の小学校を寄贈、初年度の百校が完成したという。2月のブーケット震災被災地マングローブ植樹ツアーに続き、その贈呈式ツアーに同行する。

イオンと共に世界へ！

イオングループの植樹や学校寄贈のボランティアツアー参加は今回のラオスで八回目。昨秋のケニア植樹ツアーで🌳が、六回目だと回数の多さを誇ると、十回目という、ツワモノも。ジャスコやマイカル、旧ヤオハンのマックスバリュ、コンビニのミニストップ等、

グループ各社や取引先の社員の他、店頭や新聞の広告を見て参加する者も多い。植樹したり、学校を寄贈するのだから、普通のパッケツアーでは行けないような奥地や、貧困地域に入り、地元民とも交流、それぞれの国の実情を肌で感じるができる上、何かいいことをした気分になれる。自然環境の回復と貧困脱出の鍵となる教育の底上げに繋がる。

イオンにとっても、企業による社会貢献としてイメージアップになる。ジャスコの進出先では直接営業効果もある。その上、日本のイメージを高め、民間外交としても効果絶大だ。又、合併や吸収で巨大になった寄せ集めのグループに横串を差し、求心性を高める効果もある。更に社員の識見を高め、国際性を養う、社員教育の効果もある。会社は世界中でこんなにいいことしてるんだと、社員のモチベーションも高まる。参加費も取って効果的に社員教育をしている訳だ。

82歳の岡田卓也ジャスコ名誉会長が、実施主体のイオン環境財団とイオン1%クラブの理事長として毎回元気に参加するが、素敵なことを考えたものだ。これからもずっと元気で、ミャンマーやバングラディッシュ、パキスタン、イラン等、普通のツアーでは行けない、学校や緑が切実に求められている国や地域に、一緒に行くことができればと思う。

母なるメコンで泳ぐ

ラオスでビエンチャン観光を一日、二泊した古都ルアンプラバンでは観光と学校贈呈式。帰りはハノイに一泊、海の桂林とも言われるハロン湾観光は二度目。夜のルアンプラバン空港はボーディングブリッジも、バスもなく、徒歩でターミナルへ。ホテルへの道中、レストランのテーブルをローソクが照らし、民家の庭で食事する家族。なかなかいい雰囲気だ。聞けば停電だという。雑貨屋もローソクの薄明かりで商う。川岸の段丘上のホテルは自家発電でエアコンも効いている。乾季で水量の少ないメコンの川岸の泥の中に足を踏み入れる。ふくらはぎまで沈む。ヌルヌルした岩に海苔のような水草。昨晚スープに入っていた海苔か？ひどく汚れた水だが、せっかくのメコン、顔だけ出しちょこっと泳ぐ。お腹の手術跡がむずがゆくなる。ハロン湾とどちらの汚染がひどいか？かって船上から飛び込み、コロイド状に白濁、視界ゼロで反省したハロン湾でも、手術痕がピリピリすることはなかった。乾季のメコンに軍配を上げるべきか？

ラオスでは時間がゆったり流れ、貧しさを笑い飛ばすかのように人々は明るく暮らす。都市化が進むが、ビルといってもせいぜい3、4階建て。ベント等の高級車も走り、格差が進み衛生状態も良くないが、気候は暖かく、贅沢を言わなければ住む家、食べる物、着る物には困らない。庭先にバナナやマンゴウが実り、平地の水田では米の二期、三期作が可能だ。夜の飛行機から幾筋もの炎が見える。平地が少ないので焼畑農業が盛んだ。トウモロコシやタロイモなどを植える。ユニセフと協力、イオングループが3年で百校ラオスに小学校を寄贈する。初年度30校作り、その贈呈式に参加する。ルアンプラバンからバスを連れ走る。日本のODAで作った、舗装も真新しい山道の両脇にも焼畑。村人総出の小学校開校式と交流会は、これまでになく盛上がる。屋台も出ている。

ラオスの、貧しいことを悪いことと思わず、のんびり暮らすところに日本人は引かれるのか？ベトナム人は、貧困から抜出す好機とばかり、相変わらずバイクで走り回り、金儲けに忙しい。ハノイの町にはフランス植民地時代の瀟洒な建物に高層ビルが混在、ネオンも華やかだ。他方、二、三年前、同じイオンの植樹ツアーで訪ねたカンボジャに較べると、ラオスは豊かでもう少し賑やかだ。バイクより四輪車が多い。カンボジャでは、砂埃を上げ、時に家族全員？4, 5人も乗ったバイクが、夜は灯火も点けずに走り回り、金を取ってバイクの後に人を乗せるバイクからよく声を掛けられた。ビエンチャンでは日本製のピックアップやバン、乗用車が多い。韓国車も見掛ける。バイクに、両サイドに長椅子のついた車体をくっつけた三輪タクシーウクトウクが走る。東南アジア名物の庶民の足だが、この先、ラオスはどこへ走るのか？安い労働力を求め中国へ！次はベトナムへ！と、アジアを奔流となって流れるグローバル資本主義の、流れに乗るか？呑み込まれるか？ベトナムの次はラオスか？カンボジャか？

アマダイ通信NO.59

07年梅の花盛りに

ペルーへ！ロスの入国審査で冷や汗？

正月休み、初めて南米、ペルーへ。カスタロが活着している内に是非！と、メキシコ・キューバツアーにエントリーしていたのだが、不成立。ペルーにする。ロスアンゼルス乗り継ぎでリマまで、丸一日以上。9.11後初めてのアメリカ。指紋を採られ、顔写真写され、入国手続きが厳しくなった。書類に「反米闘争に参加したことがありますか？」とか、「逮捕され、又は、裁判で有罪を宣告されたことがありますか？」という趣旨の質問が英語で書いてあり、その通り答えたものか？正直に答えたら、入国できないのでは？逮捕歴や、有罪判決を隠してバレたらかえってまずくない？一瞬考える？

三度目のアメリカ入国だが、これまでは問題なかった。学生運動での有罪判決も二審で執行猶予になり、刑法の規定で、執行猶予期間の経過と共に刑の宣告はなかったことになった。まして起訴もされていない逮捕歴を問題にするのはおかしい！外国で日本の法律論をこねくり回し、申告するリスクを避け、申告しないリスクをとる。ノープロブレムで無事入国審査は通過したが、ヤクザの皆さん等はどうしているのだろうか？

首相官邸とか、防衛庁の庁舎とか、矯正施設等、機密を要する建物の建築の際は逮捕歴や前科等、「前歴」のある業者の出入りは徹底的に排除されるとも聞いた。又、運転免許証の12桁の番号のどこかで前歴がわかるのだとか。しかし、「人は変る、矯正し得る」という前提に立ち、被告人は無罪を推定されるという「推定無罪」の原則を持つ日本の刑事法の下で、その様なことが許されるのか？営業マンとして色々な建築現場に顔を出すのだが、殆ど問題になることはなかった。営業だからか？「更正」したからか？

クスコからマチュピチュへ！

雨上がりの朝、インカの古都クスコは赤道近く、夏というのに寒い。高度三千四百メートルのなせる術か。前日昼のクスコの空港は日差しがきつく、思わず帽子を被ったのに、雲が日差しを遮り、バスで遺跡を巡り高度が上るにつれ、半袖ポロシャツにGジャンの身に寒さが堪えて来た。高山病からか、気分が悪くなる者も。ノースリーブのTシャツにジーンズの長袖シャツ、カバーオールに着替え、朝6時15分発の列車で空中都市マチュピチュまで、四時間の旅。列車は四度のスイッチバックで高度を上げ、盆地の底のクスコを抜け、駆け上がる。寒くなりカシミヤのセーターを被り、ズボン下を持参すべきだったと後悔する間もなく分水嶺を越え、川の流れが変わる。

ゴミだらけの市街を抜けると畑が広がる。黒い茎のトウモロコシが穂を出し、南瓜が黄色い花をつけ、白や紫のじゃが芋の花が咲く。いずれも南米原産。トウモロコシは高度3600米まで栽培され450種ほど、じゃが芋は4200米まで栽培され、1500種ほどあるという。侵略者スペインがヨーロッパに持ち帰ったジャガイモが、ヨーロッパの人々を飢饉からどれだけ救ったか？トウモロコシは直接、豚や牛の口を通して間接に、時に日本酒の増量用の醸造用アルコールやバーボンとして、我々の血肉やエネルギーとなり、疲れも癒す。

列車が高度を下げると寒さも和らぐ。雲がかかる険しい山塊を濁流と共に走る。時に大きな風呂敷で物を運ぶカラフルなインディオの女。5、6箇所の途中駅でもタピストリーや靴を売るインディオ。高度の文明を誇り、人類に多大の貢献をしたインディオも、その富と文明故に、蛮族スパニッシュに滅ぼされ、物売りとして細々と生計を立てる。麓の村から乗合バスに乗る。葛折れの急な山道を木の枝を擦り擦り登る。雲間に都市が現れる。

崩れしまの石垣に、「古城」よ一人、何思う？

マチュピチュは高度2千4百メートルほど。クスコに比べ低く、高山病で倒れた者も息を吹き返す。インカが滅んだ15世紀そのままに？麓から山頂まで組まれているという石垣の上の、段々畑の濡れた緑が美しい。その緑をヤクが食み、石垣の間に赤や黄の花々が寂しげに咲く。何のために作られたのか、後世の人間が解明する手掛りすら残さず、そこにある空中都市。雲が切れると、高所恐怖症のアマダイの足元遥かに、渦巻く濁流。

マチュピチュから逆行程で、夕闇のクスコに帰り、レストランに直行する。干場さん！と声を掛けられる。昨年正月休み、チュニジア・モロッコツアーで一緒だった藤森・高木親子四人だ。一日早く27日に日本を出発し、イグアスの滝に二日滞在、明日マチュピチュへ行くという。先日も総勢21名中、添乗員の小野さんを含め17名が集まり、メンバーの坂原さんの表参道のお蕎麦屋さんで3回目の「同窓会」をやったばかりだが、こんな所で会うとは！

フォクローレの演奏が続く。インディオか、混血か？黒の超ミニに黒のTバックのパンチラ娘が軽快なリズムに合わせ、腰を振り振り踊る。これもインディオの踊りか？大晦日、何時になく人通りが多いという中心のアルマス広場。ライトアップされて美しいカテドラ

ル。要所に治安部隊が屯する。マチュピチュの村でも観光ルートを外れ中心街に紛れ込んだら、お腹を裂いた丸焼きの子豚や皮剥ぎされた牛の頭の横で、屈強な治安部隊が銃を持ち待機していた。翌朝早く近所の散歩でもとホテルを出ると、編上げ靴の体格のいい警備員が玄関を固めている。人通りも少なく早々に散策を切り上げる。

エレベーターに閉じ籠められる！

マチュピチュ帰り、いつものように夕食後風呂に入り、酔った勢いで、と言ってもビールの子瓶二本とビスタチオという40度ほどの地酒の甘いカクテル一杯だが、十時には寝込む。高度が高く、気圧が低く、血管も拡張され、アルコールの巡りがいいせいか、直ぐ酔っ払う？空気が薄いので酸素の取込みが足りないためか息苦しく、何度も深呼吸する。頭が痛くなったり、気持悪くて寝込んだり、食欲がなくなったり、お腹が痛くなったりはしないが、寝付きが悪く、夜中何度も目を覚ます。それでも五時前には起きて、治安がよくないので、好きな散策もできず、本を広げる。

六時に甘いパン一切れと、ソーセージ、プロセスチーズを少し、ベーコン焼きとスクランブルエッグをマンゴージュースで流し込む。インスタントコーヒーの原液？をお湯で割ったコーヒーは不味い。コーヒー産地なのだから、レギュラーコーヒーを出せばいいのだが。メロンとマンゴウ、パイナップル、西瓜にモンキーバナナと果物は豊富。美味しい果物で口直しする。

エレベーターで三階に上ると、入れ違いに同行の女性が一人乗り込む。途端に廊下の電灯が消える。エレベーターも止まる。停電だ！女性が助けを求め叫ぶ！ドアに手を掛け引っ張るが開かない。叫ぶ女性を残しフロントに助けを求め。閉じ込められた女性は泣き出すが、外の●も如何ともしがたい。再び電気がつき、暗闇から救出されるまで20分ほどだったろうか？電力事情も良くないようだ。

チチカカ湖で泳ぐ？

クスコからチチカカ湖畔のプーノまで4百キロの道程をバスで走る。万年雪を頂くアンデスの高峰チンボイヤ山(5487m)、タヌラナ山(5443m)を真近かに眺め、標高4千3百メートル、最高地点のラ・ヤラ峠を通る。夏だというのに、所々薄く雪を被っている。この辺りではトモロコシの栽培は無理で、じゃが芋畑が点在するだけだ。ヤクやアルパカが、地面を舐めるようにして、短い草を食む。

プーノまで30キロ、シルスタニ墳墓遺跡でチップトイレに入る。入り口で男の子が手を差し出す。2ソル硬貨の持ち合わせがない。5ソル(1ソル35円程)出す。釣りもペーパーも渡されない。持合わせないがここまで紙のないトイレはなかった。安心して入ると、ない。おまけに便器はテンコ盛りだ！おえっ！オェッ！気分を落ち着かせるのに時間がかかる。仕方ないテンコ盛りの上に尻を置く。運を手で掴む訳にはいかない！ゴミ箱の使用済みの紙から、きれいなのを探し出し、始末する。金返せ！叫ぼうにも言葉が通じない。

折りから雨が降り出す。カップを慌てて着て、傘をさし、巨大な円筒形の墳墓群が佇む丘に登る。雨に濡れるアルパカの群れ。写すと傍らの老女が手を出し、チップをねだる。

プーノのリゾートホテルは素敵だった。広く、清潔で、洗面もバスタブも大きい。薄暮の朝靄の中を葦舟のバルサがチチカカ湖の湖面を滑るように走る。前面の大窓を開け放つ。水鳥の轉りが遠く、近く聞こえる。遊覧船で、葦を積み重ねた浮島「ウロス島」へ。オスロヤペテルブルグ、紅海、最近ではケニアでも泳いだ。夏の日差しが結構きつい。いよいよ南米大陸でも泳げる！逸る心を抑えて添乗員に聞くと、高地にあるチチカカ湖の水温は夏でも12度だという。諦める。それでも現地の人泳ぐよ、と添乗員の追い討ち。プーノから空路リマへ。更にバスでイカまで、310キロ。翌朝、ナスカへ軽飛行機を飛ばす。地上絵がくっきりと見える。誰が、何時、何のために描いたのか？

イカに戻り、ロッジで休憩する束の間の時間を盗み、プールに身を浮かせる。海岸とアンデス山脈の間には広大な砂漠が広がり、アンデスから流れ出る川沿いのオアシスだけが、人間の住める所だ。そこにトーモロコシやじゃが芋、葡萄などの大農場が広がる。砂漠に大きな鶏舎が次々と現れては消える。何も無い砂漠に掘立て小屋。農場や鶏舎で働く人間が住むという。土地の高低差、アマゾンのジャングルから海岸の砂漠までの緑の濃淡、水温まで、そして何よりも、そこに住む人間の生活の落差の、何と大きい国だ！ペルーよ！

アマダイ通信NO.58

(Tile fish network letter)

07年元旦

命ある限り、地の果てまでも？…いざ、「アフリカ」へ！

アフリカと言われてまず思い浮かべるのは、広大なサハラ砂漠以南のブラックアフリカだ。エジプトもアフリカだと言うと、えっ？と思う人が多いかもしれないが、スエズ運河を挟み、シナイ半島以西のエジプトはアフリカだ。チュニジア、アルジェリア、モロッコ等、サハラ砂漠の北の諸国は北アフリカということになる。沿海部を緑豊かな穀倉にする、大西洋や地中海からの湿った風が、サハラの北に位置するアトラス山脈を越えると、空気は乾き、不毛な砂漠をつくる。サハラ砂漠にかけて住む北アフリカ原住のベルベル人の肌は黒いが、沿海部中心に多数を占めるアラブ人の肌は褐色だ。エジプト、チュニジア、モロッコと、北アフリカには足を運んだが、何故かリビアやアルジェリアツアーは目につかない。かつて名画「アルジェの戦い」に胸躍らせ、胸締め付けられた「革命少年」としては、アルジェのカスバも探索したいが、ブラックアフリカにも行ってみたい。「命ある限り、地の果てまでも！」、己を世界の中心に置いた、どこかの国と同じ、身勝手な「中華思想」だが。

幸い、三鷹寮で一年先輩で、大蔵省OBの宮村智さんがケニア大使だ。任期中に一度、と思っ
ているところに、イオン環境財団から11月18日から25日までのケニア植樹ツアーの案内。ノーベル平和賞受賞のマータイ環境副大臣のグリーンベルト運動に協賛、ケニアに植樹するという。貧しいサハラ以南のアフリカの常として、燃料として高価な石油を買うこともままならず、薪を燃料に使う。

薪や建築資材としての森林の過伐採で土地の保水力が低下、水不足が更に森林を後退させ、家畜の過放牧退耕作がそれに輪をかける。そんな悪循環に陥ったケニアでマータイさんが緑豊かな森を回復すべくグリーベルト運動を進め、イオンが趣旨に賛同、植樹ツアーを募る。普通のバックツアーで行くより、数段面白い。今回も幹線道路から未舗装の山道を分け入る。折からの雨でぬかるむ岩だらけの深い谷沿いの道を、雪道をノーマルタイヤで走るようなスリルを味わい、牛の放牧地で植樹する。文字通りサファリラリーだ。日本の四駆の性能の良さもあらためて確認。沿道では子供達が手を振り、泥んこ道で牛乳ポットを集荷するトラクター。自己満足に過ぎないのだが、植樹することで「何かいいことした気分」になれる！

ケニア行きを決めて、紀伊国屋で「アフリカ」本を探す。ようやく四冊ほど新書を発見。「アフリカで象と暮らす」を含め二冊がケニア関連。日本人にサハラ以南のアフリカは「遠い」ということか。地下鉄の駅に「ナイロビの蜂」のポスター。ネットで検索してみる。日本での人気は今一だったか、アカデミー賞受賞作だというのが、東京での上映は終わっている。原作が集英社文庫にあるというので、探し求め、上巻だけスーツケースに入れる。

サファリには本と海パンを！

ケニアの首都ナイロビは、千七百メートルの高地にあり、常春のような気候だ。10月までが乾季で、小雨季の11月平均の最高気温が23度、最低気温が12度ほどだ。赤道から少し南の熱帯という感覚で、案内書を見て一応長袖のシャツと上着を用意したのだが、朝晩は寒い。カシミアの薄いセーターでも持参するんだってと、反省。百メートル高くなると0.6度気温が下がるのだと、昔習ったことを思い出す。もっとも、ナイロビは治安が悪いからと、ホテルから外出禁止、国立公園のサファリロッジでは、敷地の外に出たらライオンや豹の餌食になるので出られず、実害は余りなかったが、それでも日中は気温が上がり、インド洋寄りで少し低い、アンボセリ国立公園のロッジのプールでは、リゾート気分で水泳を楽しむ。日中は動物も活動しないので、サファリはもっぱら朝と夕で、昼はロッジで本を読んだり、泳いだりして寛ぐ。

サバンナで乾燥が進むアンボセリでは動物の影が薄い。それでも灌木の間や、湿地で体を半分沈ませながら草を食んでいた数十頭の象の群れが、やがて間近かに姿を現し、アフリカの主人公は俺様だ！と言わんばかりに、サファリカーの前を悠然と横切る。ジャッカルに追われる可愛い鹿の仲間、ガゼルの群れ。時速80キロ？の快速で斜めに逃げて難を逃れたものが、何事もなかったかのように、又、草を食べ始める。ジャッカルは餌にありつけたのか？一瞬の内に、遙か遠く駆け抜けてしまい、定かではない。群れを持たない、水牛をスリムにしたような雄のヌーが一人草を食む。見るとそのヌーを風下から狙う二頭の雌ライオン。無線で連絡しあったか？続々とサファリカーが集まってくる。その様子でただならぬ気配を感じたか？ヌーが後ろを振り向く。狙うライオンは、気づかれてしまったかと、すくすく引き下がる。雌ライオン二頭ではヌーに敵わないのだという。鳩くらいの大きさのきれいな鳥が、目の前の道路を横切る。よく見ると大ムカデと格闘している。鳥が突つくと、百足は尻を持ち上げ、毒針で鳥を刺そうとする。鳥は刺されまいと後ろ向きにピョンピョン後退する。時に野次馬を気にしながらも、ようやく仕留め、餌にありつく足長の小鳥。野生の動物の生態に感

動する。

ナイロビより北、大地溝帯の塩湖、ナクル湖国立公園では遠く、美しく、無数のフラミンゴが群れ、近くには大鷲や綺麗な王冠を被った冠鶴。砂が乾き草が生える岸边には水牛や犀、縞馬が群れる。イボ猪や立派な角を持った鹿の仲間インパラも可愛い。アカシアの密林ではキリンが群れて鋭い刺の生える枝についた葉っぱを食べる。雨が多く緑濃い大地溝帯のナクルは、氷河が後退し続ける6千メートル超のアフリカの高峰、キリマンジャロの麓のアンボセリに較べ、格段に鳥獣の密度が濃い。アンボセリでは数頭の縞馬やキリンを遠目にして歓声を挙げていたのに、ここでは手の届くような距離にいくつも群れている。赤道直下にも関わらず冷涼・湿潤な高地なので、周囲が都市化、人家が密集する市街地に近いため、ナクル湖の水量減と水質悪化で、フラミンゴは激減しているとのこと。湖岸に白骨と化したフラミンゴが累々と横たわる。

20ドル払い遊牧の民、マサイの集落へ！

42あるケニアの部族の中で、昔ながらの遊牧生活続けるマサイ族の集落。細木の骨組みと牛糞塗りの壁、椰子の葉葺の屋根。葉の下に敷く防水シート代わりの薄いビニールが現代的。腰を屈め、狭く扉もない2Kの家に入る。真中にアカシアの木を擦り発火した種火を燃やす竈、壁に小さな灯取り穴。両脇に黒光りする牛の皮を敷いた小さな灯穴付きの小寝室。入り口に小さな家畜部屋。子羊などが休む。猛獣避けの、棘だらけのアカシアの枝の柵の内側に小さな家が円弧を描いて並び、中庭は夜、牛、山羊、羊と、「マサイの自家用車」と他部族が邪喩するロバの寝床だ。

一夫多妻、5家族 150人の集落の前で首と腕飾り、赤、青、紫の鮮やかな衣装を纏った男女の集団が並び、男達はぴょんぴょん跳ねるマサイダンスで、女達は歌で陽気に迎えてくれる。食料と衣服、敷物、布団にもなる家畜は既に野で草を食み、可愛い子羊や子山羊と子犬が所在なげだ。家畜の血も食物とし、野菜は摂らず。成犬は牧羊犬として働く。中庭で長老が幼児を集め学校を開く。初歩的読み書きとマサイとしての生活の知恵を教えるという。今も男子は17才の通過儀礼で、尻尾を捕む役、とどめを刺す役等に分かれてライオンを狩り、死者も出るという。水を汲み、薪を集めるのは女子供だ。乾燥地帯のサバンナでは重労働だ。狩りを止め、家畜を追うだけになった男は一見、楽に見える。

ナイロビから同行のマサイの女性ガイドが流暢な日本語で案内してくれる。ケニアの公用語は英語とスワヒリ語と部族語だ。部族はキクユだマサイだ、メロだと、四十二ある。ノーベル平和賞受賞者マータイさんのグリーンベルト運動に協賛した今回のイオン環境財団の植樹地は、カレン族地区だ。マータイさんの英語の挨拶を現地通訳が日本語とスワヒリ語に通訳し、更に別の人間がカレン語に通訳する。多種多層の公用語を持つ国の国家としての統一、国民意思の形成の難しさが推し量られる。ガイドは隣国タンザニアの独立時、ニエレレ大統領がアフリカで広く通用するスワヘリ語を公用語としたのに対し、ケニアのケニヤッタ大統領は宗主国イギリスの英語を公用語としたので、経済が世界に開かれ、隣国より発展できたという。いずれにしろ、鍵は教育だ。

最近公教育が義務化されたようだが、授業料無料でも教材その他に現金が必要で、定住しない遊牧民の学校教育をどうするかが問題だという。観光がらみで現金収入を得たり、高等教育を受け

ると生活が欧化されたり、不便で不健康な村を捨てたり。伝統と近代化の角逐がみられる。原住民を排除した広大な国立公園でのサファリが、“野獣と人間の角逐”に対する一つの結論だとすれば、“人間と人間の角逐”は現在進行形だ。そして“人間と自然の角逐”も現在進行形なのだ。もっとも、自然にとって人間がどうなるかは全く関係のない話で、地球環境という自然の、極く一部に過ぎない人間が、この地球上にいつまで、どんな形で存在できるかということに過ぎない。“地球を守れ”とか、“自然を守れ！”という時の地球とか自然とかは、人間にとってのそれを言っているだけだ。人間が存在しようがしまいが、どんな形で存在しようが、地球は回り続ける。43億年とも言われる地球自身の寿命がある内は。

アフリカで中国の影、中国は植民地主義？

アフリカ、中東の貧困は、いいように植民地化した欧米、わけでも英、仏、独、伊、オランダ、ベルギー、ポルトガルの責任と思いつつ、今回初めてケニアへ植樹行。緑の地球ネットワークの世話人として、黄土高原の緑化事業を手伝うと、豊かな中国になぜ植樹支援するの？と問われもするが、それと同じく、そこに困っている人がいるから。そしてそこへ行ってみたいから。

環境破壊と豊かな沿海・貧しい内陸の格差拡大という大きな矛盾を抱える中国の影がケニアでも大きい。田舎の道を走ると、ユウカリの森が所々に見える。日本のゴルフ場でよく見る、オーストラリア原産で枝ぶりもよく、大きく伸び、皮が落ちて白い木肌をさらす巨木だ。成長が早いので、製紙会社が至る所で植林しパルプにしているのだが、油分が多く、下草も生えず、アフリカに植えるのはどうかと思う。これをケニアでは電柱にするという。真直ぐ伸び、成長が早い。油分が多く腐りにくい。すぐ金になる。だが、中国がケニアにセメント工場を作って、コンクリート製の電柱作ってるから、これもすぐ駄目になりますよ、とガイド。それに経済の未発達なアフリカに中国人が進出、安い中国製品を持ち込むことで、アフリカの競争力のない産業が、淘汰されているという。

北魏の都、平城京も置かれた、黄土剥き出しの地に緑を回復するため、中国政府は条件の悪い土地の耕作を止めて森に戻す、退耕還林運動を進める。耕作を止めた農民はいずれ都市に出る。膨張した都市は雇用創出のため競って工業化を進め、工場は原料とエネルギーを必要とする。中国の人口圧力と資源需要が中国人を更に外に押し出す。この夏イタリアを旅した時も、観光地で千円！千円！と、日本人に、大声でイタリアの土産物を買えと迫る中国人が多かった。今、中国のアフリカに対する攻勢は激しく、資源と見返りの中国のアフリカ支援は新植民地主義とも言われる。石油や鉱物資源獲得のため、道路や鉄道などのインフラに投資、人も中国から送り、極端な話、囚人を作業員として送り込み、タコ部屋に詰め込んで、終わると現地に放置(植民)すると。結果、インフラはできても現地には金も技術も残らない。

“アフリカに責任のない”日本のアフリカ支援はいかにあるべきか？宮村大使公邸での夕食会には、別の植樹プロジェクトでナイロビに滞在する植生学の宮脇昭横浜国大名誉教授と三菱商事の亀崎副社長一行も加わり、議論が盛り上がる。三菱商事一行には三鷹寮で1年先輩、同室だった橋本良昭さんも加わり、40年入寮で政策投資銀行の副総裁から顧問に退いたばかりの大川さん、協和発酵から創薬ベンチャーに転じた久木野さん、41年入寮の国生弁護士と、五人の寮友

が二重、三重にガードされた、緑濃い広大な大使公邸に集う。

キリマンジャロの雪…黄金のケニア復活道険し！

部族間に微妙な対立感情もあるケニアだが、アフリカ諸国が一斉に独立した黄金の60年代に、先陣を切って独立して以来、アフリカでは珍しく平和を保つ。当時日本以外の他のアジア諸国よりケニアの一人当たりGDPは大きかったが、その後経済は停滞、治安も悪化。キクユ族出身で独立の闘士、初代大統領ケニヤッタの後の、カレン族のモイ大統領の腐敗と暗黒の20年の間、援助や国庫の90パーセントが私されたと宮村大使。雨中の植樹後、日本から持参した文房具や玩具などのプレゼント交換も奪い合いとなる。🐵も猿の縫ぐるみを手渡したのだが、四方八方から手が伸び、可哀相に猿の五体はバラバラになりそう。マレーシアの植樹ツアーでも一緒になった、住友電工OBの守屋さんは、自身が育った戦後日本の「ギブミー・チョコレート」と同じだというが、60年の差は大きい。上、上ならば、下、下なりかと道の険しさを感じる。

現在のキバキ第三代大統領はキクユ出身の経済学者で清廉、状況は改善に向かっていると、キクユのガイドは誇り、大使も認めるが、ガードマン付の広大な邸宅とブリキのバラック。交差点で信号待ちの車の間を器用に縫う物売り。サファリパークのゲートで民芸品を手に車のガラスを叩くマサイの女。貧富の格差は激しい。雨中の植樹会場でも音楽を鳴らしリズムカルに踊り出す陽気な人達だが、国会議員が連絡もなく来ない、時間に大幅に遅れるなど、勤勉さに疑問符もつく。

そんな“俗界”と隔絶され電気も自家発電の、キリマンジャロの麓のサファリロッジに、ヘミングウエーも滞在し、名作「キリマンジャロの雪」を著し、ライオンやキリンのハンティングを楽しんだという。東海岸のケニア第二の都市、モンバサから川を遡り、四駆を乗り継いで二週間かかって彼は辿り着いた。そこに5泊8日のケニアツアーで🐵も二泊した。夕食後、消灯までのひと時、グラス片手にヘミングウエーが創作の疲れを癒したというバーのカウンターの、同じ場所に腰掛け、彼の名作「武器よさらば」や「誰がため鐘は鳴る」を鞆に、ベトナム反戦闘争に明け暮れた頃に想いを馳せる。文豪が酔い潰れ、衝立を立てて寝たいというテーブル席で仲間と語り、キリマンジャロという名のカクテルを口に運ぶ。お祖父さんが彼の狩のお供をしたという若いマサイのパーテンダーが、壁に飾られた写真を指差し、お祖父さんのお蔭で私はここで働いてるんです、としみじみ語る。

翔んでケニア！…「国境なき楽団」ナイロビプロジェクト始動！

10月に「国境なき楽団」www.gakudan.or.jp 一行24名の一員としてマニラへ翔ぶ。楽団は「翔んでイスタンブール」をヒットさせた歌手の庄野真代さんが主宰するNPO法人で、日本で不要になった楽器を集め、途上国の恵まれない子供の施設にプレゼント、音楽を通じて子供達の健全な成長と日本との友好を図ろうとする。マニラでは在留邦人の「日比親善協会」とタイアップ、ストリートチルドレンを更生させ、学校に通わせる施設三箇所協会の方々と訪問、笛や木琴、タンバリン、アコーディオン等の楽器をプレゼント。子供達と楽器を演奏したり、歌ったり、踊ったり、音痴の🐵は冷や汗だったが、楽しく交流。庄野さんと、同行したゴスペル歌手のハルさんとのチャリティコンサートを協会主催で、宿泊先のマンダリンホテルで昼夜二回行い盛況。コンサートは住商、エプソン、ヤ

マハ等、現地の日本法人が沢山協賛してくれる。ケニアへ行き、宮村大使と植樹する話を庄野さんにすると、マニラでしたのと同じようなプロジェクトがケニアでもできるといいなどのこと。メールすると宮村大使も大賛成。

貧富の格差大で権力も腐敗、治安も悪く、エイズ蔓延のケニアでも、日本大使館の現地職員だった菊本照子さんが、ナイロビ郊外に「マトマイニ」(スワヒリ語で希望の意)という孤児院をつくり、19年間で85人の孤児を社会に巣立たせた。彼女は女性の自立のための授産施設も運営する(詳しくは宮村大使のケニア通信(www.tsuko40.com) 2006年4月3日投稿分参照)。スラム街で幼稚園を営むなど貧しい人のために働く市橋神父やストリートチルドレンの音楽教室を開いているフューチャーキッズ・プロジェクトというNGO(<http://www.fk-p.com/>)の石川さんなど、素敵な日本人が頑張っている。菊本さんは日本に里帰り中で接触できなかったが、大使によれば、現地旅行会社幹部の湯本恵子さんが昵懇とのことで、今回のツアーの世話もする彼女に、国境なき楽団の資料を渡し連絡を頼む。市橋牧師とは植樹で一緒になり、協力を確認する。ナイロビの邦人は七百人いて、日本人会には四百五十名が参加。コンサート支える母体になれないか?大使公邸の夕食会では三菱商事副社長にも協力を要請、宮村大使も協力を約束してくれる。

来年は「空飛ぶ楽団」がケニアに翔べるかも知れない!夢膨らませて帰国。しばらくして、朝日新聞に久しぶりにケニアの記事が載る。ケニアにもエイズ患者が多いのだが、レトロ薬と栄養管理で直るエイズ患者も結構いて、岸田袈裟さんという日本人栄養学者が、ケニアで栄養管理を指導しているという。菊本さん、市橋さん、湯本さんだけでなく、素敵な日本人がケニアには沢山いるんだ!嬉しくなる。できれば、再度、歌手の庄野さん達と「国境なき楽団」のメンバーとして、プレゼントの楽器を沢山携え、ケニアの素敵な人達と会うことができたらと思う。

ラオス学校開校式に参加しませんか?

イオンでは2006年より「ラオス学校建設支援」3ヵ年計画をスタートしました。募金で、2007年3月には新しい学校が30校完成予定です。カンボジアで149校、ネパールで57校に続き、ラオスでは100校の建設が目標です。2007年3月27日、ラオス北部のルアンパバーン郊外に新しく出来上がった学校「イオン桜スクール」で開校式を行います。☛も開校式ツアーに参加して、ラオスの子どもたちと一緒に、新しい校舎で学べる喜びを分かち合おうと思います。一緒に子ども達の笑顔にふれてみませんか?

ルアンパバーンは、ラオスの古都で王宮や多くのパゴタがあり、町全体が世界遺産に指定されています。風景は日本の山村の様で、棚田も多く見られ、郊外には中国雲南省を水源とするメコン川が流れています。

尚、このツアーは、日本の同世代の子どもたちが開校式に参加し、親子で現地ラオスの子どもたちとの交流を深めていただきたいという思いから、小学校高学年又は、中学生(新4年生から中学3年生)のお子さんと一緒に参加いただける先着20組の親子の方に、お子さんの旅費の一部(5万円)をイオン1%クラブが補助いたします。開校式は3月27日(火)で、その前後で観光が楽しめるようになっています。

3月25日(日)~3月29日(木) 5日間コース

バンコク・ルアンパバーン5日間(成田発着) 155,000(お一人さま)

バンコク・ルアンパバーン5日間(関空発着) 149,000(お一人さま)

3月24日(土)~3月29日(木) 6日間コース

ホーチミン・ルアンパバーン6日間(成田発着) 153,000(お一人さま)

ホーチミン・ルアンパバーン6日間(関空発着) 152,000(お一人さま)

3月25日(日)~3月30日(金) 6日間コース

ビエンチャン・ルアンパバーン・ハノイ6日間(成田発着) 149,000(お一人さま)

詳細パンフレット・申し込みをご希望の方は、下記まで資料請求ください。

イオン1%クラブ 担当:西田、本村 TEL:043-212-6023 E-Mail:lp@aeon.info

アマダイ通信NO.57

(Tile fish network letter)

06年 山茶花咲く

「国境なき楽団」に紛れ込んだ音痴一匹!

かつて「翔んでイスタンブール」をヒットさせ、早大大学院で環境学を研究する、歌手の庄野真代さん主催のNPO法人「国境なき楽団」に同行、10月半ばの金曜から月曜にかけてマニラに行く。国境なき楽団は、日本の家庭で子供が大きくなり使わなくなった楽器を集め、アジア・アフリカの途上国の恵まれない子供達の施設に寄付、音楽を通じて、子供達がすくすく育ち、社会に羽ばたく手助けをしている。

一行24名はマニラで、ストリートチルドレンを保護し、規則正しい集団生活に適応させ、学校に通わせる施設三箇所ですべて楽器を寄付、在留邦人ボランティアも交え一緒に演奏し、歌い、踊りなどして交流、楽しく過ごす。宿泊先のマンダリンホテルでは日本フィリピン親善協会主催の庄野真代チャリティコンサートも昼夜二回開かれ、在留邦人中心に大盛況。

国境なき楽団の趣旨に賛同、一行24名の一員として参加したのだが、気が付けば音痴だ。小・中学校の音楽の時間はいつ一人で歌わされぬかと、死ぬ思いをした。大学では中国語の四声の発音が全く区別できず、語学の単位が取れなくて留年を繰り返し、苦労して東大に入ったのに、劣等生の悲哀をしみじみと味わった。今回、音痴が一人だけ紛れ込み、音楽とは縁がないのに、施設で子供達と一緒に歌う破目になって口パクしたり、コンサートの手拍子も外れたり、昔の音楽の授業を思い出して、苦笑い。

食は東京にあり!

この8月で定年まで2年残し、家内が学校給食の小母さん(栄養士)を退職。その直前に顔を出した寮同期の、高橋首都高常務の「よく外国に行くけど、奥さんで行った方がいいよ」というアドバイスもあり、一緒に久しぶりに韓国へ行く。奥さんの退職記念ならホ

テルはいいところにしなくちゃとの、アシスタントの声に乗せられ、奮発？いつもは阪急交通のトラピクスや、HISのチャオ、JTB旅物語などの割安ツアーで回数をこなすのだが、ワンランク上のルックJTBの高級？ツアーにする。

9月半ばの金曜昼成田発、三泊四日で一人13万円の釜山、慶州、ソウルを巡る旅。高橋カーテンウォールの社員旅行以来だから、10年振りくらいの韓国。ウェスティン、ヒルトン、インターコンチとホテルは良かったが、韓国料理は他のツアーと一緒に？美味しくくない。叙々苑は勿論、安くて評判の牛角に比べても美味しくないと、偶々席を同じくした日本人客と愚痴る。前回ソウルを旅した時と印象が変わらない。酒も高く、リノリウムのツルツル・ペタペタ床に座布団を置き、日本では学校給食でも使わないポリプロピレンの食器で食べさせる、余り綺麗じゃない店でビールが中瓶五千ウォン（660円）ほどだ。居酒屋じゃないの？と聞くと、現地ガイドはレストランですよと言い張る。

この数年、年4、5回は海外ツアーに参加したので、随分色々な国の料理を食べているが、本当に美味しいと思ったことは少ない。「食は広州にあり」と言われる広州でさえ、日本の中華料理、広東料理の方が美味しいと思う。安いツアーが多いから美味しいレストランに案内して貰えないのか？日本人好みにアレンジされた外国料理と較べるからか？味も又、その国、都市の豊かさに比例するのか？「食は東京にあり」は確かだが、世界に食を求め、又、旅を続けよう。

マジックトイレとシャワービデ

アマダイ通信読みなるほどと思い、この間の海外ツアーで携帯ウォシュレットを持参してよかったよ、という友人の言に、明日から韓国旅行という時に、立ち寄った有楽町のビックカメラで探す、売り切れ。柔な尻の出血を気にして釜山に飛ぶが、マジックトイレと称し、ホテルの部屋には皆ウォシュレットがついている。マニラのマンダリンホテルはシャワー式ビデが付いている。底の穴開き水洗から、シャワーが吹き出し、二つの水栓で水温も調節できる。便器で用を足した後、ビデに移動しなければならないが、快適だ。長くスペインの植民地だったフィリピンは、ラテン文化の国なのだと感心する。

釜山のガイドの朴さんは、経済危機後、格差社会の韓国は競争が激しい、特に子供の教育が大変だと嘆く。放課後や休日に、休む間もなく塾や習い事を幾つも掛け持ちさせる。学校の先生への付け届けもすごい。自分は働いていて、学校にお金を持って行けないので、ヤクルトのような乳酸菌飲料を毎日先生に届けて貰っている。月割で払い易いし、飲む度に先生に自分の子供を意識してもらえると。子供もだが、費用を捻出する親も大変だ。大企業の課長や部長でも、旦那の給料だけでは足りなくて、奥さんが飲食店で皿洗いのアルバイトをしたりする家庭も多いという。ソウルのガイドの李さんは、名門女子大医学部に入れた娘と、アメリカ留学の息子の学費が大変と、ライトバンの後部座席で、仕事そっちのけで居眠りしている。何のために生きるの？子と親の幸せは？と身につまされた久しぶりの韓国だった。

マニラでは逆に、生活の苦しい親が子供を虐待したり、遺棄したりして路上生活する子供が増えているという。数年前に国際協力銀行のセミナーでマニラ空港に降り立った時、空港の駐車場には日本の温泉旅館や会社の名前を書いたままの中古のバンやバスが、ずらり並んでいたが、今回は見掛けない。路上で伊豆箱根鉄道のライオンマークを見たくらいだ。経済全体は良くなっているのだろう。その一方でストリートチルドレンが増えるのは格差が拡大しているからか？高層ビルや高級マンションが増えているのに、下町や郊外の庶民の住むトタン葺きのバラックはそのまま、停車する車の間を器用に歩き回る物乞いや物売りも相変わらずだ。

マニラのだ真ん中、マカティで強盗に会う！

マニラの日比親善協会の招待で、施設の訪問やコンサートを一緒にした会員の皆さんと、夕食を共にする。フィリピンの女性と結婚し、マニラを生活の拠点にする方も多い。フィリピンは家族や、一族の中の誰かが豊かになると、皆がそれに頼って生活しようとする。又、成功した者もそれを当然として、認める。謂わば“分かち合いとぶら下がり”の社会で、奥さんの係累のぶら下がろう、食わせろとの圧力をヒシヒシと感ずるという。

日本も貧しい時代、家族の繋がりが強く、乏しい物を分かち合いながら、生活を支え合ったものだが、ぶら下がるという発想は少なく、助けを借りなくて済む様に、這い上がろうと努力し、競争したのではないだろうか？今の韓国ほど、過激ではないが、それがフィリピンでは、一人の成功者が出ると皆それにぶら下がり、働くのを止めてしまう者もいるという。勿論貧しい国民にその責めを帰すことはできないが、国民の勤勉さにも問題ありとしたら、フィリピンの経済低迷・貧困問題の根は深い。

チャリティコンサートの日、夕方まで時間が空いたので、丸の内と大手町と銀座をたしたようなマカティで昼飯でもと、賑わう巨大ショッピングモールをサンダルと短パン、ポロシャツの“汚い格好”で一人歩く。小太りの中年の男が、ホテルのガードマンです、休みなのですが、妻がここで働いてるんで来たんですと、上手な日本語で話し掛けてくる。どこまでもついて歩くので、少し怪しいなと思うが、一人で食べるよりは、飯食わしてやって、色々情報収集するのもいいかと“発想を転換”。美味しくて、安いフィリピン料理を食わせる所を案内しろというので、段々人通りの少ない方に行き、地下道に入るので、まずいなと思う間もなく、俺はフィリピンマフィアだと、胸倉を掴んでくる。咄嗟に大声を上げると慌てて逃げる。シャツのボタン一つちぎられただけで済み、胸を撫で降ろす。川の汚れにめげ、マニラの海では泳げないと諦めていたが、ホテルに帰り駿直ちにプールで泳ぐ。高い塀と、銃を持ったガードマンが警備する高級ホテルで、カクテルを飲み、泳いだり、読書したり。リゾート気分を味わいながら“塀の中の平和と豊かさ”を想う。

日本でも格差の拡大が問題になっているが、国民の間の経済的格差が拡大し、生活困難な底辺層が拡大すれば、フィリピンのように治安の悪化は避けられない。競争のない社会にイノベーションも進歩もないが、韓国のように、競争の激し過ぎる社会も疲れる。日本


でも警備会社とデベロッパーが提携して、マニラの都心のマカティの高級住宅街のように、ゴルフ場を囲むまではしないが、塀に囲まれ、ガードマンとセキュリティシステムによって24時間警備された住宅街が作られ始めている。しかし、塀の外に一步出た時どうするのか？塀と塀の間を防弾ガラスつきの車で、警備員同乗で移動するのか？それとも、東京全体を、日本全体をすっぽり囲ってしまうのか？


アマダイ通信NO.56

(Tile fish network letter)

06年のうぜんかずら咲く

アッシジの丘にフランチェスカの鐘が鳴る

五月の連休のギリシャの次は、その文明を引き継ぎ、花咲かせたローマの地に行ってみよう！この夏休みはイタリアを周遊することにする。5年前の五月のナポリはひどく暑かった、今年のヨーロッパは酷暑続きという。今回のイタリア周遊は、前にもまして暑いだろう、覚悟してJALとルフトハンザを乗り継ぎミラノに入る。1時間ほど遅れ2時頃成田を発ち、ミラノに着いたのは真夜中。夜とは言え、意外と涼しい。小1時間バスを走らせホテルに着いた頃は現地時間でも翌日。ミラノはこれが二度目だ。去年の五月の連休、旧友の福井ブルガリア大使に会ったブルガリア・ルーマニアツアーの途次、半日観光して以来だ。大聖堂やグッチだフェラガモだと、には関心のない数多のブランドショップが覇を競うガレリア、ミラノ城とお決まりの観光の後、ベニスの郊外まで一走り。既に小麦は刈り取られ、花を終えたヒマワリが黒く頭を傾け、収穫ま近かのトモロコシと緑の葡萄畑が交互に続く。その先には遠くアルプスに連なる山々が霞み、山肌に街が点在する。高速道路沿いには工場やオフィスが現れては消え、農工共存の美しい風景が続く。

ベニスでようやく太陽が顔を出す。運河の両脇を自動車が駆け抜けるアムステルダムと違い、建物の間を、水面を滑るようにゴンドラがすり抜ける。迷路のような運河に架かる太鼓橋の上には、鈴なりの観光客。広大なサンマルコ広場も観光客で足の踏み場もない。ピサの斜塔へバスは走り、ようやく倒壊防止の修復を終えた塔に登る。階段も傾いているので、登る身も一段々斜めにしたまま進むようで、登りにくい。50数メートルの塔頂の見晴らしは素晴らしい。傾斜した頂から真下を見下ろすのは、高所恐怖症のには脅威だが、怖い物見たさで覗く。かしこに脅声上がる。ルネッサンスの都フィレンツェでは、メディチ家の館でミケランジェロやダヴィンチが迎えてくれる。小学校の図書室で瞳輝かせその伝記を読んだ、天才達だ。

アッシジには聖フランチェスカと、ガラス越しに横たわる“即身仏”聖クララの功德を求め、多くの信者が集う。しかし俗界の権力も求め、免罪符を売って私腹を肥やし、腐敗の極みにあったキリスト教を、世俗の富を捨て、身一つで改革しようと志した二人が、大きな“城”の中に神として祀られる。外からの宗教改革に対抗し、カソリックを改めて権威づけるために。古代の革命家キリスト、彼の目指した“平等、博愛”の“世界革命”運動は数世紀の弾圧を経て、キリスト教がローマの国教となり、権力によって庇護されることによって命脈を失い、内なる改革者を祀り上げることによって二度死ぬ。

城砦都市バチカンが国の中に国を持つ。キリストは国家を否定する。“キリスト”に国境はないが、“キリスト教”が国家を持ち城壁を巡らす怪。ミケランジェロ設計の高層の鐘楼を持つ巨大な教会が人々を威圧し、美しい彫刻が、絢爛たる絵画が人々の目を眩ませる。キリストの弟子達の教えは、人の心を癒し、処世の指針とはなっても、もはや世界を変える力にはなり得ない。

ナポリを見た！泳いだ！

ナポリを見て死ね！という諺があり、一度ナポリを見ているのだが、世界の海で泳ぐのをモットーとしている、見ただけでは死ねない！地中海でも泳ごう！とチャンスを伺う。最初の機会はベニスだが、ラグーン(潟)に囲まれた島の海岸では、下水処理場で泳ぐようなものだ。海の桂林と言われるベトナムのハロン湾では、視界ゼロの海に飛び込んでから反省したが、ベニスでは最初から諦める。フィレンツェの外港だったピサも今では海から遠い。ナポリでポンペイの遺跡を見、カメオの工場へ行ってから海岸を見学するという。ここしかない！バスの中で心がはやる。カメオの店のトイレで海水パンツに履き替え、名勝タマゴ城の前でバスが止まると、若い男女が数人水着でいる。堤防を乗り越え、テラポットを伝い、海に飛び込む！

“アッシジの神々”も布教の折、この海で汗を流し、身を浄めたのだろうか？そして革命家キリストも。ナポリの海は地中海の東端でパレスチナと繋がる。纏う物を捨て、身一つで飛び込めば、老若・美醜は別にして、皆等しく生まれたままの姿だ。わずか数十年、この世に身をおく間に、人は様々なものを身につけるが、死ねば又、水蒸気と炭酸ガスと、骨灰となって自然に還る。そして、キリストが「平等と博愛」の“千年王国”を求め、血を流し闘い、十字架で磔にされた地では、それぞれの“十字架”を掲げた者達が、今なお血を流し、命を奪い合う。2千年の日月を経て。

キリストの死後、千8百年経てマルクスも「能力に応じて働き、必要に応じて取る、階級と搾取なき」“千年王国”を、“世界革命”を唱え、レーニンや毛沢東、ホーチミンが、“国王”に擦り寄るのではなく、闘うことで、それぞれの“王国”を樹て、マルクスの世界革命は死ぬ。そして、彼らの死後、エピゴーネン達が、自らを権威づけ、力不足を補うために、彼らを宮殿の中で、ガラスの箱に入れて「即身仏」として祀る。「革命国家」は一人歩きし、変質し、解体する。マルクスは二度死ぬ。

ビディとウオシュレット

ベニスからフィレンツェへ向かうアペニン山中で、添乗員の福田さんが、便器の脇の水栓のついた器は何だと思いませんか？と聞く。日本人にはビディが珍しく、用を足したり、足や頭を洗い、洗濯したり、野菜不足を補うために買った果物や野菜を洗う人もいるのだと、日本人の“独創的”使い方を色々披露してくれる。そして彼女は、排泄の後で、お尻を綺麗にするために使うのがビディだという。いわばウオシュレットと同義だという。

欧露の名作を読み漁るかつての文学少年にとっても、ビディは大きな謎であった。男と女が愛し合った後で、その残り香を洗い流し、妊娠を避けるために女が跨るのがビディだと、いつも決まった場面でビディが登場することに気づき、理解するようになったのだが、福田女史の説明は違う。それに、日本のウオシュレットに、お尻洗浄用噴射口の他にもう一つビディが付いているのは、それ

では何のためなのだ？

その夜自室で、ビディに後ろ向きに跨り、蛇口をひねり水を出してみる。用便の時のスタイルで座るとお尻の上、尾骶骨の辺りに水が当たる。そして、オシッコの時に洗えるように尻を浮かせ気味にすると、水は身体に当たらず素通りする。やはり●が正しい、確信する。愛し合った後で、女がビディの水洗に向き合い、洗い流す。一種の避妊具なのだと、幼少のみぎりに、経験則から割り出した結論を確認する。しかし、洗面の両脇につくタオルのビディ側のは、ビディを使った後で拭くためにあるのだ、との福田女史の言も思い出す。洗面のドア側のタオルは、昨夜シャワーを浴びた時に浴用タオルとして使い、朝の洗面では残りのタオルを使った！ビディ用のタオルで髭剃り後の顔を拭いてしまったのだ！

ローマで森田助教授と昼からはしご酒

ローマへ出発前日、JTBから送られてきたスケジュール表をみると、ローマからは夜のJAL便で、最終日は夕方のホテル再集合まで自由行動だ。何で今まで気付かなかったんだ！この春からローマ大学に半年の予定で招かれ、研究三昧の、能代高校同期の森田昭夫東大助教授に携帯電話からメールする。折り返し、東大のメールアドレスでローマから返事があり、数度やり取り。当日昼にホテルで待ち合わせ、食事することに。

森田君は秋田大鉱山学部卒だが、イギリスの大学に留学、成果を上げ、東大教養学部招聘された。11年も在学、勉強好きな？生え抜きの●が“フリーター”で、秋田大の森田君が東大の先生になる。そこが人生の面白いところだ。一度駒場の研究室を訪ねたが、難しい数式を使い、化学と物理の学際で、物理に近い領域の研究をしているという。

郊外のホテルに、瘦身長躯の森田君が白い長髪をなびかせ来てくれる。日曜で、おまけにバカンス。近くの飯屋は開いてないので、国鉄と地下鉄を乗り継ぎ都心に出る。イタリアでは駅で切符は売らないし、売店も休みで切符が買えないというと、大丈夫、大学の先生はキセルする訳にいかないから、切符は何時も持っているという。検札はなしで結局キセル。ローマのど真ん中で降り、三越向かいのレストランテに入る。ムール貝が美味しいからと頼むがない。大きなピザを二人で一個食べ、昼から生ビールを一杯と白ワインを一本空ける。ムール貝が食べられるアイリッシュパブに行こう。梯子してウイスキーの水割りをやる。綺麗なイタリア人のママと軽口を叩く森田君、この辺は通勤経路で、このパブにはよく入るらしい。食住接近で環境がよく、研究三昧でハッピーだ、ハッピーじゃないといい結果は出ないよと、えらくハイだ。4次方程式はイタリア人が解いたが、5次方程式を解いたくらいのインパクトのある仕事をするんだ、と意気軒高だ。

アマダイ通信NO.55

(Tile fish network letter)

06年夏椿咲く

抗がん剤から解放され、再びアマポーラ咲く国へ

三年前の三月に大腸がんを手術、抗がん剤点滴の管を引きずりながらブッシュのイラク爆撃をテレビで見て、四月半ばに退院。入院前から五月の連休は娘とスペインツアーを申し込んでいたが、五月からは毎月一回一週間入院して、抗がん剤の集中点滴治療を五ヶ月間受けることになる。恐る恐る？三楽病院の主治医の阿川先生にツアー参加の可否を問うと、意外にも即座にOKが出る。入院はスペインから帰ってからでいい、手術したからと言って旅行に支障はないという。一抹の不安を抱きながら、機中の人となる。

5月のスペインは暖かく、マドリードからバスで南下、地中海沿いを走り、バルセロナから再び機内に。沿道のオリーブ畑に、緑濃い小麦にまじり、真っ赤な芥子の花、アマポーラが目につく。この五月の連休、又、娘と一緒にギリシャに遊ぶ。パルテノンやデルフィの神殿、ミケーネの丘にも、黄色のミモザや白いコデマリに混じり、赤いアマポーラが鮮やかだ。生きて再びこの花にギリシャの地で会えるとは！ギリシャも地中海性気候、イタリアを挟んでバルカン半島とスペインは地続きで不思議ではない。が、同じ時期、かつてローマからポンペイへ走った時の記憶にはない。大病後のスペインであり、ギリシャだから、真紅に燃える太陽のように、目に焼きつくのだろうか？

五月の連休のナポリもグラナダも暑かった。アテネも似たようなものだろう。長袖を少ししか持ち合わせなかったアマダイには、雨のギリシャは肌寒い。ロシアほど寒くはないが、ウオッカに似て透明で、アルコール濃度の高い地酒ウゾーを、水代わりのビールと交互に飲みながら、ギリシャ料理を楽しむ。が、ロシア料理と飲むウオッカ、中華料理と一緒にする白酒ほどの味わいがない。オリーブ油を多用するギリシャ料理に慣れないせいだろうか？

その時、ホテルのレストランの向かいの席で「干場さん！生きてたんですか？」と、女性の声。「うんっ？」と一瞬そちらを見ると、「中野です！去年の夏バルト三国ツアーでトイレを探してもらった！」と畳み掛ける。そう言えばタリンでだろうか、日本なら公衆トイレが見つからなくても、コンビニで借りられるし、パチンコ屋でも大丈夫、ヨーロッパでは何時もトイレで苦勞する。パチンコ屋を輸出すればいい、と思ったりしながら、一緒にトイレを探したことを思い出す。隣の席の旦那さんが懐しい顔でニコニコしている。「ホームページ見てもアマダイ通信が47号から更新されてないので、亡くなったと思っていたんです」と、再び奥さんの弾んだ声がある。

ギリシャは何で食べる？先祖の遺産を食べる？

アテネの街中の交差点 スクイーズ片手に車の窓拭きをさせると手を差し出したり、ビニールに入ったバナナを売る、色浅黒く目の大きなインド人やパキスタン人？がいる。不法移民だというのが、トルコにも、エジプトにもいた、アメリカ人には「十ドル！十ドル！」、日本人と見れば「千円！千円！」と叫ぶ強引な物売りはいない。

ギリシャの一人当たり国民所得は英、独、仏の半分で、車の税金も高く、普通車で4百万円ほどと日本の倍だ。車を手に入れるのに苦勞するというが、昨年訪れた隣のルーマニア、ブルガリアに比べ車も新しく、家もきれいだ。地中海スペインに町並みの美しさは劣るが、島々を行き交うクルーザーや客船の白が、空の青、海の藍に映えて美しい。アテネのピレウス港には白亜の大型客船が

折り重なるように停泊している。憧れのエーゲ海で泳げればと今回も海パンを持参した。海水浴場や磯に降りられる島の港にも寄港し、多少の時間もあったが、梅雨寒の戸田湾で友と泳いだ、学生時代の若さは既くない。

その昔、ギリシャは近隣諸国にオリーブ油、ワイン、金銀細工、陶器、奴隷を輸出、アジア、エジプト、黒海方面から小麦を輸入、エーゲ海、東地中海の覇権を握り、交易で稼ぎ、アテネやスパルタに代表される民主共和政の市民国家が繁栄した。戦争で獲得した奴隷の労働に支えられた、一部市民の自由であり、民主であったとはいえ、ヨーロッパ文化の基をなした、ギリシャ文明の花を咲かせた。だが、今のギリシャは何で食べるのだろうか？オリーブ油もスペインやイタリア産が、ワインもフランスやイタリア、ドイツが日本では有名だ。海運は世界有数らしく、出稼ぎも多いようだが、やはり観光が主産業？ということは先祖の遺産を食べているのか？一人当たり国内総生産は独・仏の半分でも、イスラム＝トルコに先立ってEU加盟を認められたのはヨーロッパ文明の祖、ギリシャに敬意を払ったということだ？

アムス観光、EUって、こういうことなんだ！

往路のJALも復路のオランダ航空もアムステルダム経由。帰り、アムステルダムで7時間ほど乗り継ぎ時間があったので、オランダに入国して思いがけなくアムステルダム観光をすることに。ギリシャから入国したのに、ザックからパソコンを取り出し、時計、鍵、小銭入れなど“金目の物”を上着のポケットに詰め込んで、その上着を脱いでバスケットに入れ、金属探知機がピーピー鳴って、ズボンのベルトも抜いて、という手荷物検査がない。列に並びパスポートを提示しての入国審査もない。EUってこういうことなんだ！

ギリシャで使い残したユーロでチケットを買い、ゆったりしたシートで20分ほどで、都心へ。1時間ほど船で運河を巡る。古い街並みに新緑が映えて美しい。仲のいい老夫婦のように、寄り添いながら傾いて立っている建物が、埋め立ててできたこの町の由来を語る。再びセントラルル駅から、今度はトラム(路面電車)で美術館へ。ゴッホ美術館は長蛇の列。諦めて皆がミュージアムショップでゴッホを鑑賞？している間にトイレを探すが、見つからない。地下に迷い込むと、巨大な空間。大型バスが何十台も並んでいる。バスターミナルか？車庫か？いずれにしろトイレがある筈だ。ようやく人間を見つけて Where is toilet ? 指差された方を見ると明るい空間が広がっている。助かった！だが入れない！ゲートはバーで閉じられている。チップトイレだ。ポケットを探し1ユーロ硬貨と50セント硬貨を投げ入れる。

きれいなトイレだ。気持ちよく用を足す。アテネの空港のトイレのドアが壊れていたのに較べると格段の違いだ。民度の差がこの辺に表れる。ギリシャ文明が燦然と花開いていた頃、紀元前十世紀前後、オランダの湿地はバルバロイ(野蛮人)がまばらに住む未開の地、文明の、世界の外だった。だが、イノベーションが世界を変える。陸路とガレー船の交易時代、ギリシャが地中海の覇者ローマにとって代われ、ローマが東方の富を押さえたオスマントルコに代われ、十五世紀、大航海時代はスペイン・ポルトガル、そしてオランダの時代へ。重商主義の時代、大型帆船を操って海上交通の覇権を握り、交易を支配した者が時代の覇者となり、栄え、傍らで技術革新に乗り、力を

蓄えた者が、次の覇者となった。産業資本主義の時代は産業革命で先行したイギリスが覇権を握り、その資本主義の中から産まれた社会主義の勃興と冷戦の時代を経て、アメリカ極主義の現在へ。そして今、ギリシャから北欧までヨーロッパは一つとなった。EUは、ユーロは、アテネとアムステルダムはこの格差をなくすのか？ 広げるのか？ アメリカから覇権を奪うのか？ いずれ国境はなくなり、貧困とそれがもたらす戦争もなくすることができるのか？ アムステルダムで出国審査と手荷物検査をし、日本へ向かう。アテネ空港では手荷物検査だけ。EU内の最後の経由地で一度だけ、出国審査するだけなのだ。

尻から鮮血！大腸がん再発？

ギリシャツアーが日を重ね、佳境に入った頃、トイレに入って用を足し、お尻の辺りに染みるような痛みを感じて、ペーパーを見ると鮮血で真っ赤に染まっている。大腸がん再発か？ と、一瞬、頭が白くなる。大腸に癌ができると出血するので、検便でわかる。又、便が細くなったり、色も黒っぽくなり、下痢と便秘を繰り返すなど、お尻の調子は要注意だ。アマダイの場合は色艶、太さ、固さ共に立派なものだった。見た目には何ともなかったのに、小平市の消化器癌検診で便潜血検査陽性ということから、大腸癌がみつきり、危うく一命を取り止めた。それがこんな酷い出血！

だが、隔月に1回は血液検査し、四ヶ月に1回はCTを撮るなど精密検査しているのに、そう悪くなる筈ないじゃないか？ 自分はこんなにピンピンしている。悪いのはお尻だけだ！ 多分、ウオシュレットのせいでヤワになった肛門が、環境が変わって切れたのだろう。家の二箇所のトイレも洗浄便座つき、事務所もウオシュレットつきだ。顧問先のオフィスビルでも結構ついている。レストランやホテルもかなりの割合でついている。新聞紙で処理していた時代、ゴワゴワの落とし紙の時代、エンボス加工の柔らかなトイレペーパーの時代、紙は水滴を拭き取るだけになったウオシュレットの時代と、日本のトイレがお尻に優しくなり、痔の病からは大分解放されたが、日本人の過保護なお尻は逆に弱くなっているのだ。今度来る時は霧噴器のような携帯ウオシュレットを持参しなければと結論づけ、旅を続ける。

帰国後の三鷹クラブの講演会の二次会で、三楽病院の河野名誉院長に、お陰様で抗癌剤卒業しましたと挨拶。よくここまで来たね、澤田(群馬県立癌センター院長)君何か言ってた？ と先輩。新病院建設中で、先日営業に行った時も、データはデータで、個人にとっては0か百だから、と言ってましたと言うと、言いようがないよと先輩。寮同期の山川胃腸科院長夫妻も同席。大腸癌と診断された時、色々聞いたけど、答えにくかったんだらうな？ と聞くと、いやいや！ と、にやにや。抗癌剤二年で止めて急に悪くなってなくなった人もいるけど、副作用なかったの？ と先輩。全然とアマダイ。副作用が酷くて続けられず亡くなる人もいるよう。ステージ bと大分進行していても、「ほとんど治癒する見込みなし」(岩波新書「胃がんと大腸がん」)と本人に正直に答えられず、皆困ったんだらうな。そんなこととはつゆ知らず、体調がいいのを幸い、以前とほとんど変わらない生活をして来たのが、かえって良かったのかも知れない。「もう手遅れです」などとデータ通り言われていたら、アマダイ通信も55号まで続かなかったかも知れない。関係者一同にあらためて感謝いたします。

家庭で眠る楽器に羽つけて飛ばそう！・・「国境なき楽団」(庄野真代代表)

庄野真代様

ご無沙汰しています。先日朝日新聞(5月31日朝刊「フィリピンと私・・施設の子たち楽器で微笑み」)で、庄野さんがフィリピンの子供達に楽器を送る運動をしている記事を見て、小生も何か協力させていただければと、メールしております。

先年、JBIC(海外協力銀行)のフィリピン開発セミナーでネグロス島へ行き、小学校を訪問、貧しいながらも熱心に勉強する子供達のために何かできないかと思いながら、何も出来ずに来ております。小生の個人通信「アマダイ通信」(友人・知人宛に3千部弱郵送)で紹介、楽器や送料(楽器は集まっても送料に苦戦とかしてないですか?)の寄付を呼びかけることができればと、思ったりしています。呼び掛け文とかあればメールしていただけないでしょうか？

干場さん、

お察しの通り、楽器の運搬費は悩みの種です。先月はペナン島の障害児の施設に、鼓笛隊の楽器一式を送りましたが、日本郵船の社会貢献部にご協力をお願いできたので、なんとかなりました。今月は、ザンビアのエイズ孤児の施設に送るのですが、船便では7ヶ月もかかるというので、寄付を募って航空便で送ろうと思っています。ネグロスの子どもたちにも贈ってあげたいですね。楽器というモノを送るというよりも、寄付者からの応援の心を届けるというのが、このプロジェクトの誇れるところ。贈り手が幸せな気持ちになりますから・・。

= 家庭に眠っている楽器はありませんか？ =

NPO 法人国境なき楽団では、音楽ボランティアのひとつとして、世界の子どもたちに楽器をおくる活動をしています。生活環境の厳しいところで暮らす子どもたちに日本で不要になった楽器を贈り、音を奏でることによって心の調和が育まれることを願っています。2006年は、2月にフィリピンの孤児院とストリートチルドレン保護施設へ、5月にマレーシアの障害児施設に届け、7月にはザンビアのエイズ孤児施設に、秋にインドネシアの障害者の施設に送ります。又、10月20~23日、マニラに楽器を届けに行くツアーを催行します。マニラではチャリティコンサートも実施します。一般の参加者も募集しています。3泊4日で料金は82800円です。

笛やハーモニカ・ピアノなどの小さな楽器から、ギターや太鼓などの大きな楽器まで、寄付してくださる方はご一報下さい。メンテナンスや送料などにも費用がかかる活動ですが、楽器を待っているたくさんの笑顔に応えるため、資金面でのご協力もお願いできれば幸いです。ホームページで活動の様子をご覧ください。温かいご支援、お待ちしております。

歌手・国境なき楽団代表 庄野真代

「翔んでイスタンブール」の大ヒットを飛ばした庄野さんと、音痴のアマダイが、何故かメル友になりました。加藤登紀子さんと、小島敏郎君(環境省地球環境審議官、●の次の三鷹寮委員長)に感謝しなければなりません。登紀子さんのロシアレストランでのパーティで小島君に紹介していただき、音楽と生活を貫く、「環境と貧困」に対する想いに共感するもの、大です。一緒に応援して、心豊かになっていただければと思います。

ご入金先: 郵便振替 00110-7-279888 国境なき楽団 連絡先: 〒150-0044 東京都渋谷区

円山町 5-4 フィールA渋谷802 特定非営利活動法人国境なき楽団 TEL: 03-3462-2007 FAX:
03-3462-2003 Email: info@gakudan.or.jp です。

どうぞよろしく申し上げます。庄野真代 <http://park16.wakwak.com/~mayo/>

国境なき楽団 <http://www.gakudan.or.jp>

翔んでケニア！…一緒に植樹に行きませんか？

「地球に暮らす一人ひとりが行動をとってこそ、時代は変わります。」

～ワンガリ・マータイ(ケニア環境省副大臣・ノーベル平和賞受賞)～

三鷹の寮で一年先輩で大蔵省(現財務省)OBの宮村智さんが、NTT常務からケニア大使に転出、在任中に一度ケニアにと思っていたところ、イオン環境財団からケニア植樹ツアーの案内が届く。イオンの海外植樹ツアーには中国・万里の長城、カンボジア・アンコールワット、マレーシア・ボルネオと何度か参加、普通のパッケージツアーでは行けないような所に足を踏み入れることができ、現地の人々の生の声を聞き、交流できる。植える木の数だけだったら、お金を寄付した方が効率的だが、フェーストーフフェイスでお互い触れ合えるのは何よりだ。

ケニアに飛ぼう！と心に決め、ナイロビの宮村大使にメールした積りが、東京から返事。休暇中で、明後日、6月2日のS40年・41年入寮合同同期会に出席するという。大使と一緒にケニアで植樹を！同期の皆にも呼びかけよう！イオン環境財団の神尾事務局長にパンフレット60部宅配してもらおう。さっそく同期の新生銀行系ファンドの飯田徳松君や、弁護士の国生肇君など、3、4名が手を上げる。植樹だけでなく、キリマンジャロの麓の「アンボセリ国立公園」でサファリなどの観光もする。フラミンゴで有名で、ペリカンなどを含め鳥の種類が豊富なバードウォッチのメッカ、国立公園ナクル湖にも行く。バードウォッチが趣味の大川政策投資銀行副総裁も興味ありのよう。7月にナイロビで神尾さんが宮村大使を訪問することになる。

ナイロビ郊外の、島根県出身で元日本大使館職員の菊本照子さん(60)が作った孤児院「マトマイニ(スワヒリ語で『希望』)・ホーム」の記事(4月20日朝日新聞朝刊)を読んだ。19年間で85人の孤児が社会に巣立ち、その子達も運営に参加しているという。見学できないか？神尾さんに提案する。「ナイロビには一日もいたくないんです」と彼女。「どうして？」暢気に返す。「危ないのに、夜平気で出かける男の人がいるんです！」きつい声が返る。「自分の金で外国にまで木を植えに行く人が、そんなことするの？」、「いるんですよ！」、「そうですね！恋はするもので、お金で買うものじゃないよね！」ということで、ネオン瞬く巷を徘徊したい御仁は全く歓迎されないということを、念のために。残念だが、「マトマイニ・ホーム」は又の機会にしよう！

ケニア植樹参加者募集！

イオン環境財団設立15周年記念式典で植樹にかける想い、地球への感謝の気持ちを語り、深い感銘を与えたケニア環境省副大臣ワンガリ・マータイさんへのお礼の意味をこめ、彼女の進めるグリーンベルト運動の一助となるべく、ボランティアを募りケニアでの植樹を実施します。

マータイさんの少女時代はどこでも森があり薪が豊富にあったにもかかわらず、きれいな飲み水を与えた森の木が伐採されてしまいました。途上国の女性が切望しているのは、子供の頃と劇的に

変わってしまった環境を元に戻したいということです。応援を御願います！

日程：2006年11月18日(土)～25日(土) 発着：羽田空港/関西空港

申込・問合せ先 (財)イオン環境財団 〒261-8515 千葉市美浜区中瀬 1 丁目 5 番地1 Tel:
043-212-6022 Fax:043-212-6815 e-mail:ef@aeon.info <http://www.aeon.info/ef>

アマダイ通信NO.53

(Tile fish network letter)

06年水温む頃

カルタゴの丘に立ち、砂漠のバラに感動する

バラの花ピラのように複雑な襞のついた、様々な形、大きさの、半透明なベージュ色の綺麗な石が、チェニジアの市場や、土産物屋で売られている。その名も砂漠のバラ。砂の下深く、7メートルほど掘ると鍾乳洞のようなものが出現する。そこに気の遠くなるような長年月をかけ硫酸カルシウムが結晶したという。貧しい砂漠の原住民ベルベル人が掘り出して売る。成長の途次深い闇の世界から掘り出され、砂漠の厳しい陽射しを浴びても長い眠りから覚めぬまま、砂漠のローズは二束三文で買われて行く。3個1ディナール(約90円)！これ3個。小振りの石を選び出すと、3個1ディナールはこの一番小さいやつだよ！じゃこれは？2でいいよ！OK！商談成立。すると隣で石を並べる親父が擦り寄る。この大きいのはどうだ？3個買ったからいいよ！🐟が返す。安いよ！大きい方が見栄えがいいな！さっきは小さい方が持ち帰るのに都合いいと思ったのだが、事務所の熱帯魚の水槽で砂漠のローズが咲く様を想像してしまう。幾らだい？How much?英語が🐟の口から飛び出す。若い時、十年以上勉強して、シェークスピアまで翻訳させられたのだ。これくらいの英語はまだ自然に出てくる。これくらいしか話せないのが、日本の英語教育の問題だ、情けない！そんなことまで考える🐟に、1ディナールでどうだ！と迫る親父。OK！あー荷物が増えてしまった！内なる🐟が嘆く。

高校の時、世界史を取っておくんだって、後悔しても始まらない。学生時代だって、マルクスと対するのにも、同じ反省をした。カント、ヘーゲル、フォイエルバッハ、更にはアリストテレス、プラトンと遡る西洋哲学の素養の無さを嘆いた。年末・年始の休みにチェニジア・モロッコのマグレブ2国を旅する直前、慌てて関連書籍を数冊手に入れ携行する。チェニジアと言えばカルタゴ、カルタゴと言えばハンニバル。紀元前2世紀、第二次ポエニ戦役で、ローマ相手に互角に戦った。地中海をスペインに渡り、アルプスを象と共に越え、イタリア南端にまで達し、ローマを背後から脅かした。ようやくハンニバルを打ち負かしてローマは地中海世界の覇権を握り、帝国の形成に踏み出すことができた。歴史に“もし”は禁句だが、ハンニバルが時を稼いで戦力強化を図るのではなく、万が一の可能性に賭け、勢いに乗じ堅忍不拔のローマを一挙に突き打ち破っていたら、世界の歴史は大きく変わったかもしれない。チュニス郊外カルタゴには盛時を偲ばせるものはほとんどない。

あるのは征服者ローマの時代の遺跡だ。血しぶき飛び、阿鼻叫喚がこだま、炎に包まれ、焦土と化したカルタゴの丘の先には、その昔と変わらず、地中海の紺碧の海が広がる。

カルタゴの辺境に過ぎなかったモロッコも然り。間のアルジェリアを措いて、両国がツアー目的地に選ばれたことから、比較的政情は安定している。だが街中を馬車が走り、子供が手を出しては金をねだる。物乞いまがいの物売りが多いことを考えても、経済の停滞は覆うべくも無い。支配者がローマからオスマントルコに変わっても、強大な帝国の属領として繁栄した両国だが、その面影はない。そのまま周りの進歩に取り残されたと表現すべきか？栄枯盛衰は世の定めとはいえ、回教圏のおしなべての貧しさは何故か？一見時間がゆったり流れ、他人のために使う時間よりも自分と家族のために使う時間が圧倒的に多い。この半世紀、豊かな生活を獲得した日本人が失ってしまったものを、まだ持っているような生活だ。だが人口の少なからぬ部分が欧米に出稼ぎしたり、移民したりするのは、彼ら自身、今の生活に満足していないということだ。古代から中世の交易経済、農業に基礎をおいた重商主義経済の時代に、地の利を得て繁栄を謳歌したが、近世に入り産業革命を経ぬまま資本主義経済から取り残され、その相克が今、世界を大きな不安で蔽っている。

アマダイ通信NO.52

(Tile fish network letter)

06年元旦

璃江下りは春秋の昔から

上海で暮らす娘に会おうと、11月末に上海経由の桂林ツアーに参加する。娘も桂林でツアーに合流する筈が、その前に日本に帰って来て、成田から一緒に出発し、成田に一緒に帰ってくる。娘と一緒に楽しいが、いささか複雑。

広州を半日観光して、夕食後桂林に飛び、翌日天下の景勝璃江を船で下る。山青くして水清く、トンガリ帽子の山々を見遣り、船上で杯を重ねる。船尾で大鍋を使う、2、3階建ての観光船が行き交う。パンツ一枚で水浴びする子あれば、魚獲る鵜あり、群れ泳ぐ家鴨あれば、草食む水牛も。女は水辺で洗い、男は筏で漁し、我は川海老をビール友とする。竹を束ねた筏に椅子並べ、川に棹差し客運ぶ者、数十頭の水牛の横で佇む老人あり。春秋の昔もかくありしか？酔いは進み、船は往き、時は流れ、向き合う娘は何思う。26才の誕生日だ。上海に残るか東京か？筏の上の客の如く。

人は変わるもので、人間性は多面的だから、一人の異性を愛し通すのは美しいけれど、そのためには、お互いの変化に向きあう努力が必要だ。時に別れも悪いことではない。まして、歴史も制度も文化も違えば尚更だ。近世から近代にかけ、産業社会の形成と共に確立した一夫一婦制はそれを前提にしていなくても、源氏物語のように中世以前の母系制社会の通い婚では一妻多夫、一夫多妻も珍しくはない。規格品大量生産の産業社会から情報社会に変わる過程で、婚姻制度の矛盾も露呈し、少子化や同姓婚が現実化している。現

実と形式がずれているのだ。勿論中世では沢山の妻の所に通う貴族がいる一方で、荘園に縛られ家庭を作れない農奴が多くいた。生産力の発達した現代は、男女それぞれの自立が進み、結婚しなくても経済的には不都合は少なくなった。経済的な要因がなくなれば、男と女は、人間として、男として、女としての存在価値自体が問われるようになる。

腐敗と腿癢と欲望渦巻く魔都上海

豫園の緑波楼の小ロンポーに舌鼓打ち、ツアーから離脱。ヒルトンの裏、安静楼の中華料理店で娘の知合いと十五人で卓を囲む。フカヒレスープに、アワビや上海蟹も出て、日本の美味しい中華料理店くらい、まあまあの味だ。パックツアーの中華料理とは大違い。上海蟹も、子供の頃獲って遊んだモクズ蟹じゃないか。小さくて食べにくく、日本じゃすり潰して出汁にしかしない。昨年食べた時は美味しいと思わなかったが、手足は締め、蟹みそだけ食べると美味しい。今回は近ツリだったが、3泊4日で12万円も？払っている。もっと美味しいところへ案内して欲しい。談論風発、紹興酒を何本もお代わりして、一人200元（3千円）。オーナーの中国人ママとスポンサーの日本人。建築業を営み、日本で水商売していたママと子をなす。他は若き日本人駐在員男女。「持ち帰り自由」の女付き個室カラオケやキャバクラで接待して、夜中までよく働くのよ。女買うのが楽しみで日本から出張して来るからね。V字回復著しく、中国に沢山工場を持つ真似下電器なんかも、取引先にキャバクラを作らしたりしているよ。わかったようなことを言う娘。六月に豫園の他の店で昼食を取った時も、日本の親父と中国の若い娘の不釣り合いな一団が親しげに卓を囲み、遅い朝食？をとっていた。恋は買うものではないと思うのだが。

上海一の繁華街南京路を歩くと、ROLEX 三個千円などと、男が次々寄って来る。何故か日本人だとわかるらしい。日本から撤退したカルフルも上海では成功している。フランスと中国の国民性に共通するところが多いのか？生鮮品売り場に大きな蛙。無蓋の箱の中でじっとしている。写真を撮ると制止される。カルフルの近くには日本人が沢山住む。日本語の会話を耳にして少し歩き、交差点を折れるとビデオ屋。娘がDVDを沢山買う。一枚20元均一。日本の物には中国語の字幕がつく。新作と並び百恵も微笑む。タクシーもいい稼ぎになる。数が少ないのか捕まえるのが大変だ。手を上げて車が寄って来る。捕まえた喜びと、スッと前に出て来て手を上げた人間に横取りされる。停まるタクシーの横にピタットついて、客が金払ってる間にとにかく乗り込んでしまう。お先にどうぞ！などと日本流にやっていたら何時まで経っても乗れやしない。交差点でも我先にと車が突っ込んで来て、身動きつかなくなる。二百元出すと簡単に免許を買えるという。法規を守り、秩序正しく譲り合った方がスムーズにいき、効率的と思うのだが。

日本に発つ朝、時間があるというので展覧中心なる所へ案内される。ソ連が造ったテレジアンイエローのクラシックで立派な建物。上海万博の事務局だという。部長なる人物が案内。古代からの財宝、文化財が展示され博物館のよう。奥へ進むとお土産屋。飾り棚いっぱい唐三彩等の工芸品や宝玉やらが一山送料込み百万円という。六月に義兄が八十万

円で買った。向こうも干場さんですね、と思い出してお土産をくれる。役所なのか土産物屋なのか？この妖しさがたまらないと娘。先生や消防士なんかの公務員は月給千元くらいの薄給だから、賄賂もはびこる。

アマダイ通信NO.51

(Tile fish network letter)

05年 黄葉む季節に

満天の星空に歓喜の叫びがこだまする！

気候、風土も全く違い、宗教も違う7月のシルクロードの旅では、見る物全てが新しかった。中国の内陸深く、大陸性気候で昼暑く夜涼しい新疆では、朝9時から午後1時まで働き、暑い盛りの1時から4時までは昼休み。家に帰り食事と昼寝。4時から8時まで又、働く。エジプトなども同じだ。日中暑く朝晩涼しいので、合理的な働き方なのだ。食事は屋台ですること多い。トルファンのナイトバザールは、羊肉を串刺しにして焼いたケバブで地ビールをやる客で、大賑わいだった。羊肉を焼く煙の渦巻きの中で話しが弾む。水資源に恵まれないので、皿を洗うバケツの中はとも見られたものではないが、今回初めて屋台で一杯やっても不思議とお腹を壊さなかった。

年の三分の一は中国で暮らす「緑の地球ネットワーク」(GEN)の高見君は、1回お腹壊すと二回目からは大丈夫だと言うが、中国へ行き始めて5回くらいまではお腹を壊した。北京から西へ3百キロ、GENが植樹活動を展開する、衛生状態の悪い山西省の農村地帯を歩き回るせいか？村ではザックのトイレトペーパー1巻を手に列を離れ、トモロコシ畑やヒマワリ畑に消えればいいが、町ではそうは行かない。トイレ探しに苦労する。かって北京で能代高校同級生の杉山(旧姓佐藤)さんの華僑村の高層マンションで夕食をご馳走になった帰り、タクシーが捉らず歩いている内急にお尻がモゾモゾ、あちこちトイレを探してもみつからない。夜遅くシトシト雨も降り人通りがないのを幸い、マンション街の芝生の奥の植え込みの陰で用を足して、助かったと胸を撫で下ろしたのだが、高見君からは、干場は北京のど真ん中で野グソをしたと今もってからかわれる。

それに公衆トイレを見つけても猛烈に匂い、見ただけで吐き気がする。視覚と嗅覚を麻痺させないと用を足せない。ウルムチからトルファンに向かう途中、風がビュービュー吹き抜ける荒野に、風車が数百基並ぶ広大な風力発電基地がある。見晴らしのいい道の脇に駐車場と公衆トイレがあるが、アマダイは視覚と嗅覚を麻痺させることができず、思わずトイレを飛び出し、行儀悪く裏で立ったまますませた。テンコ盛りの強烈な光景と猛烈な臭気に、便意が負けてしまった。それでも今回は屋台で飲み食いしても大丈夫で助かった。中国もこれで7、8回目、視覚と嗅覚は別として、胃腸は中国人並みに鍛えられたということか？中国のトイレも北京五輪までに少しは改善されるだろうが、有人宇宙船の排泄を上手く処理できても？地上の排泄に苦労するアンバランスな国である。

トルファンのナイトバザールも、11時過ぎると潮が引くように人気がなくなる。雨が少なく湿度が低いので満天の星空が綺麗だ。年のせいか異国でも朝早く目が覚める。いつものようにホテルの周りを散歩する。前日の夜はメインストリートから葡萄棚の並木を歩いてホテルに入った。いい雰囲気だった。夜が明けてその先を探索しようとする、ホテルの入り口で舗装も葡萄棚も途切れ、デコボコの石コロだらけの道と日干し煉瓦の家が続く、野菜を積んだ馬車が行く。山西省の黄土高原の農村の風景と同じだ。一つだけ違うのは道端や中庭にベッドを置いて、6、7時過ぎまで野天のベッドで寝ているのだ。結構な都会のトルファンの中心部、共産党委員会や市役所のビルの連なる中心市街地の集合住宅も、中庭やテラスにベッドを所狭しと並べて寝ている。雨は降らない、エアコンを備えるほど豊かではない、となれば涼しい戸外で寝ようということだ。治安も悪くないのだろう。子作りも満天の星空の下ですか？頃は7月、夜毎繰り上げられる地上の愛のスペクタクルを、天空の織姫と彦星は如何に？

0元の旅？ようやく豚肉が食べられる！

異教国情緒をたっぷり味わって、新疆・ウイグル自治区の区都ウルムチから、5千メートル級の山々連なる天山山脈を東に越え、敦煌へ。その昔は命がけのシルクロードも一っ飛び。夏というのに山嶺は厚い氷河に覆われ、氷の終わった所から薄っすらと緑が始まり、麓に向けて濃さを増す。広大な斜面に人工的な幾何学紋様が見える辺り、点々と集落が散らばる。山に雪がなくなる辺りから緑は薄くなり、終には影を潜め、一木一草とてない岩山が連なる。風に流される砂が斜面に微妙な曲線を象る。男性的な直線の岩山と女性的な流砂の曲線の対称が素敵だ。男は直に女は曲か！男は正直？男は不動？女は流動？女は曲者？雲ひとつない砂漠の空の上で取り留めもないことを考える。山の背が低く、流砂の斜度も緩くなると突然緑濃いオアシスが開ける、敦煌！中学生の頃、井上靖の小説を読み憧れた血湧き肉踊る世界。「敦煌」、「楼蘭」、「天平の薨」、「白ばんば」と、出る度に貪り読んだ井上文学の世界。放課後の教室で革ちゃん！漢字の多い、難しい本を読んでもらわね！と憧れのお姉さんに声を掛けられると、頬が火照るのを覚えた憧れの地だ！

空港から莫高窟に直行する。入り口に平山郁夫と池田大作の大きな写真。余り見たくない顔だが、神社のお祭りと同じ、大花の御礼！画伯2億円！名誉会長1千万円！と賑々しく額に掛かる。逆じゃない？大作は10億円じゃないの？今を時めく公明党オーナーの創価学会名誉会長の大作先生が一千万円とは！平山教授が敦煌をネタに沢山稼いでいるにしても1千万は少ない。大作先生意外と吝嗇なのか？それとも学会の財政難？話しながら石窟の見事な仏像を見て回る。山西省大同市の雲崗の石窟と並び称される世界遺産だ。数百ある石窟の中で公開されているのは半分にも満たない。更にその中で一般には公開されていないものもある。お昼までの一時間ほどの短い時間で幾つか見終えて、さあ帰ろうという時に45窟の前を通ると扉が開いていて、誰かが叫ぶ。平山画伯の恋人の菩薩だ！普段は閉まっているのだが、特別参観中だという。後ろからついて中に入ろうとするとガイドが

制止する。特別拝観料が200円必要だという。一般参観で既に200円払っている。一つだけ見るのにその上200円？鳩首協議、又来るのも大変と皆200円払うことにする。外の土産物屋で聞くと45窟の菩薩は井上靖の恋人で、平山郁夫の恋人は57窟だという。いずれにしる流麗な曲線で描かれた観音様だ。女は曲線だ！優しさだ？200円払って確認する。飲み代も含め全部込みのツアーなので、これが元を使った最初だ。


敦煌で遅めの昼食を摂る。ここは回教圏ではない。テーブルには豚肉料理も並ぶ。なぜイスラムでは羊は良くて豚は忌み嫌われるのか？アラブの遊牧民にとって豚の毛は織物に適さず、細く短い足では遊牧の長旅もできぬ役立たずだからか？こんなに美味しいのに！昼から白酒を煽る。翌朝西安に飛び昼食後半日観光、兵馬俑は今回はパスし、郊外に車を走らせ、遺跡を見て回る。8時過ぎに大連に着く。海洋性気候だ、緑豊かだが蒸し暑い。煮染まったTシャツを胸までまくり上げたり、上半身裸の短パンで夕涼みをしている。遅い夕食を摂る。テーブルに皿を並べる間もなく、ウエートレスがお土産の売り込みを始める。西安の昼食もそうだった。商売熱心は結構だが、お土産買いにレストランに入った訳ではない！ゆっくり食べさせてよ！この間まで温いビールを栓も抜かずに出してたのに、何て極端にブレる国なのだろう！

アマダイ通信NO.50

(Tile fish network letter)

05年芙蓉咲く

再びバルト海で泳ぎ、からたち日記を合唱！

お盆休みはパック旅行でポーランドとバルト三国に足を伸ばす。この辺りのツアーになると、仲間は海外旅行のベテランばかり。総勢23人のメンバーに、見慣れた人が二人もいる。定年間近かの横浜の小学校の先生の世古口さんは、エジプト、チェコ・ハンガリーと二回も一緒だった。来年からこんな旅行代金の高い時に来ることないじゃない、毎月海外旅行できるじゃないと皆から祝福？されている。大学の不動産学部で建築学を講じる石塚教授は、元東北地方整備局の営繕部長の時にが営業にお伺いした方だ。今回も街並みの研究が目的だと、市街図を手にチェックを怠らない。

ワルシャワでは、加藤登紀子さん一族が経営する表参道のスナガリーでよく飲む地ウオッカ、ズブロッカを飲む。地ビールと交互に口に運ぶが、冷やし方が足りないか、スナガリーで飲む方が美味しい。食べ物も食材の種類、調理法の多彩さ、品数の多さなど和食がいい。朝食はビュッフェ形式で種類が多いが、昼と夜はスープとサラダにメインディッシュがドーンと皿の真ん中に構え、付け合せのポテトなど脇に山盛。メインディッシュは肉が多く、甘いデザートがつく。一品の量は少なくていいから、前菜がもつつき、肉と魚とメインディッシュが二皿つかないか？安いツアーだからか？ 沢山食べたら、消化して排泄しなければならないが、中々トイレが見つからない。男の便器は高くて伸び上がらないとオシッコできない時がある。背が高いから腸も長く、長時間我慢できるのか？日本で

はパチンコ屋のトイレに駆け込む時があるが、パチンコを輸出するか？

オスロのフィヨルドとペテルブルグのバルト海で泳いだことがあるので、今度も海パンを持参する。ワルシャワのホテルのプールでも泳ぐが、やはり海で泳ぎたい。最後の宿泊地、10泊目のエストニアの首都タリンはバルト海沿いだ。一人ツアーを離れ、ホテルからタクシーを20分ほど走らせる。80クローンで700円ほど。沢山の人が遠浅の砂浜で日光浴したり、ビーチバレーに興じたり。泳いでいる人は少ない。ロシアで泳いだ時は人影はまばらだったが、綺麗な娘が数人トップレスで日光浴、得意の？富士フィルム製ポラロイドで撮ってやりツーショットしたが、この娘達は行儀よく水着の胸布もあてている。そして経産の熟女がトドのように寝転がる。意を決し冷たい海に入るも、一人では意気が上がらない。

ツアーメンバーにカップルが多いと、食事の時にどの席に座るかなど気を使う時があるが、今回は一人参加が半分ほどと多い。そのせいもあってか、段々気が合って盛り上がる。ワルシャワでは郊外のショパンの生家の客間でピアノ演奏を楽しむ。カワイのピアノで音楽大学の先生が我々のためにショパンを弾いてくれる。余りクラシックに縁のない🐟だが、先生のCDを買う。バルト三国も音楽が盛んで、冷戦崩壊後、ロシアからの独立運動でも歌が大きな役割を果たした。タリンでの最後の晩餐ではフォークロアを楽しむ。帰りのバスでフォークロアも民謡、シャンソンは演歌、やっぱり和食と演歌と大和撫子だ！との🐟の掛け声で？！からたち日記や青い山脈を大合唱、白夜も更け行く。

ユーロ加盟で生活が苦しくなる！

ワルシャワの町は第二次大戦末期、ナチス占領軍に対する市民の蜂起と抵抗運動、ナチスの徹底した弾圧の結果、市街の85%が破壊された。戦後、内外のポーランド人の寄金と労働奉仕で古い街並みを復元。他の西欧諸国の都市と同じように落ち着いた美しい佇まいだ。5月の連休に行ったルーマニアなどと較べ車も新しく綺麗だ。04年にEUに加盟、一人当たりGDP年間4千ドルと、旧東欧諸国では豊かな方だ。

ポーランドの京都、クラクフへ行く途中の農村地帯は小麦、ライ麦、大麦、オート麦の春蒔き、夏蒔き、秋蒔きと二毛作、三毛作が可能な豊かな穀倉地帯だ。日本より少し小さいくらいの国土に三分の一ほどの人口、ゆったりした敷地の農家は比較的大きく、EU未加盟のルーマニアに較べると豊かだが、屋根はアスファルトルーフィングのシングル葺きやトタン屋根、スレートが多く、瓦葺きが少ないところにチグハグさがある。一昨年夏ウィーンからブダペストに抜けた時、ハンガリーに入ると屋外広告が少なく、家もくすんだ感じで寂しく感じたが、ユーロ加入済みのハンガリーの方が上だ。

ワルシャワからひた走ると広大な平原に農地が広がる。農業地帯の真ん中で国境を越えリトアニアに入ると、一回り小振り、木造のくたびれた感じの農家が多い。バルト三カ国は生活レベルは同じくらいだが、ポーランドに較べると貧しい。幹線道路は舗装されているが、その先の道路は舗装されていない。勤労者の平均月収は2万5千円から3万円ほ

ど、貧富の差が激しく都市と農村の差も大きいので、物価が日本の数分の一でも給料だけでは食べて行けず、時間外や休日のアルバイトが普通のようなのだ。

大企業はユーロに加盟すればビジネスチャンスが増えると歓迎しているが、勤労者は物価が上がると反対が多い。高等教育を受けた者は出稼ぎに行ってしまうので、産業の高度化も進まず農業の比重が高いと言う。西欧も東欧も労働者の間にユーロ参加、EUの拡大・深化に反対する者が多く、企業家に賛成が多いという。

アウシュビッツ~カウナス、歴史に学ぶのか、歴史を繰り返すのか？

ワルシャワ大学の日本語科出身、日本人並みに小柄でスタイルがよい現地ガイドのマーガレットは、日本人男性と結婚している一児の母だ。彼女は、イスラエルからユダヤ人の若者が大挙してやって来ては街やホテルで大騒ぎ、乱暴、狼藉を働き、自分達は被害者だと居直ると非難。ナチスの犠牲になったのはユダヤ人だけではないのに、国のトップもユダヤ人が多いので、過去を謝罪するだけでキチンと対応しないと嘆く。

ユダヤ人を含め28カ国百万人が虐殺されたというアウシュビッツを、日本人唯一の公式ガイド中谷さんの案内で見学。今更ながら人間のおぞましさを痛感する。国民の三分の一の支持しかないナチスが他党を巻き込み連立政権を樹立。権力を握ったヒトラーはナチスの全体主義政策を国の方針として国民を弾圧、侵略戦争に駆り出し、外には排外主義・他民族抑圧を強行した。少数の支持しか得られないヒトラーが権力を握り、ナチスの政策を国家の方針として実行した時、自らの生活の安穩と引き換えに百万人の人間に直接手を下して虐殺したのは、普通の市民であった。暖かい部屋で家族と食卓を囲んで夕食を取り、子供と風呂に入り、愛する妻と身を一つにし、翌朝行ってらっしゃいと収容所に出勤した市民が、馬小屋のような収容室から別れ別れに夫婦、子供を引き出し、身ぐるみ剥いでガス室へと送り込み、金歯や銀歯を抜き取り、残された髪の毛で毛布を編んだ。敷地の中にはドイツ以外の他のヨーロッパ諸国もお金を出して記念館を作り、被害者としてだけではなく、加害者でもあったことの自戒を込めた展示をしている。

リトアニアのカウナスでは大戦初期に杉原地敵領事代理が、シベリア経由でアメリカ大陸に逃れるしか生き残る可能性がなかったユダヤ人に、本国の指示に背いて独断でビザを発行した旧領事館も見学する。次の任地に移動するまで半月間、昼夜を分かたず発行したビザは3千通。救われたユダヤ人は6千人という。戦後イスラエルは日本外務省を追放され、行方が分からなかった杉原を探し出し感謝、表彰する。

だが、なぜユダヤ人がアラブの地からアラブ人を追い出し、分離壁を巡らせ、彼らを狭い所に押し込めるのか？自分達がナチスにされたと同じことをアラブでするのか？杉原地敵に救われたユダヤ人の中には建国後のイスラエルで宗教大臣を勤め、中心になって杉原を探し出した人物もいる。人間は歴史に学ぶことのできる動物なのか？ただ歴史を繰り返すだけなのか？

羽田 関空 北京 ウルムチ、日に3回空を飛ぶ

7月半ば、駒場の中国語クラスの1年先輩の辰野さんが専務をする大阪の商社、(株)辰野が地下ショッピングモールを経営する新疆・ウイグル自治区を視察。日に3回も飛行機に乗る苦勞を思ったか、香り高い白酒と、雨、ウイグル美人が出迎えてくれる。区都ウルムチは250万の人口を誇り、石油、石炭、金属などの地下資源が豊富。発展を象徴するかの如く高層ビルが聳える。が、雨は珍しい。不足する水は隣国ロシアから買う。第二の都市トルファンへ。砂漠のオアシスで人口20万、中国の葡萄の60%を産し、干し葡萄が名物。長大な地下水路カレイズで、天山山脈の雪融けの伏流水を引き灌漑する。

ウルムチからトルファンは西遊記とシルクロードの世界だ。夏の天山山脈は山頂の氷河をのぞけば禿山だ。麓には緑の平原が広がり、羊や牛が草を食み、ウイグル族がゲルの天幕に住み遊牧する。中国の死海、塩湖が見える。山を越えると賽の河原だ。見渡す限り、遙か遠くまで一木一草生えず、石ころだらけの不毛の地に風だけが、ビュービュー吹く。食べる物もなく、飲む水もなく、三蔵法師が生きて越えたのは奇跡だったろう石野原を、車で数時間。高速道路が貫く。もう一度峠を越えると細い川が流れ出し、河原の幅が広がると突然緑のオアシスが開ける。トルファンだ。

世界遺産の砦跡の入り口で駱駝タクシーを降りると、“私はMariko!”と叫ぶ声がある。妹の真理子か？初恋のマリちゃんか？駒場共闘のマドンナか？ドキッとす。物売りの少女だ。日本人がふざけて教えたらしい。三つで千円！と民族帽を手にバスまで追いかけて来る。その先は火焰山。真っ赤な砂礫の山が無限に続く。三蔵法師も空飛ぶ絨毯か、タケコプターでもと思ったか？中国と日本の時差は1時間。ホテルには堂々と新疆時間の時計。中国標準時の北京時間と2時間差。東京＝北京より、北京＝ウイグルが遠い。ごったがえす夜のマーケットでケバブをつまみ、ビールを飲む。ソラ豆売りの少女にポラロイドを撮ってやる。名前は？紙に書いて！と差し出すと、文字は書けない、学校には行かないと、悲しく首を振る。悪いことをした。ソラ豆をつまみ昼のMarikoを思い出す。帽子を買ってやれば良かった。昼は観光地で土産物、夜は市場。学校に行けない筈だ。

新疆は東トルキスタン独立運動をテーマにした、船戸与一「流砂の塔」(新潮文庫)の舞台だ。区長、市長はウイグル人だがお飾りで、漢人の副区長、副市長が実権を握り、共産党の書記は漢人だ。大学入試も少数民族優先で下駄をはかせるが、生活が苦しければ小学校にも行けない。元々トルコ系のウイグル人は遊牧民で、草を求める羊を追って自由に生きて来たのに、柵なんか作って土地を囲い耕作する。かつて旧ソ連の各共和国と自由に行き来できたのに、国境管理を厳しくされ遊牧もままならず、生活が基礎から脅かされる。石油などの地下資源を目当てに漢人の企業家から失業者まで出稼ぎに来て、資源を奪い取ろうとする。ウイグル人は皆漢民族を憎んでいる。新疆が長い初老の日本人が語る。地下組織東トルキスタン独立連盟が結成され、ウルムチ、トルファン、カシュガルで爆弾が炸裂する。98年1月1日にオープンした全長139m、幅24mの一の字形の地下街。中央通路の両側に内外の最新ファッションを売る32の直営店舗を展開し、初期投資10億

円で年間売り上げ10億円。二期工事完成後はT字型で3倍の規模になる。一番怖いのは爆弾だ。幸いこのところ爆弾テロは聞かない。豪華な石造り10階建てのウルムチ市庁舎の最上階で市長と面会する。男女の副市長が控える。🐟も茶を啜る。Marikoは、ソラ豆売りの少女は、今、この時、どうしているのだろうか？

アマダイ通信NO.49

(Tile fish network letter)

05年ムクゲ咲く

知人・友人各位

中国やインドなども招かれたサミットの初日にロンドンで同時爆弾テロが起き、今更ながら国家間の、そして国民間の絶望的な亀裂の深さが確認された。BRICSと持て囃される国々でさえ、食うや食わずの多くの国民を抱え、テロ対策に腐心する。それらの国も含めてのテロ対策共同宣言は、国家を超えた戦争の時代に入ったということなのか？

思えば、人間として生まれた者同士が、食し合わなくなったのは何時頃からだろう？なぜ人は人を食べないのか？数多の人間が飢えて死んでいくこの地球上で、鱻腹食べてぬくぬくと肥え太るのは、人を食って生きているような気がしないでもない。冒頭から人を買ったような話で恐縮だが、ビールの喉越しの良さに釣られての暴飲暴食、反省はしても中々止められない。

資本による世界革命と労働者の一国革命、資本は国家の壁を越えられるか？


フランスの国民投票でEU憲法の批准が拒否され、冷戦体制の崩壊後、破竹の勢いで進んだEUの東方への拡大と統合も一頓挫した感がある。EUの運動は、独・仏間で戦争の原因となった鉄鋼と石炭を共同で管理することで、戦争の原因を無くそうとすることから始まった。が、冷戦体制の崩壊後急速にEUは旧東欧諸国に拡大し、単一通貨ユーロを採用することで、一人当たりの国民総生産で10倍以上も格差のある諸国の経済が統合される、労働力と資本の移動が自由になる、国境の壁がなくなるということに、先進国フランスの労働者がノーと言い、オランダの国民もノーと言った訳である。


無限に自己増殖を繰り返すことで利潤の最大化を図ろうとする資本の運動は、市場の拡大と安価な労働力を求めて、国家の壁を越え、無意識に均一な世界を創ろうとする。他方、日々消失する労働力を少しでも高く売ること、より豊かな生活を実現しようとする先進国の労働者は、労働力市場への供給の制限を求め、国境の壁を低くすることに抵抗する。国家の枠の中で労働力を高く売る、労働分配率の上昇、分配の平等を求める。恰も資本がグローバルゼーションという名の世界革命を目指し、労働者が一国革命を求める。資本がEUの拡大と統合の深化を求め、先進国労働者がそれを拒否する現状をみると、何やらそんな気がしてくる。

かってマルクスは労働者階級による世界革命を唱え、労働者はインターナショナルを歌

い、国際連帯を訴えた。だが今、世界中を巡り歩いてもインターナショナルの歌声を聞くことはない。相変わらず社会主義国家を標榜し、共産党による一党独裁を堅持する中国においてさえ、インターナショナルを歌うように誘われたことはないし、聞いたこともない。今や愛国主義が声高に叫ばれ、国益を主張するのに急である。“立て飢えたる者よ！”、今や世界中に飢える者は皆無なのだろうか？

上海で結婚式？何を着るんだ？

娘の結婚式前日の6月3日は東大三鷹寮の40年、41年入寮生の合同同期会。40年入寮の小林節さんが社長をする皇居前のパレスホテルの、ファーストスクエア宴を1年前に予約済みだ。美味しい料理に舌鼓を打ち、小林社長差し入れのワインで話に花が咲く。40年入寮の森林総研理事の桜井尚武さんが、二次会は八重洲の・・・と大声で案内しているが、明日のフライトに遅れたら娘に一生恨まれる。一次会だけで切り上げる。だけ式当日の朝上海に向かう。十時半離陸だから、九時に着けばいいだろう。律儀に二時間前に成田行くことはない。五時起きして準備、カミさんに言われた様に猫のトイレを掃除、餌と水もたっぷりやる。六時にタクシーを呼び、小平の駅に向かう。成田に九時近くに着きカウンターでチケットを受け取ると、十時発の便だという。勘違いしていたらしい。慌てて手続きして搭乗する。このところ信頼度を落しているJALだが、定刻通り正午過ぎに浦東空港に降り立つ。大丈夫、間に合う。ホテルへ向かう。

3時から花園飯店（ホテルオークラ上海）の前庭の、市民公園の芝生の上で人前結婚式だ。花嫁と花婿はそれぞれウエディングドレスとタキシード、日本在住の花婿の父は黒の礼服、娘の言を信じたは紺のスーツと、少しチグハグだ。結婚式の価値は服装で決まる訳ではない。想いの深さだ、と気持ちを励ます。上海の六月の晴れた空から照りつける日差しはきつく、優に30度は超えている。結婚行進曲の生演奏の中、バージンロードを娘と腕を組んで歩く。リハーサルなしなので、足が合わない。額に汗が走るのは暑さのせいかな？花嫁はドレスの裾を踏んで時々前のめりになる。上海市民の見守る中、新郎と新婦が指輪を交換し、接吻を交わして結婚式は無事終わる。

中国では結婚披露宴もただ飲むだけだと聞いていたが、花婿もタキシードから中国服、花嫁はウエディングドレスからチャイナドレスを二度着替え、蛍光のシャンパンが幾つものグラスを流れ落ち、ケーキカットあり、キャンドルサービス、花束贈呈・・・と、客の服装こそ思い思いで、親の出番も少ないが、日本と余り変わらない感じで盛り上がる。聞けばプロデュースしているのは、日本のワタベウエディングだという。日本の少子化と中国の経済発展に対応、富裕層を対象に、商魂逞しく上海に進出している訳だ。結婚費用も日本と余り変わらない。最後に二人一組の獅子舞が二組登場して、賑やかなジ・エンドとなったのは中国流？

帯路（タイロウ）100元

結婚式の後、親類縁者で上海から杭州へ200キロ、かつての南宋150年の都、人口180万の浙江省の省都へ、大湖へ、朝の通勤ラッシュと逆行し高速道路をひた走る。ラッシュも終わると道が片側三車線から二車線になり、上海郊外から松江へ。水路の発達する工場地帯にところどころ小麦畑や水田が顔を出し、次いで農村と工場地帯の繰り返しとなり、集落が切れ目なく続く。

小麦を刈り取る者があれば、切り株や籾殻に火を放つ者、水田を粗起こしする者。水を張る田圃もある。乾燥した北の黄河流域とは異なる風景が車窓を流れる。南船北馬だ。小麦と米の二毛作だが耕地は狭く、人力で耕している。耕運機などの機械どころか、農耕用の牛や馬も見かけない。農業の生産性も生産力も低そうだが、その割には3、4階建ての立派な家が立ち並ぶ。屋根にステンレスの大きな玉を3、4個くっつけたアンテナか避雷針のような物が軒並み付く。ガイドに聞くと単なる飾りで、避雷針どころか雷が落ちるといふ。外資などの工場が多く、道路も恰幅中で建設投資も盛ん。農外所得で潤っているのか？父ちゃん、母ちゃんは工場で働き、爺ちゃん、婆ちゃんの二ちゃん農業か？

春先に上海に来た時に寄った蘇州への百キロの道は工事中で、杭州へ行くのと同じくらい時間がかかったが、今回は快適にドライブできた。所々にサービスエリアがあり、給油や簡単な食事ができる。土産物の他に本もおいてある。トイレも綺麗だ。トイレと給油所だけの北京 - 大同間の高速道路のただっ広い駐車場だけのサービスエリアとは大違いだ。日本の高速道路のイメージに近い。杭州の街も蘇州に較べると大きく、綺麗だ。大湖の水はきれいとはいえないが、湖上に船を浮かべるのは漁師か、湖水の遙か向こうには高層ビルが立ち並ぶ。


帰路上海まで20～30キロという辺りで、高速道路の端に手書きの看板を持った人が沢山立っている。上海の地理不案内な地方からのドライバーに、上海の道を案内するアルバイトだという。帯路と言ひ、うまく客が見つければ一度で百元(千300円)稼げる。帰りの交通費は自分持ちで、地下鉄やバスで帰るのだという。

200元の急須を100元に

美味しい中国茶をお土産に欲しいとガイドに言うと、上海の地下鉄1号線の駅の出口脇の茶房に案内される。花茶を急須に入れてお湯を注ぐと、綺麗な花びらが開き、味もいい。お菓子つきで1杯58元、食事付きでも同じだという。茶がメインで食事は添え物だ。沢山あるお茶や菓子をみていると、初老の紳士が流暢な日本語で説明してくれる。随分詳しい、オーナーだろうか。聞くと、常連客で上海日本人商工会の常務理事をしている、店の奥が日本人商工会のサロンになっていて、碁を打っている10組ほどは皆日本人だという。娘の結婚式に出席してくれた駒場の中国語クラスの同級生で、三菱商事上海駐在の宮内君のことも当然のことながら良く知っている。話していく内に、関西の私大を出て上海に留学していた従姉妹の娘が、彼の下で働いていることもわかる。

ここは花茶1個20円で物はいいいが、高いという。ホテルの近くに手頃な店があると教

えてくれる。ガイドに案内してもらおう。5個入り木箱付きで12元、皆が欲しい数を足すと50箱になるが、26箱しかない。直ぐ取り寄せるか、他所の店から融通してもらおうか、どうにかならんかというが、明日でないと入らない、しかも残りは前金をもらわないと取り寄せないと、頑なだ。オーナーらしい人間と何度か電話でやりとりしている。全部売ったら又仕入れるのだから、前金など要らないと思うが埒があかない。店番の娘達には裁量権がないらしい。

ガイドがもう一軒心当たりがあると、浦東に渡る。船着場のレストランの入り口に茶店がある。愛想がいい。ガラスの急須で淹れた花茶を試飲させ、一個2元だという。綺麗なブリキの缶に入れてくれる。探した甲斐があったと皆満足だ。花茶を美味しく味わうにはやはり、ガラスの急須の中で花開く様を眺めながらがいい。急須も欲しくなる。200元だという。それは高い。半値でどうだというと、いいと言う。日本に帰ると高かった、もっと値切るんだと反省するのだが、その場で半値にまけさせると、何となく得した気分になる。彼我の商慣習の違いには何時も戸惑う。が主に生業とする建築工事の現場では単価が桁違いで、値段の交渉は当たり前だが、末端の日用生活品のレベルまで全てゼロからの値段の交渉では疲れるし、時間とエネルギーの無駄遣いではないだろうか？

アマダイ通信NO.48

(Tile fish network letter)

05年紫蘭咲く

EU 拡大 - 平和と連帯か？資本の論理か？・・・ルーマニア・ブルガリアを旅して

昨年の夏、駒場の学生時代からの顔見知り、福井宏一郎君がブルガリア大使を“拝命”。ヘルメットを被り一緒にデモした仲間だが、卒業後は日本開発銀行（現日本政策投資銀行）に入り、世界銀行にも出向、英語の著作もあり、KDDIの理事から大使に転出した。鳥取の倉吉北高出身で、米子東高出身の勝部日出男君（S43年東大三鷹寮入寮）の前々回参議院議員選挙戦で再会。辻恵衆議院議員（S42年三鷹寮入寮）の選挙も一緒に手伝う。

五月の連休はブルガリアの首都ソフィアで福井大使に会おう。ミラノ乗り継ぎのルーマニア・ブルガリアツアーに参加する。北緯40度あたりと緯度は故郷秋田と同じくらいだ。田舎道の両脇にはこでまりやライラックが満開で、真っ赤なアマポーラが彩りを添える。市街地の街路樹にはマロニエの白やピンクの花が咲き誇る。見所のシナイア僧院、世界遺産のイワノボ岩窟教会、リラ修道院などは山懐にある。さわやかな新緑の中を溪流に沿って、バスは登る。雪山も望める。故郷の白神山地を登る趣だ。ルーマニアの田舎道は馬車も走り、街を走る車は旧東欧圏で作られた物が多い上に、錆つき、穴が開くなど日本ではお目にかかれないポンコツもよく見かける。建物も手入れが行き届かず、田舎ではトタン屋根の家が多い。ガイドによれば労働者の平均賃金は月200ユーロ、3万円弱、16%の所得税など色々引かれて手取り150ユーロほど。消費税は一律19%で失業率は6%ほどだが、共稼ぎが多いとのこと。ブルガリアの街を走る車の方が小綺麗で、ベンツやBMW

など西欧の最新の車も結構見かけ、田舎の一軒家もオレンジの瓦やスレートの屋根が多い。ルーマニアよりブルガリアの方が少し暮らし向きが良さそうに見える。

両国もいずれEUに入り、単一通貨ユーロを使うようになる。旅行者にとっては、国境を越える度に両替し、二度と足を踏み入れることもないだろう国の通貨を使い切るために、要らない物を慌てて買って荷物を増やすこともない。しかし、ドイツやフランスと十倍以上も所得格差のあるルーマニアやブルガリアとの国境がなくなり、同じ通貨を使うようになる。東南アジアの国々と日・中・韓の国境がなくなり、共通の通貨を使うようになるのと大差はない。資本は安い生産コストと市場を求めて、低所得国へ流れ、労働者は高い賃金を求めて高所得国へと、殺到する。域内先進国の今でさえ高い失業率は下がり、賃金は上がらない。後進国でも先進国の生産性の高い企業、競争力のある商品の流入で競争力のない企業は淘汰され、経済が混乱する。何十年かして、いや、もっとか？各国民の所得と労働生産性がある程度均衡するようになるまで、この大きな流れは止むことがない。そして持てる者と持たざる者の所得格差は更に拡大する。

二度と戦争を繰り返すな！平和と連帯を！美しい言葉で語られるEU統合も、一皮むけば冷徹な資本の論理の貫徹であり、冷戦体制崩壊による資本原理主義への回帰なのである。敵を失った資本主義が剥きだしの論理で世界中を闊歩する。より多くの富を少数の者が独占し、持たざる多数者との二極分解が進めば、社会の軋轢と抗争が激化しないか？そしていつか、量の変化が質の変化に転化しないか？その時とは？質の転化とは？かつて共にスクラムを組んだ福井大使が、雨上がりのソフィアの街を、黒塗りのリムジンに日の丸の旗をなびかせ、ホテルに迎えに来てくれる。夕陽の差し込む広い大使公邸で、ピアニストの夫人も一緒に、地ビールで乾杯し、チーズとピクルスを肴にワイングラスを傾ける。

大丈夫？杏の花求め北京～大同へ

近代市民革命後も戦争と殺戮、領土争いを激しく繰り返して、血なまぐさく長い抗争の歴史を持つヨーロッパが、それでも、いや、それ故にか？EUの旗の下に一つにまとまろうとする時、たかだかこの百年の歴史をめぐって、日中、日韓の軋轢が急激に高まり、両国で日本に対する激しい抗議行動が繰り返される。その最中、4月25日に北京で緑の地球ネットワーク（GEN）の高見邦雄事務局長（S41年東大三鷹寮入寮）の「ぼくらの村に杏が実った」の中国訳の出版記念会が北京であり、22日から26日まで北京へ。高速道路300キロをタクシーで往復、久しぶりに山西省の大同にまで足を伸ばす。


こんな時に中国へ行って大丈夫なの？多くの人が心配してくれる。日本のマスコミは大騒ぎしているが、上海で2万人のデモと言っても十倍の人口からすれば、日本ではたかだか2千人。昔、我々もしょっちゅうやっていた。しかも“官許”のデモだ。殺されることもあるまい。デモに出くわしたらそれはそれで面白い。いい経験だ。四泊五日の安い北京ツアーをさがす。“権利放棄”して北京には一日しか泊らないので、三ツ星ホテルで十分だ。3月から滞在中の高見君と、大同で拠点の環境林センターや8ヘクタールの新しい苗圃、


植林地のカササギの森、汚水処理施設などを見て回る。癌を手術して以来だ。3年見ない間に植樹した松や檜、サージ（柳葉グミ）も、年降水量4百ミリ、不毛の黄土高原で遅しく育ち、面積も大きく広がっている。92年からでは大同一帯に千6百万本、よく植えたものだ。広い黄土高原からすれば猫の額ほどだが、一粒の麦となるだろう。

呉城村の深い侵食谷の上の台地に、290haの杏の畑が広がる。全耕地面積は440ha。1haあたりの杏の収入は1万5千元から3万元（元はドルに連動、円高なので1元13円ほど）数年後には倍増が期待される。雑穀では3千元以下だ。一人当たりの年間収入も、3百から5百元だったものが去年は千元を越えた。もっとも良かった家では二人で3万元の収入を得ている。2000年に村から初めて大学へ一人進学し、去年は20人を数えるまでになった。間もなく大学院生も生まれるという。この成果を見て近在でも杏を植える農家が増え、呉城郷全体では1200ヘクタール、県全体で6600ヘクタールと、杏畑が広がる。まさに“杏源郷”だ。日本の桜の花見の次は中国で杏の花見だと、大いに期待して来たのだが、今年は例年より寒いらしい。満開になると大同の市街から、花見客が繰り出すというのだが、残念ながらようやくほころび始めたところだ。

毛沢東を日本に連れ帰る！

大同には顧問先の汚水処理会社の社長も同行してくれたので、少しは観光もしなければと、中国三大石窟の一つ雲崗の石窟と、十世紀にできた応県の木塔を見学する。雲崗の石窟が世界遺産に指定されたからか、新しくできた四星の雲崗国際飯店には日本人の団体客も泊っている。人口50万の大同市街への立ち入りは禁止されたとかで、馬車の姿はない。道を拡げてビルを建てて収容したので、大通りには屋台もない。通りに面して衣料や靴、家電などの小綺麗な店が並ぶ。6階建くらいの、エスカレーター付きのスーパーもある。

しかし、表通りから一步横丁に入ると相変わらずだ。狭い道は舗装もされずデコボコで、ゴミが散乱する。各家にはトイレがないので、所々に共用のトイレがあるが、相変わらず暗く汚い。1階から4階まで、全ての窓に鉄格子がついているアパートもある。がドンドン路地を進むと、同行の社長が「干場さん、もう止めましょうよ」と、後ろから心細そうに声を掛けて来る。

応県の木塔の前の門前市では食品、日用雑貨からファッション、家電まで、何でも売っている。土産物屋に毛沢東の小さな立像がある。手に持つとズシリと重い。260元だという。可哀相に最近では土産物屋を除けば天安門くらいでしか見かけない。の人生に大きな影響を与えた、多分、中国の同世代の人間にはもっと影響を与えた毛沢東。表向きは奉られているが、今や評価は地に落ちているようだ。日本に連れ帰ろう！120元に値切って、紙の毛沢東で銅の毛沢東を買う。雲崗の石窟前でも売っている。今度は120元の胸像を40元に値切って買う。